

通頼堀

乃云美·十一月

尚百
三右左門
早振
伊織
安達
元吉右





印メバツ ートツニ ドーコレ

十一月新譜御案内

長 唄 二人 椀 久

三味線
杵屋六左衛門
杵屋佐吉
佐次郎
他お雛子連中

哥 澤 浅 お前くとと一生も

哥 澤 芝 金

御大典奉祝レコード

唱 歌

文部省制定
御大典奉祝唱歌
明治節唱歌
金澤孝次郎

雅 樂

萬歳の榮
大阪雅亮會々員
菊武大檢校

奉 祝 琴 唄

御國の榮
酒井依傳
松島庄三郎

新 日 本 樂

千代の壽
酒井依傳
松島庄三郎

長 唄

今様の望月
他お雛子連中
松島庄三郎

筑 前 琵琶

屋島の嶺
東京 旭嶺
他お雛子連中

俚 謡

米山甚節
新鈴本はがき
尺八 菊池淡子

俚 謡

兩津甚句
千歳家千代子
松本丈吉

俚 謡

出雲騒ぎ
淀本檢一
尺八 他お雛子連中

落 語

寄合の酒
桂春團治
他お雛子連中

落 語

乗物の穴
柳家小三治

映 畫 說 明

サライズ
里見義二郎

映 畫 說 明

俵星立蒼
島津健二

流行唄

ハセレ天ルヤ
二野喜久一代

但唄

佐渡おけさ節
松本丈一

諷刺小唄

淡海行通曲
千歳家千代子

ジャズ

お江戸日本橋
ハッピージャズバンド

和洋合奏

降江戸の唄
金馬ジャズバンド

童 謡

中仙道膝栗毛
片岡正太郎

唱 歌

花嫁人形
藤田文子

唱 歌

樂隊遊び
高岩幸太

唱 歌

軍隊遊兵士
岡本幸太

唱 歌

小さき兵士
片岡正太郎

書 生 節

吞氣な酒飲み
小片岡正太郎

書 生 節

千日前行進曲
寺井金春

流し音曲

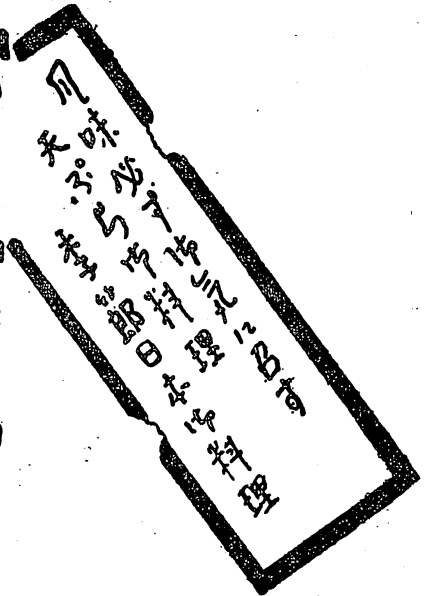
御多崎入關の五本松
富士山組連

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を



吉又屋會食堂



道頓堀戎ばし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町

京都支店 木屋町ドンブリ橋



森田弥



河津菊之丞



市川市園

◇表紙……………(殿下茶屋聚)……………大塚克三畫

◇藍綬褒章御下賜の光榮に浴せる松竹合名社々長白井松次郎◇「大願成就殿下茶屋聚」福鳥天神の森舞臺面(廊治郎の三郎右衛門、箱登羅の宇手助、福助の伊織、延若の元右衛門)延若の元右衛門◇廊治郎の東間三郎右衛門◇心中天網島舞臺面(延若の孫右衛門、福助の女房おさん◇「心中天網島」河庄の舞臺面(魁車の小春、延若の孫右衛門、廊治郎の治兵衛)魁車の小春◇「其常盤千歳壽」舞臺面(長三郎の松の精實は三郎、魁車の太郎冠者)扇雀の鶴の精、章景の織徳、同舞臺面◇伊丹屋金次「舞臺面(中田の金次、辻野の仙公、名越の禿虎)松竹座「奉祝行列」の舞臺面

◇扉……………(心中天網島)……………白井松次郎(二)

御大典を壽ぎて……………白井松次郎(二)

◆芝居物語と脚本◆

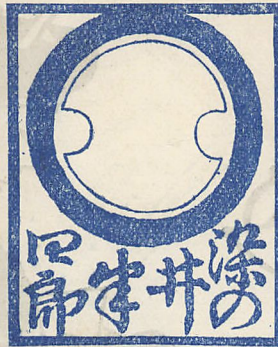
- 芝居物語…大願成就殿下茶屋聚…(中座)……………山上貞一(一四)
- 芝居物語…心中天網島…(中座)……………五百倉節(一四)
- 脚 本…其常盤千歳壽…(中座)……………鶴屋南北(二〇)
- 芝居見儘…伊丹屋金次…(角座)……………村田和緒(六〇)
- あふむ石…殿下茶屋聚…(中座)……………(四七)

◆考證と研究◆

- 「天下茶屋」考證……………渥美清太郎(二六)
- 天下茶屋と天網島……………高安吸江(二八)
- 天下茶屋漫談……………落合浪雄(三〇)
- 漫談殿下茶屋聚……………南木芳太郎(三三)
- 元右衛門の型……………森 ほんほ(三六)



尾上 菊三郎



漆の 井半 日高



中村 八幡

- 續『鴈治郎の場合』……………富田泰彦 (三八)
- 漫談どりの聲……………中井浩水 (四〇)
- 天下茶屋の人々……………高谷伸 (四二)
- 憎んでほしい鴈治郎……………高原慶三 (四五)
- 改作は害作……………藤井紫影 (四八)
- 紙治漫談……………石割松太郎 (五〇)
- 『紙治』三題話……………木谷蓬吟 (五二)
- 『紙治』さまざま……………山本修二 (五四)
- 永遠の魅力……………平井常次郎 (五六)
- 近松二百年祭の思ひ出……………内海幽水 (五八)
- 其常盤千歳壽……………食満南北 (五九)
- 銀が金になつた珍談……………鳥江鏡也 (六六)
- 仕立屋銀次の上場に就て……………本田一郎 (六八)
- 喜劇製造法……………楠本木念仁 (七一)
- 失敗の思ひ出……………志賀廼家淡海 (七三)

◆道頓堀案内◆

- 中座……………(六六)
- 浪花座……………(六七)
- 松竹座……………(七二)
- 角座……………(六八)
- 辨天座……………(七〇)
- 天満八千代座……………(七一)

- ◇編輯後記……………松本泰三 (七六)
- ◇挿繪・カット……………大塚克三



お芝居の幕間と

お歸りにはお揃で

食慾をそゝる初秋のお献立が

お待ち申してゐます

園
梅
園

お芝居でのお食事は食堂にて……………
お歸りには白鷹にて一寸一ぶく江戸すしを……

中座食堂

本店 太左衛門橋北一丁
電話南六二二七番

スキナ脂取紙

あぶら

君ケ代は千代に八千代にさかへませ

私共國民の報恩は健康そのものから生れるのです

その健康に皮膚の衛生に

是非スキナ脂取紙をお使用下さい

道頓堀の各座、及び各地化粧品店に販賣せり

お買求めの節は『スキナ』と御指定を乞ふ



現品縮圖

スキナあぶら取紙

"GREASY SWEAT ABSORBER"

Take off a leaf of Greasy Sweat Absorber and pass over the face. The effect is that all greasy sweat will be soon absorbed and extremely light broom will be left.

本 舗

ス キ ナ 屋 號

中 田 商 店

大 阪

新設
三月

三原商店

三原商店

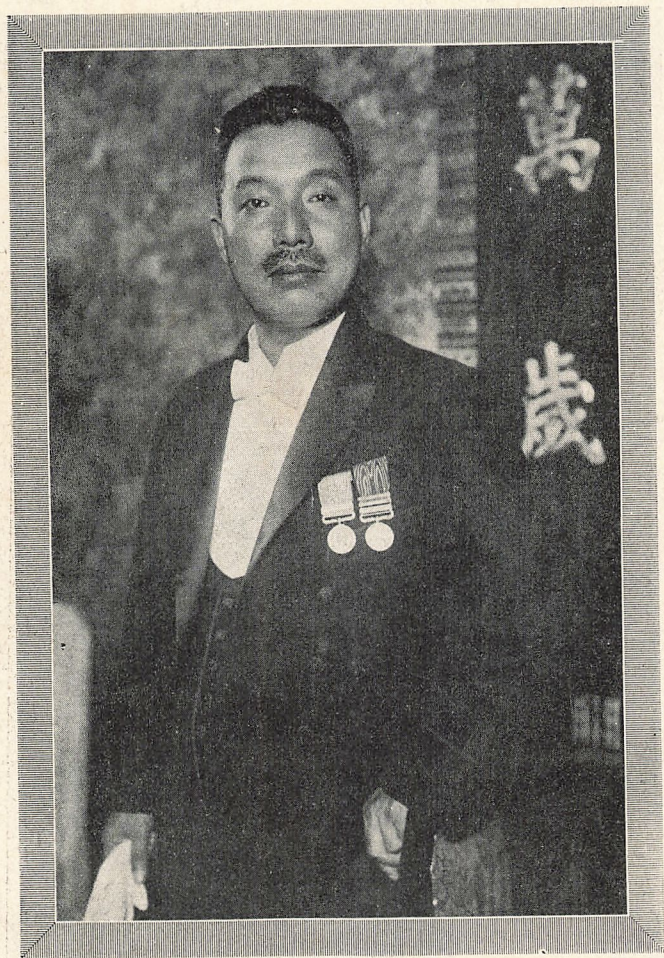
三原商店

神戸市

楠社西門

番五一六一町元

電話



るせ浴に榮光の賜下御章褒授藍

長々社名合竹松

郎次松井白



中座十一月興行

大座 殿下茶屋衆

上……………「殿下茶屋衆」福島天神の森返討の舞臺面
 下……………延若の元右衛門

鷹治郎

東間三郎衛門

箱登羅

宇手助

福助

伊織

延若

元右衛門

祝奉



趣向と風味と典型

御大典御料理

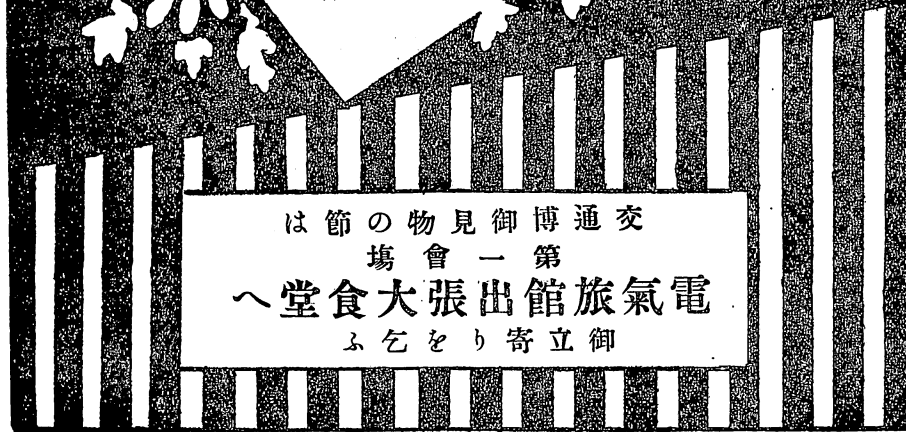
斯曩名代の割烹所

天王寺公園

電気旅館

電話 九百一三三四
五一三三七

交通博覧會の節は
第一會場
電気旅館出張大食堂へ
御立寄りをご利用



近代

都會人的

設施



科學的な料理

音樂的な美酒

繪畫的な女給

民衆	高級	俱樂部	一階	二階	三階
大衆	酒場	宴會	一階	二階	三階
食堂	酒場	宴會	一階	二階	三階

心齋橋南詰

ウタミタシ食堂

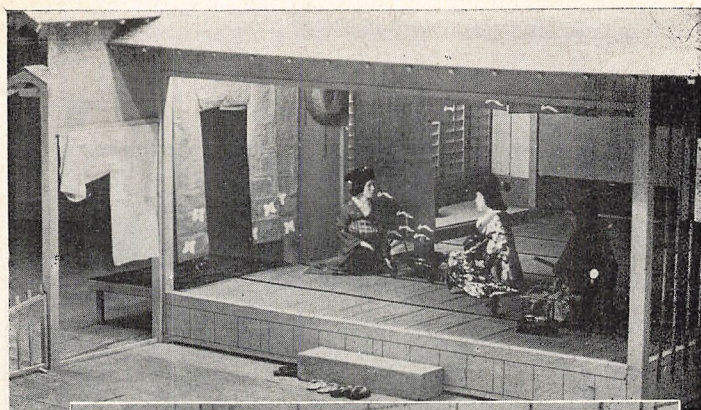
電南五三三番



行興月一十座中

〔衆屋茶下殿〕成大
巖領

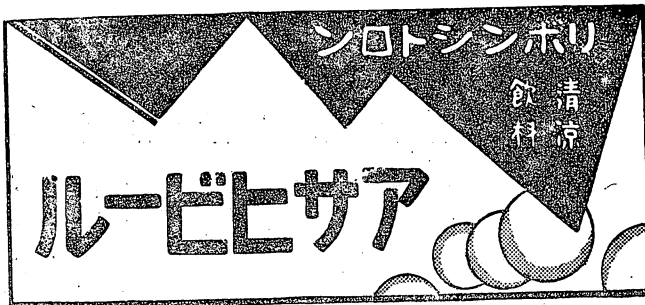
門衛右郎三間東の郎治雁



延若の孫右衛門
魁車の小春
吉三郎の女房



中座十一月興行
「心中天網島」
上……………「心中天網島」の舞臺面
下……………鷹治郎の紙屋治兵衛



Ⓢ 醬油九升詰景品附賣出

謹啓 愈御隆盛の段奉大賀候 毎々格別の御引立御
 愛顧を蒙り難有御厚禮申上候就ては今般左記景品
 付賣出相催候間何卒倍舊の御用命被仰付度伏て御
 願申上候 敬具

昭和參年十一月壹日

日本丸天醬油株式會社

Ⓢ 醬油特約店

大阪高麗橋東詰

各國醬油問屋 今柿浦佐一郎本店

商號 廣佐

電話東三五六二番
 振替口座大阪八四〇六番

- 一、賣出總數 ⑤ 醬油九升詰貳萬樽
- 一、賣出期間 自昭和參年九月 至昭和參年拾貳月
- 一、抽籤期日 昭和四年壹月拾七日
- 一、抽籤方法 特約店并に新聞社員立會の上嚴正公平に舉行

景品

- 一、⑤ 醬油九升樽詰壹樽毎に漏れなく特製清水燒
 番茶器茶碗五個付壹組箱入或は東京中央製菓株
 式會社製カルクツト丸形大罐何れにても御希望
 により壹個添付

副景品

- 一、今 醬油九升樽詰拾樽毎に抽籤券一枚進呈

參貳壹 等 等 參拾圓 貳拾 本
 等 等 參拾圓 四拾 本
 壹千九百四拾本

注意 (抽籤券百枚を以て壹組とし當籤番號各組共通とす)



中座十一月興行

「心中天網島」

上……「心中天網島」紙屋内の場舞臺面

下……「福助の女房おさん」



魁車の小春
延若の孫右衛門
鴈治郎の治兵衛



中座十一月興行

上……「心中天網島」河庄の舞臺面
下……魁車の小春



御^み料^{りょう}

園^{その}

白^{おし}

粉^{ろい}

美しい人氣の中に
ますます輝やく
優良第一の品質

本鋪 伊東胡蝶園

ヒゲタ醤油油

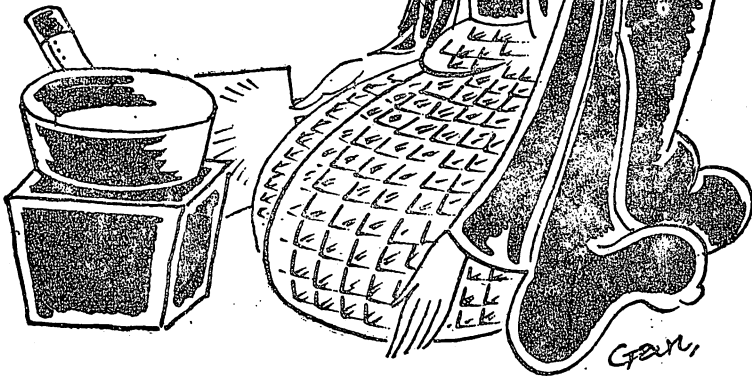


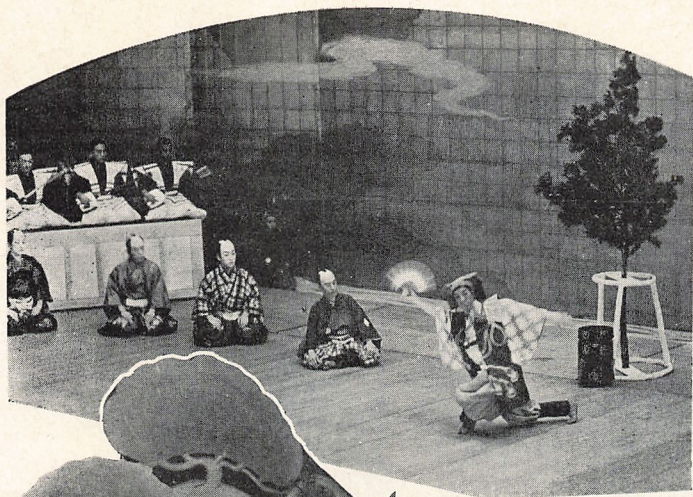
奥様!

上品なお料理の

風味は

ヒゲタが持つて居ります





中座十一月興行

上……「其常盤千歳壽」の舞臺面

長三郎の松の精質は三郎

魁車の太郎冠者

中……扇雀の鶴の精 章景の雛鶴

下……「其常盤千歳壽」の舞臺面





上……角座十一月興行

「伊丹屋金次」の舞臺面

中田の金次、辻野の仙公、名越の禿虎

下
松

竹
座

「奉祝行列」の舞臺面

近 日
封 切

御大典
奉祝映畫

御大典
記念映畫

蒲田超特作品、村上徳三郎原作脚色
島津保次郎 監督

輝

と

昭

和

全三篇

オール、スター、キャスト

蒲田超特作品、野村芳亭監督
日支親善東亞民族提携劇

民

族

の

叫

び

井上正夫、岩田祐吉、筑波雪子主演

オール、スター、キャスト

「婦女界連載」

細田民樹氏原作

愛

人

池田義信監督
栗島すみ子主演

畑耕一原作

牛原虚彦監督

陸

の

王

者

鈴木傳明主演
八雲、田中、助演

松竹キネマ株式会社



裂 小・具道小

貸 衣 裳

素人演藝會

宴會の催物

春秋温習會

婚禮の衣裳

松 竹 衣 裳 部

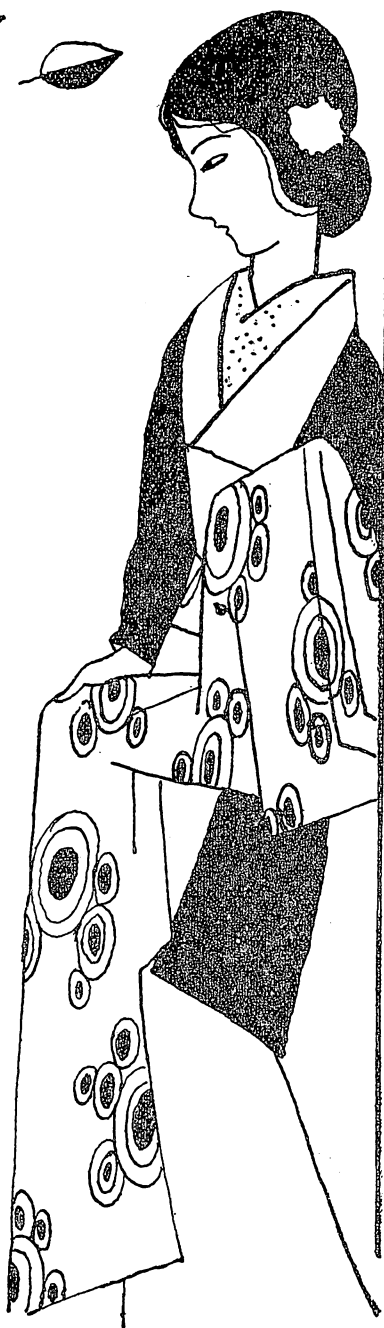
本店 大阪市南區久左衛門町八

電話 南 一七 一八一 番

東京支店

東京市淺草區並木町十五
電話 淺草 五五九 九番

(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい)
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます



櫻
印

肉汁人參葡萄酒



パームオイル 松竹石鹼

日本に初めて
完成せる石鹼

「パームオイル」は純粹の植物性油で絶對に酸性なく、石鹼原料として最も優秀なものであります。

歐米には既に之を主原料とした高級石鹼がありますが、日本では此度發賣された松竹石鹼が全く唯一最初のものであります。

而も松竹石鹼は野村南洋事業部特産の最良「パームオイル」を主原料として居ますから決して目にしみず、肌を荒さず、完全に皮膚を清潔に滑かにします。従て洗粉、クリーム等を使ふ必要は全くありません皮膚の保護上最も有効な石鹼として推奨する事が出来ます

有名化粧品店・小間物店・薬店にあり

製造元 松竹石鹼工場

發賣元 大阪朝日 朝日堂株式会社

十一月號

雜誌·究研劇演·刊內
演類編

第三年

第二十六輯



御大典を壽ぎて

白井松次郎

吾等國民待ちに待つた千載一遇の榮ある佳き日が遂にめぐつて参りました、申上けるも畏こき極みですが、聖上陛下御大典の盛儀を本月京都に於て行はせられるに就て、私どもは本當に心の底からこの神嚴なる此御盛典を奉祝致さねばなりません。

願ひまするに、大正四年、先帝陛下の御大典當時の劇界映畫界は未だ今日のやうに發展もして居りませんでした。丁度當時道頓堀も未だ舊態の劇場ばかりで、その御大典にめぐり會ひました私の光榮を身感じて、それを自分の一劃期としてそれから東京大谷竹次郎と共に大いに劇界の改革映畫界への基礎的勇躍を試みたのです。先づ着手致しましたのは劇場制度の改善で、道頓堀の一二の劇場に椅子席の設け、それから大劇場の改築なき、實に私としては一日にしても休む間もなくこの事に腐心して参りました。次に來た映畫時代の開拓は、同業諸君と共に、輸入映畫の紹介、また日本映畫の製作改良にこれ亦日夜刻苦勉勵の文字通りの活躍を體驗して來ました。道頓堀五座の櫓

を誇つた昔日の殷賑に恥ぢぬ盛観を今は漸やく築きあげるべく努力するのみならず、各劇場の改築も全く成り、また新時代ミ歩調を揃えて次へ次へミ果てしなく進み行く文化の風を追ふ松竹座の建設、それに京都、神戸、名古屋などの各劇場の改築、松竹座五都チーン興行の新興行法など、獨り劇界のみでなく映畫に於ても蒲田、下加茂の撮影所新設、映畫製作上の改善、今いろくミ數へあけるの煩に堪えませんが私としては微力乍ら肩に背負ひ切れぬ程の仕事をして來たミ思ひます。そして、此度、またこの曠古の御大典に會しまして、私としては更に一層奮勵して演劇映畫を以て、國家のため社會のため少しでも貢獻がしたいミ存じます。

本月は道頓堀の劇場は申すに及ばず、各地の松竹經營劇場は擧げて奉祝記念興行ミなし。この佳き日に生れ會す私共の光榮を感じつゝ、魂の底から壽ぎ奉る次第であります。

殊に去る十月二十九日東京大谷竹次郎ミ私に「演劇の向上映畫の製作改良など文化事業に功勞あり」ミされ、有難き勅定の藍綬褒章を御下賜に相成つたことは、これ偏へに私共一家一門の光榮のみではなく、かくの如く演劇映畫界へも垂れ給ふ御聖恩の有難さを沁々感じねばなりません。さきに紺綬褒章並びに飾飯を下賜され、またこの重ねぐの光榮に浴してたゞ感泣してゐる次第であります。

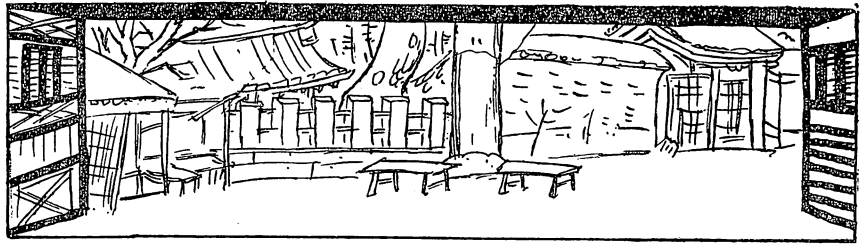
芝居物語語

中座十一月興行上演

大願殿下茶屋聚

成就

山上貞一



實録を申上げます慶長十三年三月三日天下茶屋に於て、浮田中納言秀家の家臣林重次郎、源三郎の兄弟が父の敵である當麻三郎右衛門を討取りました。もごく、三郎右衛門が敵となつたのは即ち秀家の家老職であつた林玄番も同家中の長船家長三郎が争論をしたのが因で、家長も同腹であつた三郎右衛門が慶長五年九月二日の夜立番を月見の馬場で暗討にした。そこで玄番の子である重次郎と源三郎が敵討に出掛けたのでありますが、數年流浪してゐるうちに主家である浮田家は、關ヶ原

の役に會して没落して失つた。そこで兄弟は京都へ上つて公卿に奉公して、千辛萬苦の後三郎右衛門が大坂城内の大野治長の家來になつて伊藤將監に變名してゐるのを突止めたが、兄の重次郎は病態のため無慥にも返り討になりました。弟の源三郎は悲歎やるかたなく下部船幸右衛門の助力を得るに共に、京都筋より大坂城内なる片桐且元、木村長門守の盡力を願つて首尾よく敵を討取つたのであります。單なる敵討物としての興味以上に戻り討といふ悲惨事が加はり添へるに浮田家の没落、公卿の仇討觀、大坂城内に於ける大野と片桐木村の對立といふ當時としてはスケールの雄大なものがあつたので、一段坊間を流布され廣く喧傳されてゐるかに思はれます。世界なり人名は、『近江源氏』の例に慣つて大野は大江入道、片桐は片岡造酒頭、木村は三浦之助であることは勿論で、林重次郎は早瀬伊織、源

三郎は源次郎、當麻は東間三郎右衛門になつてゐます。早瀬の下僕安達元右衛門は今日では大層い、役になつてゐますが、最初はつまらぬ端役であつたのを『忠臣蔵』の定九郎や『先代萩』の男之助も同様に俳優の名工夫によつて大役に仕上げたもので元右衛門も四代目大谷友右衛門に依つて歌舞伎獨特の敵役を仕上つた譯であります。

天明元年十二月大阪の角座で奈河龜助の作で上演されたのがこの『大願成就殿下茶屋聚』で、同じ時に中座では龜助の弟子の七五三助の作で『連歌茶屋 譽文臺』といふのが上演されてゐますが、此の方は初演きりで廢滅し、今日傳つてゐるのは龜助の作の方であります。此度上演の處は三つ目天王寺の場に始まり、五つ目福島天神森の場までで食満南北氏が補訂されたものです。

四天王寺の繁華さと言ふまでもなく佛法最初の靈山であるのは勿論當時の遊山歡樂の唯一の雑沓場です。占ひ見世で八卦を見て貰ふ女、酒店で酔ひしれる男、輕業の鳴物に走る子供、それに交つて急いで来たのは早瀬伊織の妻染の井源次郎の妻葉末で二人は夫の跡を慕ふて國表を出立してこゝまでは来たのですが、あてのない旅路ゆへ心もさないこゝです。たゞ一日も早く夫達に出逢つて舅の敵を討ちたい一心に思ふてゐる。望み

ある身は神佛の冥加を仰がねばなるまいと二人は本堂へ急ぎます。

それを見送つてゐたのは東間三郎右衛門の弟大藏で、今では占ひ店を出してゐる。網笠の下からじろり見えた眼には忘れやうさして忘れられない葉末の姿がうつつたのだから堪りませぬ。

『葉末を引さらへ日頃の望みを……うむ』

三跡を追つて行く。そこへ通り掛つたのが早瀬伊織と源次郎の兄弟です。忠僕彌助が風呂敷包みを背負つて従ふ。

『難波潟、法の花園ひらけそめ、うつらふにこそ露は置けれ、まこみに花ふる佛の庭、善男善女の群衆はても賑はしい事ぢやのう』

敵持ちでも芝居はのぎやかに出来てゐる。これも佛の加護にすがるための參詣です。茶店で憩ひながら兄弟主従は過ぎ來し方を述べ懐きます。彌助は兄の元右衛門の歸りの遅いのを心配する。ふみ見るに遙かの雑沓にまぎれて深網笠で来る武士はその背格個物腰すべて東間三郎右衛門そのまゝだ。伊織は日頃の本望を達する事が出来る三勇む源次郎に、出し抜けにやつこ切つてかゝりますと、源次郎ははつこ身を交して、

『めつたに油断は致しませぬ』

その武士は近づいて來た。彌助が行手にふさがる。右に避ける。そこを源次郎がふせぐと左によける。そこを伊織がふせぐ

武士は首を傾げる。やつと切つてか、つて顔を見るにそれは正しく人違ひです。早速たすきを外して詫びるにござ。三人は知らないのだがこの人は片桐家の家臣で坂田庄三郎といふ武士です。騒々しく人聲がして酔ひしれた仲間が元右衛門の胸倉を掴まへて出て來ます。頻りに詫びるが仲々了簡しない。こゝ地に手を着いて詫びるのでやつと鼻がつきます。仲間は片桐家の鑑札を落したのも気がつかずそろそろ立去る。元右衛門は今更に酒屋の門を通るのも胸が苦しいといふ禁酒家だが、もちは仲々の酒豪で呑んだ後が悪かつた。林玄番の最後に居合はさす暗殺をさしたのも酒ゆへにまつて、主人の伴をして敵討に出立してからはすつかり禁酒してゐた。伊織は敵の手がかりを聞いたが似寄りの者には塚まで行つたが出逢はなかつた。元右衛門は額の汗を拭いた。伊織兄弟は彌助を連れて参詣に行く。元右衛門は茶店の亭主の差出す茶に口を潤します。そこで東間の仲間宇手助が駕に乗つて出て來る。思はず見合はす顔。

「ヤ、わりや元右衛門か」

「フム、宇手助か」

悪い處で、いゝ處で、宇手助が逃げやうとするのを元右衛門がしつつかま捕えます。

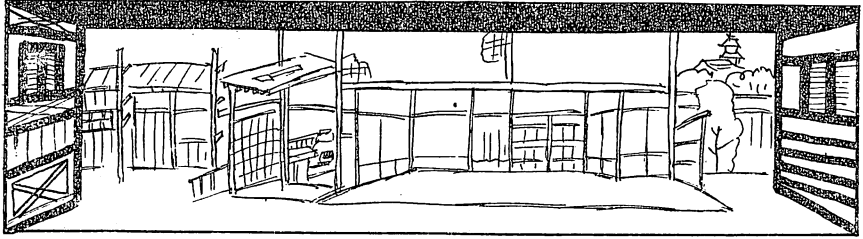
「われが此處にゐるからは東間三郎右衛門が有所知つてゐやう眞直に云ふてしまへ」

「イヤ、しらぬく」

元右衛門は宇手助の胸倉をみつてしめあける。宇手助はせき入りながらも、今は東間の家來でなく大阪の大老片桐市正様に奉公してゐるにて、その證據に差出すのは先刻の仲間が落して行つた鑑札です。元右衛門は疑ひつゝも追求をよす。宇手助は久瀧の會合に一ぱいやらうと言ふ。そして茶店から酒肴を取寄せてこれ見よがしの飲み食ひです。元右衛門はのこ佛のぐびぐび鳴るのを覺えつゝも眼をつぶる。その時宇手助の懐中からすべりおちたのは大野より東間殿へ記した書状だ。宇手助にうむし當身をくわして手紙を讀もうとする元右衛門の脇腹にひやつき當つたものがあつて氣が遠くなつたと思ふに、東間の弟大藏が宇手助に活を入れつゝ手紙を袂へ入れてゐました。やがて元右衛門は息を吹き返した。それ水だくゝさがぶゝゝのましたのは水ではなく酒です。人の足音に大藏と宇手助が小蔭に隠れるに、参詣を終つた梁の井と葉末が出て來ます。確かにあれは敵東間と二人は手早く用意して、

「舅の敵覺悟しや」

と斬つてか、ればそれは東間に非ずして先刻の坂田庄三郎がまた間違へられたのです。二人は人違ひをさんざんに詫びて道を急ぐ。坂田は一度ならず二度までも不審に思つて小蔭へひそみます。元右衛門はすつかり酔つて、悪性を發揮し出した。金をくれといふ茶店の亭主をなぐる。物を投げる。そこへ彌助



が歸つて來て頻りに意見をするが馬の耳だ。伊織は源次郎が歸つて來た。禁酒の誓紙を破る上からは主でもない家來でもない、兄を斬らうとする彌助を止めて伊織は不忠の折檻はこの屬、即ち骨の數は十本、十度打たば百本、百杖の數に同じだして丁々打ちました。源次郎は人外に帶刀は無益な刀を取上げる。伊織は見捨て行く元右衛門をじつと眺めた。

『弟彌助は修羅の道連れ、見捨てる兄は酒さいふ焰さ沈む餓鬼同然、けふの味方はあすの敵、ほのふに焰ゆる火の車』

『心から心迷はす心かな』

兄弟は彌助を従へて立去ります。大藏が出て元右衛門を駕に乗せて急ぐ。

ほをん……さ鳴るのは天王寺の鐘、つかくさ出て來た東間三郎右衛門、突然に現れた坂田庄三郎が双方網笠をきつミ握りしめての大きい見得で序幕は閉まるのです。

東寺では藤の花が眞盛りだ。早瀬兄弟はこの寺の貸座敷に敵を尋ねる假の住居をしてゐます。處が弟の源次郎が可哀そうに眼を病んで容易に癒りそうもない。今日も見舞つた醫者の慶庵を彌助は送り出した。相變らずに悪いので、さうしても妙薬を調のへねばならない。それには百兩の金子が入用だ。彌助も外ならぬ金の事ゆへ困つてゐる。伊織はその金策で朝から出て未だに歸つて來ませぬ。慶庵が歸るに源次郎が病床より起き上つて來ます。随分と悪質な眼病らしい。長々の浪々の上はこの難病では所詮武運に盡きた兄弟だ、見えぬ眼から涙をこぼして口惜しがります。薬を飲んでゐるに旅姿の女がばた／＼此の家に駆け込む。悪者に出逢つて難儀するので暫くかくまつてくれミ言ふのです。

『アツあなたは染の井様』

『さう言やるは彌助でないか』

『お聲はたしかに兄嫁の染の井殿』

全く變つた處で思ひがけない出會ひです。染の井は源次郎の眼病を見つけて大金がなくてはかなはぬ事を知つてじつと考へます。だが染の井には夫の伊織がこの家に住んでゐてくれることが何よりの安心です。彌助は葉末の居ないのを心配するに天王寺で群集にまぎれて見失ない、それからのひさり旅だミ言

ふのです。彌助はきつミ葉末を探し出すことを誓ひます。

そこへ門先では伊織を中に會平ミ丹藏ミが女を返せミわめきつ、出て来る。伊織は全く何の事情も知らずに通り合したもので夕暮の薄暗に女が何方へ逃けたか知らないのです。それでもあまり二人がくさく責めはては刀を抜いて斬りつけるので、その刀をもぎこつて胸打ちをくらはす。二人はほう／＼の體で逃げ去ります。家へ這入るミ彌助ミ同時に迎へたのは妻の染の井です。そこで始めて伊織は二人の悪者から助けられた女が自分の妻であつたことを知る。全く數奇な會合です。處で伊織が折角證議に出掛けた先は、年配面體は多少似寄つてゐるが全然人違ひでした。伊織は源次郎の眼病について心配する。染の井は何か心當りがあるか源次郎の眼病は百金あれば癒るのかミ彌助になほも駄目を押します。まあ久し振りで夫婦の對面それに旅の疲れもあらうミ言ふので、彌助のすゝめで伊織夫婦は奥へ行く。源次郎も風邪をひいてはミ言ふので臥床へ這入ります。

後に一人残つた彌助は主人達の身の上を何かミ思案する。それにつけても兄の元右衛門はさうしてゐるか、兄弟の情です、一人になれば兄の身を考へるのです。小遣帳をつけてゐるミ表に按摩の笛が流れて来る。恰度幸ひミ呼び留めて内に入れる。淺黄の頭巾を冠つて竹の杖をつく坊主頭の男です。

『ヤツこなたは兄元右衛門殿ではないか』
『そういふ聲は弟の彌助か』

「オツ兄貴か」

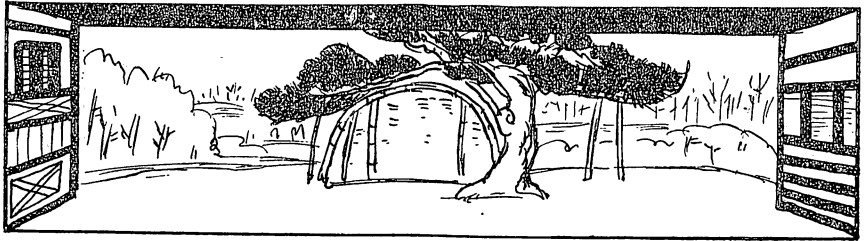
「ア、面目ない」

門口へ逃れ出やうミするのを彌助が引止める。

『エイ一體このさまは何事ぢや。コレ兄貴こんな身になつたも誓紙まで書いた禁酒を破り天王寺でのあのさま、非人乞食に見るやうにこのなりは何でござる。これでも早瀬様に召使はれた安達元右衛門ミ言はれますか』

ミ彌助はこゝぞミ強意見をします。元右衛門は涙を流し手を合せて、いつぞや天王寺で東間の家來宇手助に出逢ひ敵の手がゝりミ思ふ時落したのは怪しき書狀、大野より東間へミあつたので開き見んミするミ誰ミも知らず當身を喰はされ、正氣を喪ひ苦しむ内氣づけに吞まされたのが水でなく酒であつたため、亂心したので、その後せめて敵の在所をさぐりそれを功に御勸氣のお詫びをしたいミ思ふ内に、眼がつぶれて死ぬにも死なれない身の因果さを泣いてうつつたえた。彌助はその涙をすぐには信じやうミはしませぬ。元右衛門は悄然ミ立上つた。この世に生れ甲斐のない身體ミ死に行かうミするので彌助は今更に慌てました。その心なら折を見合せて主人へ詫びて進ぜやうミ、五本の指の一本が汚なくても斬つて捨てられないミ兄弟の情を見せませぬ。歸るミいふ兄に袷の寝着をくれてやる。頂きます」

ミ元右衛門が歸らうミするミ門口に人の足音です。彌助は兄を押し入れへ隠すミ、たづねて来たのは富田屋のお吉です。先刻話



しの刀を拜見したいと言ふ。その引取手が片木原の東間其角と聞いて伊織はつこ心がりになる。染の井に刀の應對をまかせておいて自分は夜更けにかゝわらずその東間其角の人間を確かめるために出て行きます。門口では先刻の丹藏が待ちかまへてゐてやつこ斬込む、それを斬返して伊織は道を急ぎました。

後では染の井が伊織の短刀菊一文字を賣るべくお吉に見せるが百兩の金は出せないと言はれます。そこで染の井は意を決して自分が勤奉公に出る言ふ。身を捨て、こそ浮む瀬もありで百兩の金を調へ一時も早く源次郎の眼病を癒さなくては、いざ敵に出逢つても討つ事がかなわない。だが源次郎は兄嫁に卑しい勤奉公をさしてまで、のめく薬は手にしたくないと言はります。染の井は口を酸くして兄嫁への義理を捨て、舅御への孝を立てさせてくれ頼みます。お吉は見るに見かねて自分

の妹が祇園町に茶屋をしてゐるからそこへ世話をしやうと百兩の金を差出します。源次郎はなほも兄嫁への義理でやるまいとするし、染の井は舅への孝のため身を沈めやうと争ひます。そこへお吉を迎へに駕が来た。

『大方お察しなされやうが、もしお尋ねなされたら國へ去んだと言ふても』

さすがり寄る源次郎を突き放して染の井は駕を急がした。姉上く呼ぶ源次郎を彌助はすかしなだめて、

『もし若旦那、よくよく思ひめぐらせばたゞ何事も敵東間、御兄弟打揃ひお打ちなさるが御本望』

『明日は早速此の金で慶庵に行つて妙薬を手に入れやうと勇み、すかしつなだめつ源次郎を臥床に入れる。そして押入から元右衛門を出して入口に連れて行き、二三日の中に改めて主人に詫びに来るやうに、百文の金をくれてやります。』

『怪我せぬやうに』

『弟、門口をようしめてたもや』

『二三歩さぐり歩いた元右衛門はそこでぎよろり大きな眼玉を見開くのです。そうしは知らぬ彌助は内らで染の井の苦衷で出来た金で妙薬を手に入れて源次郎の眼を全快さそうと喜んでゐる。せめて氣づまりな胸をほごさうと神棚からお酒を頂いて一口飲みかにもがくしけに口もこをなめまわした。藤棚の邊で妙な音がする。誰ちやま叫ぶミニヤゴく猫の聲が』

します。飲みつけぬ酒に双身をほらせて目の廻る思ひを堪へながら寝間を敷き横になります。

元右衛門は天窓からそろ／＼下りて来て、かねて見ておいた百両を奪ひ、弟の彌助を一刀のもみに射し殺しました。

「怪しからぬ胸さわぎ、彌助く、戻つたぞ彌助」

ミ門を叩くのは伊織の聲です。元右衛門はびつくりして門口に身をひそめます。奥から源次郎が起きて出て、

「彌助、兄者人のお歸りぢや、彌助く」

伊織は待りかねて門口をたき破つて這入る處を、逃けて出やうとした元右衛門が拔身で横に拂つた。伊織は高股をぐさつと斬られました。源次郎は手さぐりでたゞウロ／＼ミするばかりだ。

花道では元右衛門が八方斬のいゝ型を見せてゐます。

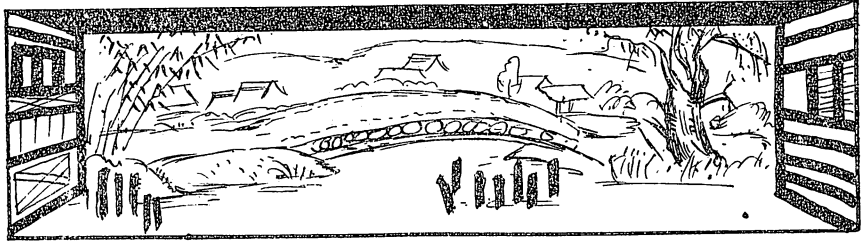
秋の千草に置く露の、月の光も物凄く、そよ／＼風が福島の堤につゞく非人小屋、誰が住む家ぞ味氣なき、世を憂しと見る早瀬兄弟、親の敵をうつ／＼にも、夢路を辿る旅はゞき、兄をば背に弟が、

此處は福島の天神の森です。非人小屋があつて石の竈、土の

釜がある。石の地藏がそれを眺めてござる。すつかり非人に落ぶれて竹の杖に簀を着て頬かむりの伊織が同じ姿の源次郎に負さつしやつて来ました。伊織は元右衛門の一刀のためいざりになつたのです。次の村で合力を受けやうとすべる足もを踏しめてこゝまで来たのですが、思はず轉けて兄を投げ出した。お互に身をいたはりつ、非人小屋で休もうと言ふ

そこへまかり出たのはすた／＼の八に天満巫子の市に、みんなこの頓兵衛、やれもさの次郎です。兄弟を取まいて仲間入りをするまでは此處には置かぬさやかましく言ふ。伊織は見られる通りの足の大疵で歩行が叶はぬ處へ土地不案内だから今宵一夜おいてくれと言つても聞かない。半時もおけぬと引立てやうとする。そこへ親分のもつそうの傳次がやつて来て、見た處腹

からの非人ミは見えぬ咄しによつたら力にならうと問ひます。伊織はその親切に喜び、兄弟も若氣のいたづらから父の不興を蒙つて流浪の折柄、用意の路銀、費ひはたし親の罰で兩足にも足なへになつたミ仔細に語つた。源次郎もその後からさうか仲間に入れてくれと頼みました。傳次は大きく合點して若い身空で非人になるのも先生からの約束事、時節さへ来れば又芽の出る時もあるらうと、前の小屋へ兄弟を入れて花咲く春を待つがよいと親切に言つてやります。二人はその親切に我が身の不遇に熱い涙をこぼすのでした。そこへあごの三に腰へ繩を掛けられて引立てられたのは顔に眞黒に墨をぬつた字手助が變つた



姿の河太郎です。生きつたく、熊野の浦で生捕つた河太郎一つ泣かして御覽に入れませうと三が言へばがあがあ泣いて金を貰つてゐるのだ。傳次に今日からの新米と伊織兄弟を引合された時、宇手助ははつと思ひ當つたことがあるさ見えて素知らぬ顔でもう一儲けさ何處かすぐに立去ります。伊織はその商賣振りを聞いてさま／＼に世渡りのあることを感心した。

軒に垂れたる荒蕪や、襦袢さすてふ虫つきの、面桶の縁も箆切れて、水さへ呑めぬ破れ茶碗、石のかまぎに土の釜かたし／＼の火ばしまで

一揃渡して、さえらい出世をさつしやれやと非人達は三方四方にちり／＼に自分の小屋へ歸つて行きました。

二人は顔を見合せて感慨無量です。國元を出た時は主従四人、それが元右衛門は酒のために行衛知れずになり忠義にあつた彌助は盜賊のため無慘の最後を遂げ、源次郎の眼病のために染の井

は身を賣つたがその金まで盜難にかつたのを伊三郎の情けで家財屋財を賣つて菊一文字の短刀を人手に渡して妙薬を手に入れ、飲んだお陰で即座に眼病は平癒したのですが、今度は兄の伊織が賊から受けた高股の傷がさう／＼いざりまでなつたのです。今では一文二文の合力を受ける非人さまでならうとは二人は今更に手を執り合つて泣いた。だが晋の豫讓は主の仇を報はんさ漆をさし炭をのんだためしもあるさお互に力づけ合つてゐます。

源次郎はふと思ひ出したのは此處へ来る道すがら長町さやらに西國方の浪人が劍術の指南をするさ聞いたのもしや三郎右衛門でないか委細をさぐつてくるさ言ふ。伊織は明日の事にせよこいふのを源次郎は心あたりがあるのにそれを捨て、は置けぬさ、伊織の頻りに止める言葉を聞かないで行かうとするので伊織も今はごめかねて國元立の砌に母親より下された住吉四社の守りを肌身につけて持つて行けし渡さうとする。弟は残る兄にさ勧めたが夜道は物騒さ守りを懐中に入れた。それに大阪は繁華の土地ゆへもしあぶれ者に出合ふさも短氣を出すまいぞさ兄は十二分に教へて弟を出してやりました。

跡に心をおく露の……源次郎が躓いたので草履の花緒がぶつたりさ切れます。……長きこの世の別れさは、後にぞ思ひしられる。實に哀れな兄弟の別です。伊織は弟の後姿をちつさいつまでも見送つてゐた。虫が報すのか今宵に限つて源次郎

「離れることがあくまでもつらい。國を出て七年になるが未だに敵に出逢はない。それに重なる不幸を思ふに武運のつきたことが切實にわかる。」

「弓矢神にも天道にも見放されしか淺まじや、こぶしをにぎり齒をくひしぱり無念涙ぞ道理なる。」

伊織は今更に愚痴を言つても始まらない寂しさに空ろな笑聲を残して小屋で横にならうと菰をくぐります。露を敷寝の草まぐら月かけもる、伏屋の内では冷い夢を見やうと言ふのです。

「早や告げ渡る遠寺の鐘、時刻はよしと堤づたひ宇手助さきに安達元右衛門」

火繩を振つて先刻の河太郎が出て来る後から、江戸頭巾で顔を隠した元右衛門が出て來ます。宇手助は非人になつて伊織兄弟の有所を探してゐたのです。菅原をぬき足さし足で小屋をうかがふに伊織はよく眠つてゐる。いつそ芋ざしに急ぐもの相手は名におう鬼玄番の悴です。もしやさいふので寢込をおそふ事にした。

「月にきらめく氷の刃、小鮎をねらふ鷲の足」

實にい、文句です。このみやびやかな淨りりの裡に伊織はグサツと急所をさきで五體をあげに染めてよろほい出るのです

「ヤア、寢込みを踏込み、欺討は卑怯な奴め」

「その卑怯者は、安達元右衛門様だ」

「ナニ元右衛門、フム現在主の此の伊織を」

「主はたが事、勘當うければあかの他人、一本だちの元右衛門さまだわ。」

「附甲斐ない伊織等を見限つて東間に従ひ、宇手助にいひつけて非人仲間を詮議なし、今月今宵兄弟もに討つて三郎右衛門の病根を断らうと言ふのだ。伊織は無念さに齒を喰ひしづた無念なはそればかりか、伊織の妻梁の井の身代金百兩を盗んだのも元右衛門なら、忠義者の彌助を殺したのも元右衛門だに聞いて伊織は肝がつぶれる思ひをした。思ひ出せばいつぞや東寺のくらまぎれ月さへ西に落ちた頃、あやしき者さし出す提灯を、ばつさり斬つた曲者、やらじこめるその闇に光つた刃の抜討に、高股を斬つたその夜の賊は元右衛門であつたか、伊織は怒髪天を貫くばかりです。」

人非人犬畜牛奴、覺悟さいざりながらよろほひて元右衛門に斬つてかゝる時、小屋の内からきらりさひらめいた大刀が伊織の肩先をぐさつと斬りさけた。悪人らもこれは驚く前へ菰を引ちぎつて立出でたのは東間三郎右衛門だ。

「や、うぬは東間三郎右衛門」

「さいざり寄る伊織を足もきにふまへにちつて、」

「めづらしや早瀬伊織、うぬのためには父の仇、サア立上つて勝負せぬか、敵を討たぬか、素丁稚奴。アノ爰な不覺者め、汝の父たる鬼玄番でさへ、たゞ一討ちに討つて立退く三郎右衛門、足腰たぬ分際では所詮敵は得うつまい。宇手助のし」

らせにより、わざ／＼參つた三郎右衛門、サア立上つて勝負せいで尋常に相手いたしてくれるわ。サア立て小僧、これでも敵を討つ心が、身の程知らぬ獄卒め

はたつミ足蹴にかけて三郎右衛門は傍の石地藏を蹴飛ばして臺座の上へむんずみあぐらをかいた。伊織はよしや足蹴立たすも年來尋ねる父の仇、恨みの切つき受けて見よさいざりながら一念癡つて、にぎりよりつ、三郎右衛門の肩先を四五寸斬りつけました。東間はその勢に驚いた。

「ヤイ／＼元右衛門、うぬは古主のよしみを思ひ、此の三郎右衛門を手びきして討たしおつたな

三肩さきおさえて怒つた。

「イヤ、めつそらな、俗に申す盲の一寸杖、いざりの一太刀に申すのでござりませう。

これから元右衛門が石を打つやら宇手助がたぶさをつかむやら亂暴の限りです。伊織もこゝを先途ミ手練の早業で斬りまくるが悲しいかな足腰が利かない。東間は後よりぐさつミ急所をえぐつた。東間は早瀬兄弟さへ討取ればすぐに執權大野殿に仕官する身でした。その時には元右衛門を家老に取立て、やらうミ言ひ、なほも心にかゝる源次郎の仕末を宇手助にたのんで、當座の褒美に金子を與えます。

「月すみのほるおばしまの、今ぞ夕山の雲はれて

「心にかゝる山の端もなし、御旦那様

「元右衛門、まからふか

東間王従は悪の象徴のやうな笑をたゝえてゆう／＼立去ります。その後へ歸つて来たのは弟の源次郎です。兄者人ミ呼んでも聲がしないよく見るミ轉つてゐるのは兄の死骸、しかも斬りさいなまれた無慘な姿です。源次郎は氣も動亂して抱きあけましたがもう駄目です。あまりの事に涙も出ないであきれてゐる源次郎を非人達がばら／＼ミ取圍む。兄ミ一緒に殺してやるミ寄てたかつて源次郎を打すえ、はては川へミ投込でしまつた

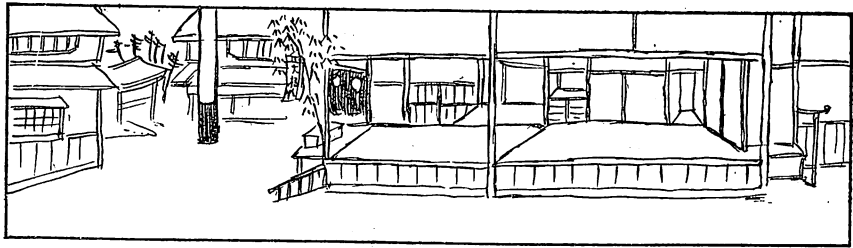
浪の音がする。こゝは天神の森の前を流れてゐた川下です。水中で息を吹かへした源次郎がやう／＼に岸へ這ひ上つて来る自分ながら不思議な蘇生にふミ氣がついたのは懐中に入れた住吉四社のお守りです。見れば數ヶ所破れてゐるのは正しく明神の加護であつたミ源次郎は神に謝し、これも母の擁護をミ佛にも謝しました。だが兄に死別してはもう生きて甲斐なき身、死んで詫びやうミすでに自刃しやうミするのを突然止めた人があつた。これこそ父方番に仕へてゐた解幸右衛門でありました。幸右衛門は早瀬家の不幸の數々を聞いて、飽くまでも力を添へて三郎右衛門を討たさすには置かないミ決心します。處へ宇手助が忍び寄る。うぬ源次郎ミ打つてかゝるのを幸右衛門はぐつミ押へ難なく宇手助をしばりあげます。

ほの／＼ミ夜があけて来た。鷄の聲が聞えます。

近松門左衛門原作

心中天網島 三幕

五百倉節



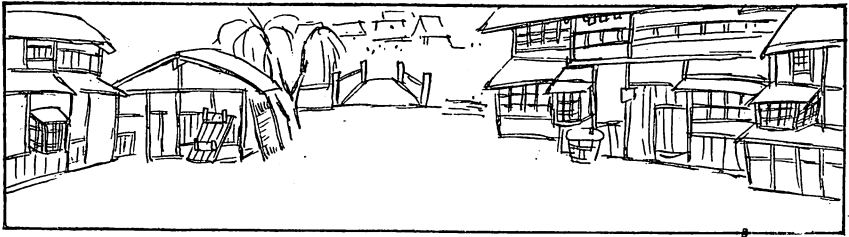
配役

紙屋 治兵衛	中村 鴈治郎
女房 おさん	中村 福助
紀の國屋 小春	中村 魁車
粉屋 孫右衛門	實川 延若
五左衛門	市川 蝦十郎
河内屋の主人	市川 九團次
河内屋の女房	嵐 吉三郎
伯母	市川 蓮女
阿呆の三五郎	中村 成太郎
身すがらの太兵衛	市川 箱登羅
大和屋傳兵衛	市川 蝦十郎

いくつかの蝙蝠がぎつしりミ建てつまつた茶屋の軒端に夜の帷をふりかけてゆくミ、いつしか廓には灯がはいつて、こゝ會根崎の茶屋街はいっぱしの賑やかさだつた。

今夜の客さかいふお侍衆はいつたいざんなお方だらう。

小春はお杉に送られながら途々案じてゐた。まさか太兵衛ではあるまい。太兵衛なら逢はずに歸るまでの事、先刻あふた朋輩衆が、慥かなまいだ坊主の見て衆の中にあの太兵衛がまじつてゐたミ云つた。逢はねばよいが……。小春はやつミ河庄の前まで来た。救はれるやうな氣持で小春は中へ這入らうミした。するミ突然大勢の聞手に取巻かれて念佛坊主が出てきた。小春はその中にまじつた太兵衛をみて素早く簷下に身を忍ばせた。念佛坊主が、がや／＼云つて立去つてゆくミささくさにまぎれて小春は河庄に馳込んだ。あ、助かつたミ思つたのも束の間、



目ざさい太兵衛は小春の姿をみて友達
二人を引返してきた。

「なあ小春……」

太兵衛はいけすう／＼しく小春の傍
に座りこんで又いつもの嫌味を並べた
てた。治兵衛のこゝこ、治兵衛の家の事
はては今夜貰ひの掛つた侍のこゝまで
悪しざまに罵つた。だが侍の姿をみた
三人は逃げるやうにこそ／＼立去つ
た。孫右衛門は小春の眞意を探らうこ
思つた。そうして出来得るなら治兵衛
の事をぶつ切り切つて了ふ心積りだ
つた。だが、小春は治兵衛の女房おさ
んの手紙をみてこつち、その涙ぐまし
い程の心もちにさうあつても治兵衛を
思ひ諦めようゝ決心をした。孫右衛門
に聞かれるまゝに、小春は心にもない
治兵衛への愛想盡しのかす／＼を云ふ
のだった。遠くしめやかにひゞいてく
る三昧の音、紙屋治兵衛は最前から河
庄の表に忍んできてゐた。

「え、だまされた。口惜しい、今

迄俺に立て通した心づくしの數々はあれは皆んな嘘だつたのか
くやしい、さうしてくれよう。二年もの年月俺はあいつにだま
されてゐたのだ。狐め、根生腐りの狐め、踏込んで一討にして
やらうか、それさも面恥かゝしてやらうか、それ位では俺の腹
の中が……

思ひ惑つた治兵衛は腰の脇指しを抜くより早く小春の姿めが
けて障子越しに突込んだ。だが、それは孫右衛門のためにしく
じらされて了つた。小春がその主を見ようとするのを遮つて孫
右衛門は無理に小春を奥へ連れて行つた。折柄ぞめき戻りの太
兵衛がこれをみて、さんざ治兵衛に悪口をあびせかけた。

「治兵衛！お前は縛られてゐるな、いゝざまだ。さては盗みを
やつたんだな。やあ皆出合へ、紙屋治兵衛が盗みを働い
て縛られくさつた」

噂だかい廊のこゝこ、て見る／＼うちに河庄の表は山のやうな
人だかりになつた。聲聞きつけて孫右衛門は内から走り出て太
兵衛始め皆んなを追散らして了つた。孫右衛門は治兵衛の縛め
を解いて自分も頭巾を脱いだ。それをみた治兵衛はびつくりし
た。

「あッ兄者人……あ、面目ない／＼」

治兵衛は大地に両手を仕へて孫右衛門に詫ひた。小春は孫右
衛門の素性を知つて今更の如く自分の云つた言葉を後悔するの
だった。詫ひようにも詫びるすべもない、小春の心はもう涙で

いつばいだった。

「畜生め、狐め、よくも俺をだましたな、太兵衛に仕返しするより先に、うぬを踏みたい」

荒れ狂つた獅子のやうに治兵衛は小春の胸をしめあげた。

孫右衛門はそれをみて治兵衛を押止めた。

「治兵衛、お前のそのたわけから事が起るのだ。人をたらすのは遊女の商賈、小春の心底ようわかつたか。この孫右衛門はたつた今一見で小春の心を知つた。それだのお前は二年餘りも馴染の女、心のわからぬ筈はない。それも皆お前のたわけからだ」

孫右衛門は小春の心のうちも知らないでたゞもう治兵衛を墜おす者ものとして彼女を悪わるしざまに罵ののしのだつた。

「あんまりだ、あんまりだ。いくらあたしがこんな稼業かせぎをしてゐるまで骨ほねの髄みずまで腐くつて居ゐはしないのだ。

小春は孫右衛門を恨にくむ氣きもちよりも治兵衛の心こころがなげなかつた。

醇々じゆんじゆんとして説とく兄あにの言葉ことばに治兵衛は本心ほんしんから悔くみ改あらためた。

「わたしが悪わるるかつたのです。三年さんねん以前いぜんからあの古狸ふるねこに魅まられ親子おんこ一門いもん妻子しよまで袖そでにし、身代しんたい全部ぜんぶ、小春こはるにすり減へらされて了しまりました。もうぶつツり小春こはるは手てを切きります。え、い、心残りこころのぞこなぎ少しすこしもありませぬ。おい、狸ねこ、狐きつね、犀尻せじり切きめ、俺おれはもう今日けふからぶつツり手てを切きつた。思切おもつた證據しやうこ、これを

見ろ」

治兵衛は激怒げきどに身をふるはせながら懐中かいちゆうの守袋まもぶくろを取と出した。「月頭つきがしらに一枚まいづ、取交とりかした起請おきせい、都合つがふあわせて二十九枚にじゅうきゅうまい、そつちへ戻かへせば、もう戀こひも情なさけもない。さ、受取うけとれ」

ふる／＼手てをふるはせて治兵衛ちへいゑは小春こはるに叩たたきつけた、小春こはるの瞳ひとまからは止めとめもなく涙なみだがあふれた。

「兄者人あにぢやひ、あいつの方に渡わたしてある私の起請おきせい、數改かずあらためて受取うけとつて火ひに燻くべて下さい。小春こはる、さ起請おきせいを兄あに實じつへ渡わたせ、早はやう渡わたせ」

長の年月ながとしげつ、互たがひひに別わかれじま命いのちまでかけた起請おきせい、小春こはるはそれを渡わたすの身みを切きられるよりも辛つらかつた。けれど治兵衛ちへいゑの女房むすめおさんさんの事ことを思おもふと、淋しみしい勇氣ゆきが冷ひやたく胸底むねぞこに湧わいてくるのだ

つた。寝ねら間まも放はなさなかつた守袋まもぶくろを小春こはるはだまつて其場そのばに出だした。孫右衛門まごゑもんは守袋まもぶくろを拾ひろひあげ起請おきせいの數かずを改あらためた。

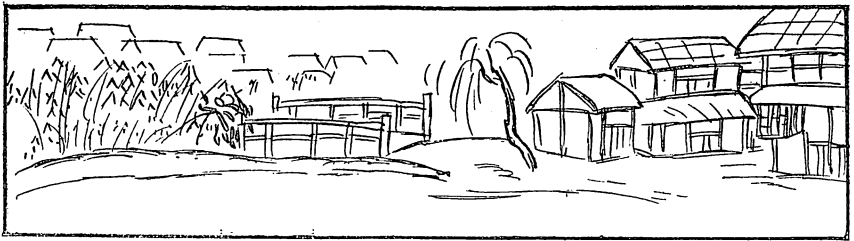
「ひい、ふう、みい、よう…十、二十…二十九枚にじゅうきゅうまい、よし數かずが揃そろふた。兄あにのわしが髓みずに受取うけとつた」

幾いくつにも重ねかさねて數かずは二十九枚にじゅうきゅうまい、ミ、別に一通女つうぢよなんの手紙てがみがまじつてゐる。

「こりや何なんぢや。小春こはる様さままゐる、紙屋内かみやうち……」

小春こはるはびつくりして取返とりかへさうしするのを孫右衛門まごゑもんは素早すばやくく懐中かいちゆうへ收おさめて了しまつた。

「兄者人あにぢやひ、話はながついたらもう片時かたときも彼奴あいつの面つらなご見みさうない、早はやう歸かへりませう……」



「うん、歸らう、鳥渡待つてくれ」
孫右衛門は硬はつた表情で身支度を
した。治兵衛はその待つ間にもぎかし
かつた。腹が立つた。

「兄者人、行きがけの駄賃、今生の思
ひに、女の面一つ勘忍して下さい」
云ふが早いか治兵衛は力まかせに小
春を蹴つた。

「これ手暴なこころをするでない」

「何の、足かけ三年、戀し床しも、い
しし可愛も、今日いふ今日たつた

この足一本の暇乞ひだ。思ひ知れ」
孫右衛門の止めるのも聞かず又小春

の額際を蹴つて門口へ出るに、急に今

迄の事が胸にこみあけて来て治兵衛は
思はず聲をあけた。孫右衛門は治兵衛

を慰め、歸つてゆく、小春の目から

は止めどもなく涙があふれた。

人の心も知らないで浮いた茶屋三味

線の三すぢの音が、小春の耳をかすめ
て行つた。

天満御前町紙屋治兵衛云へば、古い所がらの老舗のある立
派の店だつた。外出勝ちな治兵衛が家を留守にしても、女房の
おさん一人で店の全てを切り廻してゐた。夫が小春と別れて家
に歸つてきてこつち、これで九日目、さうやら居つきそうな夫
をみて、おさんはしみじみ嬉しかつた。つい仕事をしても氣乗
りがしていつもの二倍も三倍も精を出した。夫は居間の炬燵に
快い轉寢をしてゐた。格子外をお十夜の人がちらほら通つて
ゆく。三五郎とお玉が小さい子供達を連れて歸るに、お玉は途
すがら孫右衛門と伯母を見掛けたとおさんに告げた。おさん
は早速治兵衛を起した。治兵衛は目をさますと急に忙しそうに
算盤をやり始めた。そこへ伯母と孫右衛門がやつてきた。二人
は苦り切つて坐に着いた。おさんは何を云ひ出されるかひやひ
やしてゐた。伯母は昨夜十夜念佛の講中で曾根崎の茶屋紀の國
屋の小春といふ伯人を、天満の深い大盡が明日身受けするの
取沙汰、これはつきり治兵衛に違ひない、孫右衛門ももろく
實否を調べに来たの事であつた。治兵衛は直ぐそれが身すが
らの太兵衛だに感づいたので伯母に身の潔白を云つた。そうし
て斷然自分ではないといふ起請を書いて伯母に渡すに、伯母は
喜んで孫右衛門と共に歸つて行つた。そこにも持つてゆきさこ
ろのない焦々しい氣持ちに治兵衛は又炬燵にもぐり込んだ。お
さんはこの様をじつとみてゐた。

— 少しはあたしの身にもなつてくれたなら……。いくら夫と

は云へ餘りな仕打、この人はまだ小春の事が思ひ諦められないのか。

おさんはつい腹が立つて蒲團をはねて夫をみた。そこには治兵衛がだまつて泣いてゐた。

「もし、あなた。それ程小春さんが戀しいなら、伯母さんに誓紙なごなせお書きなさいました」

おさんは嫉妬に燃えた腫でちつミ夫を見据えた。

「おさん、俺は小春戀しさに泣いてゐるのぢやないのだ。人の皮着た畜生女に何の未練もないが、意恨のあるのは身すがらの太兵衛だ。又小春も憎い。常々俺にたこひあなたとの縁が切れ添はれぬ身にならうとて、嫌な太兵衛奴には請出されませぬ。もし金せきでやられるなら物の見事に死んでみせます、云ふた言葉のかわかぬ中からもうこれだ。俺は踏みにじられた、口惜しい、無念だ」

治兵衛は齒ぎりを噛んで口惜しがつた。此時、おさんの心にはふミ不安が湧いてきた。

「あなた、そんなら小春さんは死にます……」

「なに小春が死ぬ、そんなことがあるものか」

「い、え死にます……」

おさんは治兵衛が以前から死ぬ様子が見えたので自分が小春に頼んで治兵衛に愛想盡しを云つて貰つたこと、小春の本心は決してそんな浮いたものでなく、それこそ死身になつて治兵衛

を愛してゐるさういふ事なき、おさんは小春からの手紙を治兵衛の前に差し出した。治兵衛は氣も狂はんばかりに驚いた。

「さてはあの時、取戻した起請の中に、知らぬ中の文一通、兄貴の手へ渡つたのはお前からやつたのであつたのか——それならばこの小春は死ぬ」

「え、ッ、さうしたらいいでせう。あなた、小春さんを殺してはわたし達女同志の義理さういふものが立ちません」

「うむ、そんなら……さういふた處で何を云ふても金だ。小春が命は新銀七百五十匁、少しでも欠けたらさうすることも出来ない。今のわしにしたら四ツ三貫目の才覚もま、ならぬ……」

治兵衛はくやしさに身悶えした。おさんは立つて簞笥の抽斗から金包みを取り出して夫に渡した。

「や、この金は——しかも新銀四百匁、こりやさうして」

おさんはいづれ埋合せの都合のつく金であることを話した。さうして簞笥から衣裳を取り出し黒羽二重の上着、龍門縞の下着、縞の羽織だけを殘して他を全部風呂敷に包みこんだ。

「あなた、私や子供は何着いでも男は世間の大事、請出して小春さんも助け、さうぞ太兵衛さういふ人に一分立て、見せて下さいませ」

治兵衛はおさんをしみじみ嬉しいと思つた。

「何にも云はぬ、おさん……では行つてくるぞ」

おさんは涙をふいて立上る。甲斐々々しく夫に着物をきせ

た。風呂敷を三五郎に背負はせて治兵衛が出ようとする。三五郎衛門が這入つてきた。治兵衛は思はず其場に立ち盡した。五左衛門は此場の様子をみて、つめかけるやうに治兵衛にたゝみかけた。

「新地へゆくの。いやよく御精の出るこぢや、それならば内の女房はいらぬであらう。おさんに暇をやつこくれ、わたしはおさんを伴れに來たのだ」

治兵衛「おさんのふたりは泣いて頼んだが五左衛門はいつかな聞かうミはしなかつた。

「さ、去狀書け、去狀書け、おさんに持つてよこした衣類、道具、敷改めて封をつけるからさいてくれ」

おさんは、はつこした。もし箆筒でもあげられやうものなら中はからつほ……。おさんは必死になつて五左衛門を止めた。

「着物の敷を揃ふてゐます、改めるには及びませぬ」

「いや、調べる、さけ」

荒々して五左衛門はおさんを突退けて箆筒をあげた。あける抽斗々々にはみんな空つほだつた。五左衛門は怒りにまかせて三五郎の風呂敷をあげた。中には數々の着物が這入つてゐる。

「治兵衛、これも眞屋へ飛ばすのか、もう勘辨出來ん。さ、去狀書け、え、去狀書きさらせ」

治兵衛は面目なさに刀に手をかけた。おさんはかけよつてその刀をもぎ取つて了つた。

「ご、ごさん」

「なに——」

「身にあやまりあればこそ、内の人がこれだけの訛言、あなたはあるまり不人情です。治兵衛さんこそ他人でも、二人の子供はあなたの孫、お父さん、可愛くはございませぬか。私はさうあつても去られませぬ、いゝえ去狀は受取りませぬ」

おさんは身悶えして訴へた。けれど五左衛門は石のやうに冷たかつた。

「よし、去狀を書かぬなら別にいらぬ、さ來い、連れてかへる」

五左衛門はおさんの手をさつて引き起てようとした。

「いゝえ、私は行きませぬ。飽きも飽かれませぬのに、何の恨みで晝日中、夫婦の恥がさらされませう。お願ひです。もし父様——」

「この上に何の恥ぢや。町内一杯喚きちらして行てこます。さ來い」

五左衛門はおさんを無理に引き起した。その拍子におさんは寝てゐる子供に行當つて二人は眼をさましておさんに取絶つた

五左衛門は子供をけちらしておさんを連れて出た。

治兵衛は二人の子供を抱いて思はず男泣きに泣いて了つた。

その翌朝の國屋小春「紙屋治兵衛の心中が網島の大長寺のほごりにあつた。

所作事

御大典

奉祝の

ひきふし

其常盤千歳壽

全一場

—中座十一月興行上演—

鶴屋南北作

登場人物

- 一、主 郎 一、太郎冠者
- 一、一 郎 一、二 郎
- 一、三 郎 (後に松の精に扮す)
- 一、四 郎 一、松の精五人
- 一、鶴の精五人 一、奉祝者一同
- 一、ひめ 一、鶴の精
- 一、松の精四人 一、雛鶴一人

常磐津連中
長唄連中

片シヤギリ打ちあける緞帳をあぐ。

上手常磐津、下手長唄の兩床を置く。すぐ、長唄になる。

めでたき御代に大八洲、御稜威も高きあまつ神
けふを壽ぐ千代の忍ん。

ト、鳴物になり橋がかりより主、長袴、小さ
刀姫いつもの拵らへ、太郎冠者も亦いつもの
拵らへにて出る。

主
まかり出たる者はこのあたりの者でゐる、當年は晴れの御典行はせられ何よりも目出度い事ぢやによつて、我等も松ばやしを催さうと存する太郎冠者あるかやい

舞臺は御大典奉祝の意をかかせたる、樂太鼓にまんまくを銀地に描きたる襖にて折まわし、上手に萬歳の六曲を置く。橋がかりは廊下瓦に臙病口は瓦燈口にあつらへる

太郎 お前に。

主 いたか。

太郎 ナカ〜。

主 松ぼやしの稽古をする程にいつもの常盤の松のま

でお出でなされい云ふて誰彼も呼うでこい。

太郎 畏つてゐる。一郎殿、二郎殿、四郎殿でゐりました

な。

ひめ イヤ〜三郎殿も忘れまい。

太郎 心得てゐる。

主 早う行てこい。

太郎 ハア〜。

主 エイ。

太郎 ハア〜。

ト、鳴物にて主、姫上手へ這入る。

ヤレ〜めでたい事でゐる、まづさなから先へ参ら

うか、やア誰ぞのから先へ参らうか。

ト、常盤津になる。

常へ思案なわたの一筋も、戀には迷ふ道のべに、た

ざり大路のひまかまへ。

ト、太郎冠者、橋がかりへ來て、

太郎 イヤ何かさいふうら一郎殿のおうちは是れぢや。物も

う案内もう。

ト、この時橋がかりのうちにて、

一郎 やア表に案内がある。

ト、出て、

何誰でござる。

太郎 イヤ私でゐります。頼うだお人申されますは當年は殊

の外、おめでたい御儀式もある事ぢやによつて松ぼや

しを催さうと存する、それにつきいつもの常盤の松の

もこまで、お出でなされいと申して私をおこされまし

た。

一郎 それは一段の事ぢや、丁度二郎殿、四郎殿も見えてぢ

や、追つけ同道して参らう。

太郎 それは丁度でござつた。

ト、一郎這入る。

ヤレ〜嬉しや〜。のこらず参らうかと存じれば

さつこ足が助かつた。イヤまたしめい。三郎殿がこの

家にわせられぬはイヤ〜あの美しい姫の口から、

三郎殿を忘れまいぞと云やつたが腹が立つ。云ふま

い留守ぢやと云ふて三郎殿を呼ばぬやうにせう。

ト、この時ソツミ三郎出て聞く。

ハツハハ、。吾ながらよい分別ぢや。三郎殿は戀

のかたきぢやによつて呼ぶまい。ソレヨ／＼。

常々ひさりうなづき、ほくぞ笑み。

太郎 うまいぞ／＼。

「こんな分別又あるか、こんな分別かりたいなればおらが在所へ北さかの踊るふりより智恵かしましよよ。」

ト、手拍子うつてひさり喜んで這入る。

この時ニユツミ三郎出て、

三郎

横着者め、折角の松ばやしにこの三郎を留守にしをつた。よし／＼きつこした思案がある。

唄々思案ふしあん分別も、松にかゝりし薦かづら、

その千尋をのべかどみうつす姿のなりふりも。

常々それよこ心月の夜に、化ける狐のこんたんと、胸にたたみてありにける。

ト、は入る。

知らせて襖を割る。一色にぬつた前に根上り松のある道具にかわる。

唄々それ蓬萊山にたぐはへて、こゝに千歳の根上り

や、目出たき御代に松のもご。

ト、上手より主、姫をつれて出る。

下手より太郎冠者出る。

主 戻つたか。

太郎 ナカ／＼。

主 きれ／＼へ参つたぞ。

太郎 ハア誰殿へ参りましてムれば、各々寄りあつまつてムつてはやこれへお出でムります。

ひめ 三郎殿もお來やるか。

太郎 ハツさればでムります。三郎殿は伊勢参宮をなされてあやにくにもお留守でムります。

ひめ これは一段々残念なこぢやア……。

太郎 ハヤあれへお出でなされました。

常々まつま程なく打そろひ、

唄々翁の友ミ深みさり、歳も若木の花のゑみ、その十返りのミこきはに、まじはる枝の十人公。

ト、よろしく一郎、二郎、四郎出て、ふりあ

つて來る。

一郎 御當、めでたうムる。

二郎 打そろふてあがりました。

主 いづれもようこそお出でなされた。まつゆるりミムれ

三人 心得ました。

主 太郎冠者にも申進せました通り、何んミぞめでたい事

をはやそうミ存する。何ミムらう。

四郎 それは一段ミようムらう。

主 まづ持參の酒肴にいたしませう。

唄へ松のよはひきくむ酒の、けふ九重の菊の縁、し
ろきくろきを打たゝゑ。

ト、かつら桶を出し、扇にて酌をする。

主 太郎冠者看せい。

太郎 心得た。

唄へそもく松のめでたきは枝をあらため葉をかえ

す、四時に常盤のみきりして、色もふかみの千
代見ぐさ、二かい三がい數重さなりて御代萬歳
ミ祝すなれ。

ト、ちよつミひめからみふりある、この内一

同のみ。

一同 ヤンヤ〜。

ト、はやす。

主 では一つはやしませう。

常へめでためだの若松様よ、枝も榮えて葉もしけ
る。

ト、主かるく踊る。

一同 この上は松ばやしで△る。

心得た。

常へ松やにやにや松やにやにやほんにはなれぬ二葉
のまつにやにやにやにや。

ト、一同踊りかはりくのみ、かつら桶のふ
たを松の前へ置く、ミ松から手が出てのむ。

太郎 ヤア〜、松が酒をのうでしまふた。

主 ハ、ハ、ハ、そんな事があるものか。まづためさう。

ト、のんで置いて見る。

又のむ。

ヤツほんに。

ト、又つぐミ又手が出る。

太郎 やア見つけた。

ト、この時内にてうたひかゝり。

三郎 松に祝ひし一ふしに。

△あらはれ出たる吾こそはちせめでたき松の精

ト、酔ふてヒヨロ〜ミして出る。

主 扱も〜奇特な事かな、いづれも聞かせられたか。

一郎 成程聞きました。

二郎 松の精はこの上めでたい事は△るまい。

四郎 あまりめでたい事ぢやによつて松の精さのひみつ舞は

しめい。

三郎 心得である。

唄 天下をおさめる弓のつる。家をおさめる弓のつる。ひくもためしの小松かけ。

ト、ふりある。

この内太郎冠者ひまり氣をつける。

常 松やにねらふよ、ねばくあやかれ松やにねらうよ。

ト、三郎は顔をかくす。

太郎見に行くふり。

唄 見よなら見よならソレ〜見やれ、千ミせむすんで常盤の色に、さんミミまらば首尾の松。

唄 松やにやにやにやにやにや。

ト、二人まはる。

常 さんミミまらば首尾の松。

唄 さんミミまらば首尾の松。

常 さんミミまらば首尾の松。

ト、はやす内太郎冠者頭巾をこる。

太郎 やア見つけただ。

三郎 エツ。

太郎 松の精はコナいつわり者のめ。

主 何ぢや、いつわりぢや。

ト、よつて。

ト、驚く、ひめよつて。

ひめ オツ、ほんに三郎殿か。

一郎 いかうたべようてゐるな。

主 あのこと、な横着者め。

三郎 あやまつた〜。しかしこれは太郎冠者が悪いのぢや

太郎 何ミおつしやる。

三郎 参宮もせぬものを参宮ミ申したによつて、参宮する事

もならず、参事のない事はよくしつてゐさせられやう、参宮の人真似、参宮三所は東山、参宮二十七こなたナゼ偽言ふた。参宮のねも出まい。

太郎 あやまつた〜。

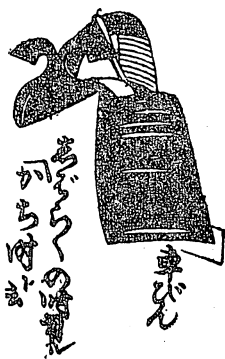
三郎 こちがゆるす事でない。

ト、うつて行く。

主 一體がつちが悪いのであらうか。

常 松ぢやアエイ、松ぢやアエイ、舞へや諷へや松が枝に鶴も来て舞へてんミう〜天下泰平千代よろづ。

ト、よろしくガル〜まはりながらふりある唄 松やにやにやにやにやにやにや。



『天下茶屋』考證

渥美清太郎

「天下茶屋」の芝居は全く京阪の専賣で、江戸には一つもありません。天保以後江戸でも盛んに出ますが、何れも京阪の脚本で演じてゐるのです。「天下茶屋」が舞臺にかゝつたのは、享保二十年九月、角の芝居で出したのが初めてせう。「住吉詣殿下茶屋村」ミいふのです。次は明和七年閏六月の同じく角の芝居「催馬樂踊始」これは夏狂言のアツサリしたものでした。

天明元年十二月になります。角ミ中で天下茶屋の競争が始まりました。角の方は奈河龜助の新作で「大願成就殿下茶屋聚」中の方は奈河七五三助ミ増山金八の合作で「連歌茶屋鬻文臺」この二作が鎬を削つて戦つたのですが、勝利は角の方に歸しました。七五三助もまだ賣出さぬうちですから、流石に師匠龜助には敵はなかつたのでせう。

「大願成就殿下茶屋聚」は、随分長いもので、全部で六幕ありますが、大體今日やる天下茶屋ミ、順序だけは同じ事と、たゞ細かい筋や人物や、セリフに至つては全然違ひます。序が内田

家の御殿から闇討で、三郎右衛門が左島頭を討つ發端ですが、昔の狂言、殊に幕を長く書くので有名な龜助の作ですから、實にゆつたりミしたものです。これでは、三郎右衛門ミ彌助の顔が瓜二つなので、屢々間違へるミいふ面白い筋があり、元右衛門は今日の元右衛門よりもつミ役が悪く、三枚目の氣分が濃厚です。葉末は出ないで歌綾ミいふ役が代ります。この外に、彌助の女房お力ミいふ素敵にお俠な面白い腰元が出て場面を賑やかにしてゐます。二幕目は岡船岸之頭が陰謀露顯の場で、佐藤知島頭(清正の穴)が出たり、岸之頭の女房お方ミいふ啞が出たり、頗る複雑してゐます。三幕目は東寺の貧家ですが、今日のミは大分違ひ、彌助は自分が東問ミ實の兄弟ミ解るので、悔んで自殺するのです。また染の井は身を賣つて傾城の姿で出て來ます。四幕目は天神の森返り討ですが、その前に伊織ミ染の井の道行を綺麗な景事で見せて、これが伊織の夢になり、いつもの蒲鉾小屋へ居所變りミいふ趣向。返り討も順序は同じだが、

少しも慘酷な所は無く、至極アツカリしたものです。五幕目は人形屋ミ京尾の行つて來いで、今日のミ同じ筋ですが、幸右衛門の母が出てゐて、これが大した役になつてゐます。太詰は、片岡造酒頭の館から敵討で、これも大體同じ行き方でありませう。この時の役割は、東間ミ彌助が淺屋爲十郎、左島頭ミ幸右衛門が中山來助、知島頭ミ幸右衛門の母が尾上新七、元右衛門ミ岸之頭が中村治郎三、伊織が三樹他藏、染の井が藤川三吾、お力が三樹徳次郎などで、大した當りを占め、以來、天下茶屋といへばこの狂言ミ極まつてしまひ、度々上演されました。

一方、「連歌茶屋譽文臺」の方の筋は判明しませんが、大體似たり寄つたりらしいので、たゞ元右衛門の行き方が今日と同じく、彌助を殺したり伊織を返り討にしたりする憎體大當りミ記録に残つてゐます。役割は、相馬三郎右衛門が嵐七五郎、人形屋幸右衛門ミ早瀬左司馬が三保木儀左衛門、早瀬伊織ミ三浦之助が染松七三郎、安達彌助ミ坂段右衛門が嵐文五郎、岡船飛驒守ミ加古川久兵衛が中村歌右衛門、佐東元右衛門ミ大江入道が坂東岩五郎、傾城染衣ミ早瀬千次郎が山下彌三郎、彌助女房おためが尾上多見藏などでした。役名もちよいく變つてゐますし、聞馴れない役名も出てゐます。

「大願成就殿下茶屋聚」は、翌天明二年正月、京都中山座で、山村儀右衛門の東間ミ彌助、笠屋又九郎の元右衛門、尾上菊五郎の幸右衛門で再演されて以來、唯一の天下茶屋劇ミなつて、

前にも云ふ通り盛んに上演されましたが、いくら香氣な昔の劇界にも變遷はあります。文化文政ミなるミ、龜助の悠長な筋立てでは看客にもピツタリ合ひませんし、第一時間が長くて連もやり切れない。そこで、文政の末に、ごこの濱芝居で、今日やる通りの脚本に改訂して上演したのですが、ごこの芝居だか、誰れが改訂したのだからハツキリしません。たゞ柴崎林左衛門が中心人物に扮してゐた事だけは慥かです。

この改訂者は、奈河篤助ではないかと思つてゐますその頃彼れは濱芝居にゐましたし、これを大芝居でやつた最初に彼れは立作者に据つてゐるのを見ても、濱芝居でやつた脚本を篤助が持つて來てやらせたのだらうミ推定するのです。

今日上演の通りに改訂された脚本一繪本殿下茶屋聚——龜助の作をグツミ詰め、慘酷味を多分にした——を初めて大芝居に上演したのは、天保三年八月の中の芝居で、その時の役割は彌助ミ萬助が坂東壽太郎、岸之頭ミ元右衛門が淺尾工左衛門、染の井が岩井紫若、伊織ミ幸右衛門が嵐瑞寛、東間が淺尾與六源次郎が中山みよし、玄蕃ミ刑部が片岡仁左衛門、等でした。この時、庄三郎をやつてゐた坂東彦三郎が江戸へ歸り、天保六年七月中村座で上演したのが江戸での初めで、以來東西ミ盛んに上演されてゐます。今日では、この改訂脚本を又々ウニミ壓搾して上演されますが、それでも化政度の京阪仇討狂言の味が多分に残つてゐます。尊重すべき狂言だと思ひます。



天下茶屋と天網島

高安吸江

今月中座で上演せられた大藏卿も一寸珍らしいものでしたが今度出るに聞いた大願成就殿下茶屋聚はまた一層珍らしいものです。實を云ふに私はまだこの芝居を見た事がありませんし、

また觀劇の數は私よりも寧ろ多いと思はれる私の姉さへも、此狂言を見ないさうです。此間天下茶屋が出るこの消息を得たのでその話をするに、姉は直にあ、嫌らしいと申しました。私等は小供の時よく芝居好きの母から、彌助や伊織の慘殺について筆にするさへ不快を覺える程の恐ろしい話を聞いて居ました。

當時千日前や京極なごで、牛血の滴りそうな陰惨な看板の下を潜るのほごより、其の前を通るのでも怖て居た私は、崇禎寺仇討が高々竹田(辨天座)か或は塲末でなければ上塲せられなかつたと同様に、天下茶屋があまり道頓堀へ出て來なかつたのを喜んで居ました。それも其害に返討そのものが既に残酷であるのに此芝居ではそれ迄の経路に於て、いつもなら端敵であるべき元右衛門の役で、却て主役以上十二分の逆さを見せつけるさいふ點に於ても、返討の親王である崇禎寺馬場に匹敵すべき

ものです。そして襦袢錦でも、又は彦山のお菊や、璧の初花、

さては佐野鹿藏なきに比べて遙に凄いな云ふよりも、より以上慘さを覺えさせられるのであります。

元來此狂言は天明元年の冬に大阪で上演されたのが始ですが私の幼時夜陰に無燈で獨り歩きを取てせしめなかつたものは、後に書き直して天保三年八月やはり大阪中の芝居で出た繪本殿下茶屋聚の方で、近頃東京なごで時々演ぜられたものも此れに據つたものであります。江戸末期の合巻や讀本にあらはれた癡氣分の一ツミして、卑猥や怪奇と共に慘虐味の尤も顯著だつた文化文政時代の影響を受けて居るのであります。また以て其當時の人氣の傾向を窺ふごも出來ます。

大願成就の方はかの南無三寶ミ叫で死だ天才並木正三の高弟で明和から天明へかけて浪華劇壇の勢力をもつて居た奈河龜助の作です。五十年も前だけにすべてが淡白で、返討も簡單であり、元右衛門も根強い大悪黨でなく、大詰で梁の井、お力の兩人に討たれる時なごは

——伊織が最期の時、膝行の一足ミ、思がけなう立上つたが、おれは根から立たれぬミは、よつく武運に盡き果てたか。

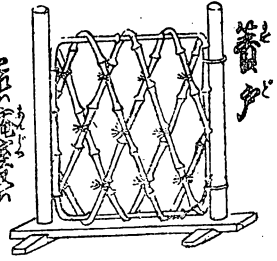
エ、く。こいふも有やうは命が惜しい。死にこむない。染の井さま、頼みます。誤つた、今こゝで殺さうより、膝行にしておいて、永う苦痛さすが、結局そつちのお爲ぢや。――まるで研辰そつくりの感がするではありませんか。それから序幕第二場城内無禮殿の場などは、名の示す通り、狸々の酒壺にからんで中々艶ツぱく、洒落本なごに見える可なり露骨な催情の臺辭に富んで居ますが、それも化政度に於ける程のあくさ淫蕩さを示さず、やはり其先驅を見るのが至當で、他方には所謂ジャラくとした上方式のジャラケ加減を遺憾なく發揮してゐるのも時代の反映なのでしやう。全篇六幕十二場になつて居ますが、古い狂言の通有性として随分冗漫なものですから、此れを今度何う云ふ風に取捨するか問題です。或はやはり繪本の方にして、先年菊五郎が當てたご云ふ元右衛門を延若にやらせて、東西の比較に人氣を煽らふとする趣向かも知れませんが、しかし前に一寸述ましたやうに大願成就の方の元右衛門なら、寧ろ河内屋の畑ではないか豫想せられます。鴈治郎の一座ではたしか大正二年五月に京の兩座で出したご記憶して居ます。その時は八百藏(中車)の元右衛門に萬助、梅玉の彌助、福助の伊織、芝屋(雀右衛門)の源次郎、成太郎(魁車)の染の井なごで鴈治郎は人形屋幸右衛門と東間三郎右衛門でした。私は此芝居を見なかつたのですが寫眞によるご鴈の東間は丁度小栗の風間八郎さいふ格で、押出しの立派なのは無類でも、元來此人に敵

役は無理であり、又やらせるのが無理です。敵役にならぬ處が此人の柄で、それがまた美點だご思ひます。

要するに今回の天下茶屋は古狂言を如何に補修したか、またそれを現今の上方俳優が何の程度まで消化して、古い上方狂言の情味を演出し得るかさいふ點に興味があるご考へられます。



近松二百年祭記念興行のあつた大正十一年十月、朝日で合評なごをやりましたが、今一寸其手控が見當らぬので臚氣の記憶をたぎつてみますご、天綱島三幕の中で大和屋が一番傑出して居ました。それは文樂で越路が語つた時と同様で、河庄や内のやうに、在來のものご全く別な道を行かうごする力の浪費も不用であり、また從來護回ごなく上演せられて殆ご洗練し盡された技巧を有つ在來のものご、比較對照せられる危険がない點なごもその理由の中へ算へてい、でしやう。鴈治郎の紙治、福助のおさんほごもごよりですが、殊に故雀右衛門の小春は忘れられない逸品でした。今度は多分魁車が別様の趣を出すでしやうが唯困るのは孫右衛門で、中車、仁左何れも悪くはなからぶが今一息で、やはり梅玉程の味は出ません。そこで私は鴈自身が寧ろ此役を引受けるご面白からふご思ひます。或は彼の熱心な努力によつて河庄や大和屋で孫右衛門が却てシテになるやふな事が出來上るかも知れません。まだ少々云残した事もありますが豫定の頁數が超過しますので此邊で擱筆します。



茶屋の世帯
あてりもの

天下茶屋漫談

落合浪雄

思ひ付いた事をあちこちと書き流したばかり、研究も
考證もあるも不足の漫談

天下茶屋の芝居の力點は元右衛門の性格に置かれて居ると思ふ、ユトリーばかり、プロットばかりの面白さは本當の芝居の面白さではないと思ふ、天下茶屋の芝居が歌舞伎劇の異色として、珍重されて居るのも此點にあるのだと思ふ、たしかに書き卸し當時の観客には一つの驚異であつたらしい、讀ひ物や舞踊やから發展して來た演劇の中で、性格描寫といふのは兎も角も心持を寫し出そうとしたものはそう澤山にはない、早い例へが「鳴神」「いもう酒」それからこの「天下茶屋」の元右衛門などが數へられる。

漸くに喜怒哀樂の表現、惚れる、嫌ふ、嫉妬するといふ程度の、心持としては原始的のものがやつと表現出來たのでさへ、

面白がられて居た時代の産物としては、假に酒の爲めに心を亂すといつた幼稚なものでも持つ噺やされたのは、演劇が心持の動きを表現する事に向つて、進んで行く可きであり、又観客も是を要求して行く歸趣を持つのではなからうか。

「紙治」の五左衛門や、「河庄」の八右衛門の場合、一つの心持の現はし方の異つた二つの面を見せて居るので、勿論面白いが計劃的であつて、心持の芝居といふよりプロットとしての組立の面白さで、此類には入れたくないのである。

「鳴神」や「いもう酒」の如く、唯酒を飲むで心持が變るといふ點からいつても、堅固であつた戒行が破られるとか、慎まやかな心が性的に魅惑されるとかいふものより、篤實忠良な從僕が悪そのもの、様な心に代はるといふ元右衛門の描寫が、類型の中で異彩を放つて居る所以で、又「天下茶屋」の面白さの中心に

もなつて居る理由であらう。

けれども僕等の進んで行く道としては、酒を飲んで心が變るのではなく、酒さいふエキスキュースなり又はサスペンスなしに性格の變化を描き出したいと思ふのである、ヂエーキルミハイドの如きは此點は誠に面白いのだが、劇として觀客の前でヂエーキル博士がハイドには變れない、役だけや仕々さだけなら變れるが、それなら唯の早變りか、ふきかへの單なる興味で心持の芝居さはいへなくなる、クロムランクの『ユキウ』は熱愛が嫉妬に變はる芝居で、中々に面白い、餘りに妻を愛する爲めに極度の嫉妬を起し、横暴なタイラントに優しい夫の心持が交錯し、錯綜し、直にその爲めに妻を致通させるといふので、僕等の考へて居る演劇の或意味の本質である、心持の芝居である芝居へミ進む可き道に、十分に突き進み得たものであるミ考へられる、いや或は餘りに進み過ぎたものであるかも知れない、もつこく／＼デリケートな心持の變化、動きこそ、演劇の表現す可きものとしての理想でなくてはならない。

×

×

延若の元右衛門は結構である、東京でもやつた事があつたと思ふ、六代目も此役が上手である、延若は或點に於て六代目と共通の上手さ、又は技巧を持つて居る人で、僕の考へでは柄がらいへば、延若に勝味があるだらうと思はれる、元右衛門役に

は是程びつたりした延若が、今度はさういふ風に演出するかに就いて多大の興味を持つて居る。

此前の時、いつも、誰でもが左様かも知れないが、あの酒を飲む處は勿論おきまりで好いミして、心持の方からいつて酔ふに隨つて段々に惡の氣持を出して行くやり方を、今度も繰り返へすのであらうか、勿論これが觀客にも十分の興味を味はせながら、高潮に導びいて行くので好い芝居である事は分るが僕は一つの異論があるのだ、飲むに隨つて酔ふに隨つて、次第に惡が昂まつて行くといふのは間違つて居ると思ふ、大いに偏狹氣論であるかも知れないが、さういふ善惡の變り方から、醒めるに隨つてもさへ戻るのが本當なのだ、いや本當らしく思はれるのだ。

僕の考へでは酒を飲むだ爲めに惡に心が移つて行く、單に酒が惡ではなく、酒の酔ひが動機で惡の心持が目覺める、酒だけが惡なら醒めれば善に戻るのだが、心に潜んで居た惡が酒の爲めに出はじめたのであるから、茲に心の内に善惡の葛藤が起る生氣になつた時酒を飲むで仕舞つたか、大變な事をしたといふ氣持を十分出す、酔醒の水のあみでも飲むまいとする心、さうしても飲まずには居られぬ心を見せて次第に酔つて行く、で善が惡へ直線的に變るのでなく、同じに酔つて居ても惡になつてはならぬ、善心に立返へらうミ、數度の反省や煩悶があつて、それで善が惡に壓伏されて仕舞ふさういふ行き方になるミ、さう

であらうかと思ふ。

貸座敷の場でも普通にやれば、彌助に對しての訛や述べは悪の假裝の善であるが、これを矢張本心から濟まないと思ひ、申譯ないと思つてのセリフなり心なりにして、それで居て又彌助を殺しても飽きたりない程の悪の興味が起つて来るさういふやり方にしたのである。

吉右衛門がやつた時に、さうも善人になりたがるさういふのが一般の評であつたらしい、これはこの人の柄にも寄る事であらうが、この人の蒲鉾小屋なさは、その善人さがほの見えてひさく人間味があつて好かつた、悪人が善人の眞似をしたり、善人が悪人を裝つてゐるのなさは、實際そんなに面白くはないので、事實一つの人格が悪にあつたり善にあつたりを繰り返へして行く事が出来れば、實に面白い。「天下茶屋」ではあるまいか、唯その變り目くが、その善惡の交錯が可なり深い研究を要するものであらう。

僕はこんな事を勧める譯ではない、從來のさほりて既に立派な元右衛門である延若が、こんな事をして觀客の期待を裏切るかも知れない、そしてこれは六ヶ敷しい、やり憎い、併し色々な意味に於て研究的にやつて見る事も損はなからう、延若程の役者が一つ役は、いづれも同じ演出であるさういふ事もつまらないことではあるし、又觀客も或は期待を色々な形式で裏切られて行く事に、十分の觀劇興味をそゝられもし又満足も出來

る筈であるから。

魁車の彌助、好いでせう、魁車の何處さなく實體なきころに技巧でない味があらう、福助の伊織は初役でも大丈夫であるさう請合へる、この人の品の好き、或る點にほの見える寂しさ、たしか僕は此人の伊賀越の數馬を見たと思ふ、數馬より伊織はキツト好いに違ひはない、成駒屋の東間、立派であらう、形に於ても、但しつきあいやが役さういふ様な意味でなく、しつかりさやつて貰ひたい、此役は考へれば考へる程、六ヶ敷い役でもある、面白いやりばえのある好い役でもあるさ僕らは思つてゐるのである。

配		役	
東間三郎	右衛門	中村	鴈治郎
早瀬	伊織	中村	福助
同	源次郎	林	長三郎
安達	元右衛門	實川	延若
同	彌助	中村	魁車
坂田	庄三郎	市川	市藏
染	の井	中村	扇雀



さんもん

漫談殿下茶屋聚

南木芳太郎

大阪での有名な敵討としては、南御堂前の磯貝兄弟の敵討、崇禎寺馬場の安藤兄弟等の敵討、この殿下茶屋聚の敵討である。何れも芝居に仕組まれて、人口に膾炙されてゐる。この三組の仇討がいつれも兄弟に依つてであるのも不思議な因縁である。さて南御堂前と崇禎寺馬場の敵討に就ては、それら、記録なり文獻があるので、史實の程度が分るが、天下茶屋の敵討に至つては傳説に留まり、これといふ記録がない。實録と稱するものが何かに書かれてゐるが、歌國の『攝陽奇觀』に敵討眞傳大意として左の意味の事が収録されてゐる。これが實録といふものであらう。

備前、美作の兩國の太守で浮田中納言秀家といへる人の家老に長船紀伊守家長といふものがあつた。家祿二萬三千石といふ大領を得ながら、足れりませず、虚に乗じて主家を奮はん

と謀つた。時に浮田家の家臣で林女蕃直則といふ忠義金鐵の武士が長船の叛逆を知つて之を誅せん機を見てゐる際、同じ家中で鎗術の師範役で五百石を祿してゐた當麻三郎右衛門といふ奸佞な奴が長船に一味して悪計を圖らし、忠臣林女蕃を闇打にして出奔して仕舞つた。女蕃の子重次郎と源次郎の兄弟は父の仇を討たんとして、母諸共國を立退いて、先づ播州加古川に足を止める。ここ三年、その中に兄の重次郎は業病で、足が立たずに弱つてゐるので、母親はそれを苦にして加古川で病死した。弟の源次郎は病める兄を痛はつて、安達彌助、佐藤元右衛門の兩家來を召連れ京都に上つた。時に慶長十三年九月、秋風が吹く頃に人の心も變り易く、家來の元右衛門は變心し、朋輩の安達彌助を殺し、剩へ兄弟の用金まで盗み出して逐電した。憐や兄弟は京都住居もならず、同月

に大阪へ下つて福島ふくしまの天神森てんじんのもりで非人ひにんになつて敵かたがの行衛ぎやうゑを探し
てゐた。歳は明けて慶長十四年けichoじよふねんになつた。世は春はるさはいひな
がら不幸ふこうな兄弟けいだいには又災厄さいあつが加つた。正月十二日しづつにじふにちである。源
次郎げんじらうが牛僧ぎゆうそう他出たしゅした隙すきを窺のぞつて、さきに逃亡ていぼうした元右衛門もとゑもんは
怨敵おんてき當麻たうまの腹心はらこゝろになつて手引てびきし來り、病弱びやくじやくな兄重次郎あにぢゆうじらうをむざ
々殺害ころして死骸しかがいを川かはへ投なげて逃にげた。弟源次郎にぎげんじらうは歸かへつて見
るにこの始末しじまつに悲憤ひひんの涙なみだに暮くれたが、氣きを取り直ただして豫よて母
の遺言いごんを思おもひ出して、城州じやうしゆ伏見御幸町ふしみのみゆきまちに住すむ、人形屋にんぎやう幸右衛門きやくゑもん
門かどさいふ以前いぜんは主従關係しゆじゆんかひのあつたものを頼たのつて行き始終しじゆじゆの事
情じやうじやうを訴うへて助力じゆりきを乞こふた。仁依にゑに富とみめる幸右衛門きやくゑもんは源次郎げんじらうを
打連うちづられて大阪おさかへ下り敵かたがの所在しよざいを探たづねる方法はうほうとして、手蔓てづるを求め
て木村長門守重成きむらなげのりぢゆうぢゆうぢゆうへ願ねがひ出た處ところ、仁心にんしん厚あつき重成ぢゆうぢゆうは片桐かたきり且かつ元もと
計けいつて、探究たんけうして呉くれた。恰度たつたその時とき、大野修理おほのしゆりに新參しんさんの家
來きやうらいで、伊藤將監いとうしやうかんと稱なづするものが居ゐたが、それが當麻たうま三郎右衛門さぶらうゑもん
門かどに相違あひだなしに突つきめられ得えたので、こゝに慶長十四年三月けichoじよふねんしがつ
四日よひ、住吉街道すまきちかうだう天下茶屋村てんかぢやむらに於おいて宿年しゆくねんの仇あだを報うじたのである
その後源次郎のちげんじらうと幸右衛門きやくゑもんは又鶴またつる姓なと名乗なをのりり、兩名ななとも秀頼ひでたか
卿けいに仕つかへてゐる中に大阪おさかの冬夏ふゆげつの陣じんに出仕しゆしして武名ぶなを天下てんかに残のこ
して元和元年げんわげんねんに戰死せんじした
と書かかれてゐる。

そこで以上の事件じけんがそのまゝ、取とり入れられて劇げきになつて現あらはれ
たのは、すつち後の天明元年十二月ていめいげんねんじふにちである。執筆しつしつ者は並木正三
門人かたがで、大阪作者おさかの奈河系ながけいに於おける元祖げんそ樂助がくすけであるが、この時
は六幕十二場むくじふにばうといふ長い狂言きやうげんに仕組しぐみんで藝題げいだいを『大願成就たいがんじゆじゆ殿下
茶屋聚ちやゑあひら』として上演じやうげんしたのがそもゝ始まりである。この狂言
大當りおほあたりで十二月九日じふにちから翌年よくねんの二月二十四日にがつにじふにちまで打通うちとほして大入
を締めたいといふ特筆とくひつすべき狂言きやうげんである。

この大願成就たいがんじゆじゆ殿下茶屋聚だんかぢやゑあひらの臺本たいほんを讀よんで見るに、かなり長い
ので患わづはされるが、却々面白おもしろく出來上きよあつてゐる。殊ことに序幕じよまくの場ばうな
きは、いかに天明頃ていめいごころの上方かみかた芝居しばいらしい氣分きぶんが舞臺ぶたいに浮うび出で
て、現代げんたいではとても氣きがさがめて書かけ相あにもない色模様いろまようの場ばう
面に艶語えんごがふんだんにつゞられてゐるから驚おどろかされる。それを
演出者えんしゆつじやうは樂々がくがくと臺詞たいしを述のべてゐるらし、見物けんぶつも又心地またこころよく受う入れ
てゐた處ところを想像さうぞうするに、今時の神經質しんけいしつらしい舞臺面ぶたいめんとはがらり
趣おもむきが違ちがつてゐて、いかに融合ゆがした、暢氣ちやうきらしかつた劇場げきじやうの
空氣くうきが浮うんで來きるのである。

面白いのは何んといつても三幕目の東寺前とうじまへの伊織いおりの貧家ひんかと、
四幕目の天神森返討てんじんのもりかへうちの場面ばうめんである。

これを文政頃に改訂したのか『敵討天下茶屋聚』で、當今でもよく演るのはこの方である。處で今度の中座上演は根本の『大願成就』の中でも殊に面白い三幕目と四幕目を選んだといふから定めて珍らしい狂言として一般から期待されるであらう。

○
天下茶屋の名稱は太閤殿下が堺の政所へ往來の途次、茶屋に休憩せられ茶を飲じたから起つた名稱であることは周知の事實である。處でそれが直に以て村名となつたかといふに、一般の人の言馴らはして來たのは、かつ後の寶曆頃からであらうと思ふ。その當時の地名は勝間村新家となつてゐた。休憩所の茶屋では早速天下茶屋小兵衛を名乗つてゐたが、傍ら軍中散といふ藥を賣つてゐた處から宣傳をやつた効めが廻つて誰いふもなく通稱天下茶屋村となつて仕舞つたのである。天下茶屋村に書かれてゐる文献は安永七年開版の『浪花のながめ』に住吉海道天下茶屋村南へ出づれば東の方岸の姫松云々あるのが古い處であらうと思ふ。處で狂言の方では多くは天下茶屋でなく、殿下茶屋になつてゐる。即ち天保の『繪本殿下茶屋聚』嘉永の『音聞殿下茶屋聚』安政の『會稽殿下茶屋聚』萬延の『名高殿下茶屋聚』といった風に天下を殿下に書き改めてゐるのはさう

いふ譯か、察するに徳川政府に對する遠慮の意味が、何は兎もあれ、豊公がいくら偉人であつても臣下である限りは、天下でなく殿下である方が妥當ではあるまいか。

○
さて敵討の場所は一體どの邊か、この考證をする閑人がまだ出て來ないが、俗説には與吉が芝だともいふ。與吉が芝といふのは現在の天下茶屋の本通りで、十五銀行のある向側の辻を東へ曲つた突當りに地藏尊が安置せられてゐる邊りをいふので、この邊を東間が深編笠で通つてゐるのを後から呼留めて勝負したま、如何にも當時を目撃したかのやうに物語つてゐる老人があつた。

○
天下茶屋といへば是富屋の和中散をすぐ聯想する、事ほご左様に昔から名高かつた藥も何處へ行つたやら影も留めない。この是富屋は今の天下茶屋と稱する場所でなく、一丁程北に當る西側で、現在では高津氏の別邸になつてゐて、蕭洒な門構へのある處が、その名残りである。(完)



元右衛門の型

森 ぼ の ぼ

「四天王寺の場」——「敵討天下茶屋聚」では三つ目だが、近頃はこれを序幕にする。「大願成就天下茶屋聚」にはこの場はないが、酒に浮かされた元右衛門が彌助の女房を口説く處がある。女が壺の中へ隠れるのを裸で追廻し、壺に抱き付いたりなぞして手一杯に三枚目を發揮する。酒から女へ移つて行くのが自然で面白いと思ふが、従來の臺本では女の方面はカットされたつてゐる。これは残り惜しい氣がする。

尤も『大願成就』を改訂した作者は、元右衛門を酒癖さへなれば、至極實直な男にしてゐるので、原本の無道徳な、輕浮な人物として書かれた元右衛門とは大分違つてゐる。恐らく役者側からの注文もあつたのだらうが、この脚本の底本にも見るべき『天下茶屋敵討眞傳記』に描寫されてゐる元右衛門の方に近つてたかのやうにも思はれる。(この『眞傳記』の元右衛門の墮落して行く経路は無理がなくて、大へん能く書いてある)

吉右衛門の元右衛門は、律義な處も、酒癖のある處も能く寫

してゐたが、酒亂になつての「動き」は菊五郎の方が面白い。



「東寺貸座敷の場」——元右衛門の忍込みに昔は松の木を足がかりにしたこの事だが、近頃は葡萄棚から登ることにしてゐるので、この時に既に彌助は自害してゐるから「殺し」はない。菊五郎初演の時は、引窓から這入るのを其筋から禁止されたから、一たん家根の後へ下りて暖簾口から這入ることにしてゐた。吉右衛門は引窓の綱にブラ下つたなりで足場のないオカシミを見せた。猿之助は引窓の綱を持つて、カツミ眼をむくのがキツカケでボオンを入れて極つたさうだ。菊五郎は引窓の條が無い代りに、行燈の油を障子の闕へ注したり、神棚の徳利から酒を呑んだり、例の如くいろいろな工夫があつた。棚から引窓へ近寄る時でも、竹を踏み折つて片足ブラリミ落して、見物をヒヤリミさせたりした。吉右衛門は棚を用ゐず、松の木から家根へ

這上る時に、蜘蛛の巢の顔へ掛つたオカシミを見せた。これは古い型にあるのださうだ。

順序は前後するが、元右衛門が花道で、按摩姿からガラリー氣を變へて正體を現はす所——菊五郎は本釣を入れさせて立留り杖を捨て、裾を捲り、腰を落して揚幕を見込むのが獨吟のかかりになるのだが、吉右衛門は眼をむくみ見せてクルリミ本舞臺の方へ振向き、ツケを入れさせて見得を切るのが獨吟のかかりでニユウツミ揚幕の方へ向直つて、中腰で見込む。これも古い型ださうだが面白い。

幕外になつての八方拂ひは、吉右衛門の方が菊五郎よりくさい。肩へ刀を擔いで大見得を切るを見せ、ガラリー氣を變へ刀のミネを左の掌で押へて、一散に駈け込むのは、菊、吉とも大差はない。「大願成就」では伊織の股へ斬り付けるのでなく、小柄を花道から打つたのだが、元右衛門は手ききではないのだから、逃げるはずみに斬り付ける改訂の方が好い。

◇ 「福島天神の森の場」——「大願成就」では元右衛門も、三郎右衛門も船から出るので、大道具は大分相違がある。船がある爲に、これだミ道具を蛇の目に廻したりなどしてゐる。

此場の元右衛門の拵へ、色彩の配合が非常に好い。黒襟の掛つた黄八丈の着付、萌黄献上の帯、朱鞘の大小刀、吉、菊とも先づ同様、いづれも襦袢は着てゐない。(芳幾や國周の似顔繪

には襦袢を着込んでゐる)吉はト書の通りの黒の頭巾を被り、菊は白の手拭を用ひる。(これは似顔繪に倣つたのであらう。)

菊は自分で火繩を振つて出るが、吉は腕助に火繩を持たせ、懐手して緩々出る。花道での「ねた刀合はして」の動きも形もは、菊五郎獨特の優れたものだが、吉右衛門の魂の凝つた底力のあるのも凄みがある。

伊織の殺しで、東間の出は、大概は敷疊の後からだだが、中車はト書通りに小屋から出た。「大願成就」では船の苦をはねて姿を現はす。そして拔身を手裏劍にして投げるのである。

「盛になつたかハレ不憫やな」で中腰に刀を肩に擔ぎ、顎をしやくつた形は面白い。菊五郎は實に好いポーズを見せた。吉右衛門はこの形も、大友が演たさいふ刀を地へ突立て、柄頭へ手を重ね、その上に顎を載せた憎くしい形も採用してゐた。

花道の引込——菊は死骸へ痰を吐くのが、チヨボのかがりだが、吉右衛門のは東間が這入るに、金包を内懐から出して口で封を切り、口に紙の残つた心でブツミ吐き出すのが、チヨボのかがり、口で花道附際へスタスタ行き、腕助が割前を貰ふつもりで手を出すに、その金包を一寸手へ載せてやり、すぐに取上げて小判二枚だけ投げてやる、残りを數へ乍ら七三で見得、菊五郎のやうにやさう、拵へて反身で這入る——。

大詰は、全く三枚目で、至極安手に演るので、菊五郎の丸く結まつて落入るのは面白い工夫だ。



續「鴈治郎の場合」

記録的な「天下茶屋」に就て

富田泰彦

「賞讃は得るに易く保つに難し」云つた詞が、近頃妙に私の頭に、こびりついて来た。歌舞伎國の先人も、俳優の増長懐を戒めた詞の、古い劇書に散見するのと共に、それ等人々は慎重に味はねばならぬ節が多いほきに、名はこゝにささぬまでも二三の俳優に對する世評の動きが、漸次變つて来たことは見遁せない現象と云はねばならない——併し幸にも、我が「鴈治郎の場合」にのみその不安が、微塵もない處に、彼の人格と藝格とが合致した強靱な處がある譯である。

「俳優には齡なし」か、「藝人は死ぬまで修業である」か、さうした言葉と思ひ合はす度に、我が鴈治郎氏の不斷の努力を吝まぬ舞臺上の眞剣さには、誰しも自ミ頭が下がる。

しかし、私の新造語？たる所謂「鴈治郎の場合」の演出には兎もするに苛酷な批判を下す人々が尠くない。——が、それでゐて彼が如き生氣潑瀾たる、フレツシユな舞臺姿に接した瞬間

もう既に彼の藝術に魅了されて、陶醉境に導かれてゐるに違ひないことを保證する。それなのに隙だにあれば、鴈治郎の藝を云々したがらる——種矛盾した感情の湧くのは、即ち太陽の慈光に狎れすぎた人々の有難さを知らぬのと同斷云つて可い。番木は風強し、鴈治郎氏の名聲の大きければ、大きいだけにいろ／＼な反響を齎らすものである。

十月興行の「大藏卿」で、曲舞をカットしたことが、大分問題になつた。その可否は、兎に角鴈治郎氏にても、それ位のことは知つてゐるだらう。——それなのに、それを敢えてしない處に、鴈治郎氏の時代を知る賢明さが判かる。奥殿で引抜かないので歌舞伎味を殺ぐの議論もあつたが、それ等は枝葉の問題で、彼の演出態度は、常にその時代々々に、順應して行くだけの、新工夫ミ、その用意こがある。其處に鴈治郎氏の強味ミ、劇界に覇權を握る處の不變の人氣がある譯だ。

一體歌舞伎の型は、年々歳々——否時々刻々に、崩壊されて行く、型自體が萬世不易の礎のやうな根強い生命を、永劫の舞臺の上に——更に云ひかへれば、純正な、藝術的琢磨を経た範疇から出てゐるものならば、いざ知らず、たゞその型が或點まで破壊されても、それに優るべき新演出が創造さるゝに於ては、決して不自然な結果だまは云はれない。況して鷹治郎氏の如き不世出の名優が、技巧ミ洗練ミ省察ミの限りを盡して完成された藝術には、最早何等の議論をさしはさむの要を認めない筈である。鷹治郎の場合の芝居の絶対價値が、恐らくさうした點にあるのではあるまいか——。

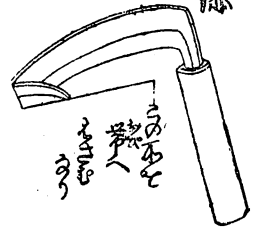
たゞ近來の『鷹治郎の場合』に困まるのは、その役處のマンネリズムに塵してゐるこの一部の好劇家の非難だつた。舊作新作を問はず、さうした非難は一應肯定しなければならぬ。しかし完璧なる藝術——謂はゞ國寶的價値のある彼の狂言や持役ならば、いつ幾度見ても、そこなふものではない。鷹治郎氏の『紙治』ミか『梅忠』ミかのユニークなものは、飽迄貴い生命のいぶきが、輝やかしく舞臺に充滿してゐるこゝを忘れてはならない。

處が、今度『鷹治郎の場合』の藝のマンネリズムを咎め立てする人々の爲めに、久々振りの『天下茶屋』を持ち出された。而

も鷹治郎氏は東間三郎右衛門ミ云ふ、珍らしく大敵役を買つて出て、序幕(今度の場合の)の天王寺の場から天神の森の返り討の大舞臺を見せよう云ふのである。——それには尻切れ蜻蛉の觀があるミ、或は一部の異論もあらう、しかし實際を云へば、斯うした冗漫な化政度に出來た敵討劇を序幕から大詰の敵討まで、擬ミ見物するほどの現代人には寛容さがあるだらうか別して奈河龜助の作品は、全く異例ミするほごに冗長である。

私は常に思ふ、今日歌舞伎劇を觀賞しよう云ふほごの人には、その狂言全部のプロットを必要ミはしない。『菅原手習鑑』が道明寺、車曳、佐太村、寺子屋ミ切斷されながらも、猶各場々々に、魅力を持つ所以のものは、俳優の演技をたゞ目標に置いてゐるからではあるまいか。若し今度の『天下茶屋』を東京流に藝題を据ゑるミなるミ、『元右衛門ミ伊織』で可い譯である。端敵ではあるが、前半は延若の元右衛門中心劇である。今度の芝居の成績は、か、つて延若氏の技量に俟つべきであるが、その延若氏の元右衛門や福助氏の伊織をして更に生彩を加へしめ、舞臺に千鈞の重味を示すものは畢竟東間が『鷹治郎の場合』なるが故ではあるまいか、この三優が古錦繪仕立にも、對比し得る返り討の場こそ——東間が、蒲鉾小屋から拔身の大刀を閃かしながら現はれた刹那の感興——何んミ云つても後來再び求めて得ざるものであらねばならぬ。

後抑の豫



漫談とりの聲

中井浩水

今度の中座は「敵討天下茶屋」でなくて「大願成就殿下茶屋聚」
ださうだ。然しこれは外題のみであつて、内容は矢張り元の
『敵討天下茶屋』でやるさうだ。『大願成就殿下茶屋聚』は奈河龜
助が天明元年に芝居の舞臺にのせた。『敵討天下茶屋』の方はす
つと遅れた作だ。

友人の某君曰く「天下茶屋聚」の聚の字は後の間違で初刷の丸
本には「天下茶屋叢」と叢の字を使つてゐたのを確かに見たこと
があるといつてゐた、さういつた丸本が果してあるか寡聞にし
て私は見たこともない、もしあれば面白い、新發見だ——殿下
茶屋より天下茶屋の思ひ出でかいて見る。

彌助役者に想ひ到るに故人中村梅玉が戀しくなる、いかにも
篤實な忠僕らしいところがあつた、伊織は福助の右に出る人は
あるまい、鴈治郎の東間三郎右衛門は立派な押出しである、い

くら元右衛門がうまくつても、伊織が上手でもあの東間の押出
しに貫祿がなくんば殺しの場は持てない、昔の歌舞伎らしい古
風な好い顔を持つてゐる鴈治郎、獨逸へ行つても黙つてあの顔
だけ出してゐれば何かにつけて理窟をこねたがる獨逸人は忽ち
一卷の大論文を作るかも知れない。

元右衛門が偽按摩、彌助に送られて浪宅の門へ出る、杖をす
て、風呂敷包をすて、頭巾を三つて花道のつけ際で揚幕を見込
んでしやがむ、ボンミ本釣、下座で『ミりの聲 鐘の音さへ
——』と唄ひ出す、あの情景は私の最もすきなところである。

『ミりの聲』といへば今でも思出すに冷汗の出る失敗話がある
まだ若かつた二十そこ、問屋橋の師匠の許へセツセ通つ
て哥澤に癡つてゐた頃、つぎめ先きの用務で名古屋へいつて漸
く戻つて来たのは大會の午後八時頃、岸松へかけつけるに丁度
私の番、早うくせせかれて洋服の儘で『ミりの聲』ミ外一つ、

唄ひ終つて床から下りようとした時、下つた鴨居で額をコソリ口の悪い奴が向ふの方から「大當り」、以來哥澤節でなくとも何處で「こりの聲」を聴いてもあの時の「大當り」を思出して獨り微笑を感ずる。

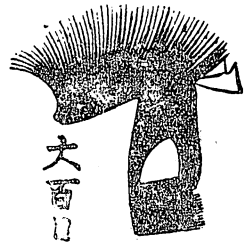
殺しの場は歌舞伎劇の一特長ともいふべき惨らしい美しさである「堤つたひにうそく」腕助先きに元右衛門の床で腕助が火繩をふりく花道から出てくる、箱登羅に定つてゐる、後から出てくる元右衛門の拵らへが嬉らしい、あの拵らへは最も中車にふさはしい、今度も来るくさいふ前觸れがあつて秋の雲のやうにフイ外れて仕舞つたのは返へすくも残り惜しい、「いつぞや東寺の暗まぎれ」さいふ伊織「月は出づれさ」元右衛門が受ける「臈にて」又伊織「差出す提灯がバツサリ」中車のあの含んだ好い調子が耳の底になほ聞える。

中車の元右衛門は強ゐて難をいへば立派すぎた、云つて故人卯三郎の元右衛門では寫實味から云へば相當な柄だがさうも歌舞伎らしい感じが乏しかつた、尾上松緑を襲がんとして果さず、友右衛門を襲がんとして先を越され、三樹大五郎たらんとしてそれも逸けずになくなつた卯三郎はさうしても元右衛門役者らしい氣がするがさて元右衛門に扮したのを見るさうもシツクリさびつてゐない、此人の長所則ち短所が累をなしたものであらうか。

今度は殿下茶屋にしろ四天王寺から天神森の返り討までいふことだ、天下茶屋を出すなら矢張り、少くとも萬屋の場までやつてはしかつた、勿論いろくの都合もあつてのこゝこゝは推するがブツ切りはあつけないこゝ夥しい、時間の都合で悪ければ何か他の出しものもあるだらう、鴈治郎の幸右衛門を久々で見かつたのを――

話は元へかへる、天王寺の場で元右衛門が酒の爲にさうく身をしくじる、酒癖が悪くとも悪の潜在性があつても元右衛門は善人であつた、それが東間と腕助との脆計にまんまこゝつて連れて行かれる、見物は「マア可哀想に」――「三眉をひそめるひそめられた元右衛門がもうちやんと悪黨になつてゐる、見物は忽ち憎くさげに。「マア憎くてらしい」白眼みつける「輿論」のお手本を見せて貰つてゐるやうな氣がする。

序幕――本當は三幕目――で坂田庄三郎と東間三郎右衛門と同じ拵らへの編笠着流し、これが幕切りに出合つて編笠まつて顔を見合せる、これが東間役者のズボで代役で失敬する風がある、わが鴈治郎は必ずや忠實に序幕から出るに違ひない、これ迄もよし編笠はさらさすもそんな風の悪いこゝこゝをした人ではないと信じ度い。(十月廿二日記)



六百〇

天下茶屋の人々

—元右衛門の二つの演出なき—

高 谷 伸

「孤ひきちぎり立出るは、思ひがけなき東間三郎右衛門。」

の床で、右手に拔身を提げ左手はふみころ手にして、悠々に出る東間三郎右衛門の立派さ、數々見てゐる鴈治郎の舞臺の中でこれ程美しい錦繪は、ちよつと思ひだせない。それから後に吉右衛門の見た、巖笑の見た、しかしこの東間は鴈治郎に及ぶべくもなかつた。

それは大正二年の五月の兩座で今の中車の元右衛門三萬助、福助の伊織、故人梅玉の彌助と久八、傳五郎もまだ生きてゐて非人頭を勤めてゐた。徳十郎の尼妙閑が面白かつた。さうした頃ではあつたが、元右衛門が彌助を殺す時、裾を掴まれた手を斬り落すいぐさは、もう見られなかつた。あまりに慘たらしいさいふではあるが、それだけ頼廢期の歌舞伎の味は淡められてゐたのである。菊五郎の元右衛門の時は、天窓からの忍びこみさへなかつた。しかし、その後延若のを見た時は、天窓の忍

びを見せてゐた。東京より大阪の方が、物がわかるか、なきと思つた。

人形屋幸右衛門は延若のが面白かつた。「それ取うつてこいなぎ先代寫しらしい味を見せてゐた。彌助は梅玉、腕助は翫助がよかつた。」

元右衛門は中車菊五郎延若荒五郎扇雀なきいろく見てゐるが、東寺の浪宅なき、延若と菊五郎を比較するに餘程の相違がある。扇雀は全然延若によつて演つてゐた。

延若は大正九年十二月浪花座、菊五郎は大正八年十月市村座所演の演出によつて兩者を比較してみる。

東寺の貸座敷では一文笛を聞かせて揚幕を音なしにあげて出る。花道七三で「按摩けんびき」を言ひ、本舞臺へかゝると、も一度「按摩けんびき」と言ふので彌助が呼び込むのが延若の演出であるが、菊五郎は「按摩は如何」と元右衛門から聲をか

けて合力ミ思ひ揉ませてくれし頼み、強つて按摩することに
つてゐて、第一歩から兩者の解釋に根本的な相違がある。

内へ入つて下駄に杖を通してあがるミ彌助が「おまへは」ミ
いふのでこの聲を聞きわけけるやうに手を腰へあて、首を前へ突
きだし彌助ミ知つて逃げださうとするのを、彌助が引き戻して
上手へ押しやり意見の上、見トけ果てた心ぢやなあとミ言ふので
聲をあけて泣き述懐の長せりふを言ふが、彌助は本心がまだわ
からぬミ合點せぬので死ぬ死ぬ井戸はさごぢや死んでお詫びを
するミいふ。結局五本の指がむさいミて何んで切つて捨てられ
やうミなり、そこへ源次郎の聲がするので元右衛門を押し入れに匿
すことになる。この邊は五本の指のせりふが後になる位のこと
で菊五郎の演出も大差なく。元右衛門が押し入れに入つてゐるう
ちに、外では染の井の身賣りの話が運んで百両の金が残り伊織
は片木原へ敵を搜索に行く。家の中が靜まるミ、彌助は元右衛
門を押し入れから出して鳥目ミ着物をやる。元右衛門は表面口さき
で禮を言ふて外へ出る。これからが眼目だ。

元右衛門は袖で涙をふきながら格子を閉め花道へかゝるミ、
菊五郎のは本釣がボウミ入る。ぱつたり落すやうに杖を投げ
だし、額を擦であけるやうにして頭巾をミり、そつミ下駄をぬ
ぎ兩手で尻をまくつて腰を落し、前かゞみになつて首をつき出
し、苦味の勝つた顔で向ふをぐつミ見込む鳥の聲の獨吟にな
る。菊五郎 格子戸から内を覗いて又もミへ戻り彌助から貰つ

た着物の入つた風呂敷を棄て鳥目を棄て片袖をひきちぎつて頬
かむりした上、格子戸の奥にあつらへた窓から覗き、下手の棚
の柱を攀ち柵の上を這ひ、中程で踏み折るなぎのおかしみあつ
て屋根へかゝり上で引窓を覗き、彌助の言葉を聞き一々細かい
思ひ入れがあつて終にゴトンミ音をたてるので彌助が猫だミい
ふので猫の泣聲をやる。この間うつ伏になつたまゝである。ミ
彌助がびつしやり引窓をしめるので屋根の上でミびあがり、
裏口へ廻る。中車のも似たりよつたりであるが、菊五郎に天窓
の忍びのないのは、うるさい結果であつたらう。

ミころが延若のはすこし變つてゐる。彌助に送りだされた元
右衛門は既に頭巾をミつて坊主頭を露出してゐる。花道七三ま
でそろ／＼きて立止るミ、懷中から足許へ貰つた鳥目をほさん
ミ落し左へ蹴り寄せるミ、鳥の聲の獨吟になる。下駄を片々づ
ゝぬいで杖を通し横へ置き手拭を出して頬冠りして本舞臺へ戻
る。表の格子戸は出る時彌助によろ戸紳りせいミ言ふたし、奥
の突上け窓は彌助が閉めたので延若のは、すぐ菊五郎の場合の
柵に相當する物干の柱を攀ち屋根へ登る。屋根へ上つた延若は
天窓から下をちよつミ覗いて屋根へ仰のけにごろりミ寝る。彌
助が酒を飲むのを上から見て、辛いミいふので胸を擦でたり、
こゝでさま／＼のおかしみがある。終にゴトミ音を立てるので
猫かミ思はれ下から追ふのでゴロリミ仰のけに寝て、寝がへり
して裏むきになり猫の聲をつかひ、彌助が寝込むのを見ミつけ

て天窓から忍び込む。この花道の型は延若より菊五郎の方がや、派手であるが、荒五郎のに至つては一層派手で、花道へかゝるに、躓つのでボウシくる。思ひ入れあつて杖を前へ投げ下駄を右から蹴り出すやうにぬぎ、右手を胸から出して頭巾を脱ぎ口に啣へ裾をまくつてグイミ大見得をきる。それから松の木から塀づたひに屋根へかゝる。この間始終外から見られるのを注意して足でさぐつて目を外へむけてゐるのが變つてゐる。

さて、菊五郎の元右衛門は、裏へ廻らされるから納簾口から首をだす。そつミ忍んで彌助の寢息を窺ひ神棚の神酒をこり、喇叭呑みして、上手屋臺の障子をあげ、柱につかまりながら寝てゐる源次郎をまたけやうさしてまたけられず、柱を持つてくるとり廻りやり直して刀を取り鞘を拂ひ起きたら斬るべく刀を擬したま、金を窃み懐中し拜み打ちに彌助を斬らうとして斬れず源次郎を斬らうとして刀を柱に打ちこみ、びつくりして納戸へ逃げこみ、又納簾口から顔をだし出なほして指できつちを斬らうかをや、彌助の上に馬乗りになつて突かうしても流石にためらひ、下手へきてふう息をつき、出なほしてぐつミ一突き突いてから馬乗りになつてゑぐるのである。

延若のは、引窓の紐にぶら下りながら足でさぐるミ床几の上にあつた徳利にさわる。徳利を足でつまんで下へをろし床几を踏み臺にして下り徳利の酒を呑み、はじめて髻をぐいさまくるそれから土瓶の水を敷居へ流し障子をすべらしてあけるが、昔

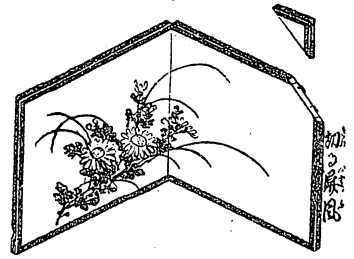
は敷居へ小便する型もあつたさうである。金を盗んで逃げやうとして彌助に躓づく、起ち上らうとする彌助の頭から蒲團をかぶせ、刀を取つて抜くの奪ひこつて蒲團の間から彌助を突き殺す。

あゝ伊織の歸つてくるのに一太刀斬りつけて花道の引込こなるのであるが、引込みも延若のは簡單であるが、菊五郎のは、さまざまのしぐさがある。

兩者の相違の主要點は菊五郎の方は金を盗むこも彌助を殺すこもすべて計劃的であるのに反し、延若のは戸棚の中で身賣の件を聞き慾心を起し、彌助に躓いて目を醒まされるのでこれを殺すといふ風に漸進的になつてゐる。肉親の弟を殺す程の事をやるのだから延若の方が合理的であるが、昔の正本を見るに、彌助を殺してから金を盗んでゐる程で、この方が元右衛門の兇悪性を強く見せる譯である。そのさぢらを取るかゞ議論の餘地のある所である。

福島天神の森の場にはさまざまの故人の苦心が窺はれるが東寺の浪宅だけで豫定の紙数を超過してしまつた。返り討の場に就ては他日改めて筆をこる。

天明元年の書き卸しの奈河龜助のこゝ、奈河龜助改訂のこゝ、發端態迦山、大序浮田館から大手先き、二つ目の龜崎別莊出立のこゝ、三つ目が天王寺であり、近來この天王寺を序幕にするの多いこゝなごは、他に書く方もあるこゝ、思ふから、今回はこれで擱筆する。



憎んでほしい鴈治郎

高 原 慶 三

△……「天下茶屋」の狂言が出るそうだが、「法界坊」も同様、近來若手の賣出し役者が元右衛門を誰もかも演りたがるやうだが……

○……そうだね、僕も初めて見たのが大正三年の夏歌舞伎座でそれまで見たことのない狂言だったのを菊五郎のが大へんよかつたので、それから吉右衛門、猿之助？中車、卯三郎も續々として元右衛門役者が出て来たわけだらうね、結局「天下茶屋」を掘出して来て菊五郎に功名を樹てさせた田村將軍がえらかつたのだね。

△……菊五郎のは想像するところさうも駄々兒じみやしないかね？……

○……うん、そりや天王寺の塲で、眼がさめてからの駄々兒ぶ

りなんか一寸痛快だったな、東寺貸座敷の塲で忍び込むで猫の鳴き聲なんかも喝采されたものだよ、引込みの花道際のシグサなき思ふ存分芝居をしたが、こんきの延若も定めてこゝは面白からうと思ふな。

△……天神の森で、伊織のやり取りで「安達元右衛門さま」から「いざりになつたか」は面白いところだが、役者によつてもいろ／＼のシグサもあるんだらうな？

○……勿論、こゝが元右衛門の當て塲だよ、菊五郎のは両手で刀を肩にかついで、腰を落して膝をかゝめた。卯三郎のは刀を地面にさして、柄頭へ顎をのせるやり方は「友右衛門の元右衛門か、元右衛門の友右衛門か」ミいはれた明石屋型だそらだよ。

△……友右衛門といふ役者は元右衛門同様酒癖がわるくて、意地悪で、役者仲間の憎まれ役だといふことを聞いてゐる。

○……そういふことだが、元右衛門のやうな端敵三枚目が、かうした立者がやるやうになつたのも、全く友右衛門のがよかつたからだといふことだ。先代菊五郎もやり、名人小團次もやつてゐる。悴の友右衛門もやつてゐる、だが名人小團次さへ萬延元年の年表を見るに「大友に及ばぬぎも憎みあつて評よく大當り」にある位だから友右衛門のはさんなによかつたか、一寸想像がつかんと思ふ。

○……寫真で見るに、菊五郎の圓顔が下司張らないが、卯三郎なんかこの點でトクをしてゐる譯だね。

△……そうだ、大友の似顔顔繪なんか見るに、頬骨が出ばつていやしい顔をしてゐた。吉右衛門のは寫真だけしか知らないが、天神の森では寫樂風な顔のつくりだが、何にしても愛嬌が邪魔をしなかつたらうか？

○……そこへゆき、今度の延若の顔なら憎みもあり、下司ばつてもゐる點からいつて餘程トクをしてゐるが、形に於て菊五郎吉右衛門に及ばぬところがあるだらうな。吉右衛門のを見ないから知らぬが、恐く菊五郎の場合に同じだらうが、菊五郎のを見てツク／＼感じたことは役者に華があり過ぎて少し立派過ぎること、東間以上の實悪になる傾きがあつたが、こんぎの延若にもやはり日の出の役者だけにその憂ひがない

でもない。が相手の東間が鷹治郎といふやうな大きな光りだけに、案外そうした缺點も目立たないかも知れぬ。この點からいふに卯三郎のは大友に最も近い皮肉な下司な蓋い元右衛門だつた。惜しいかな調子の張り方が拙く、形が少し崩れてゐた、さうも一短一長のあるものだな!!

△……鷹治郎の東間はさうだらう？

○……この前、中車の元右衛門で大阪でやつた時の僕は見なかつたから知らぬが、寫真で見ると實に立派だつた、さすがは天下の名優だと思つた、定めて返り討の場の紫縮緬の着つけが、よく似合ふだらう。

△……しかし鷹治郎のやうな敵役のきらひな、誰にも彼にも好かれる八方美人役の好きな鷹治郎がよくあんな實悪を承諾したものだね。

○……それだよ、僕が兼々鷹治郎に對する不服は……こにかく鷹治郎のやうな古今の名優でありながら、あれ程役の上で融通の利かぬ役者なんてあるもんぢやない。女形は感心せん、老役は出来ん、それで實悪はきらひみ來てゐる。たゞモウ女子供にチャホヤされる役ばかりをやりたがる、それが僕には不平でたまらなかつたのだ、それが今度實悪の大本山東間三郎右衛門をやるなんて大に話せるやうになつた譯さ、さにかく名優の資格を得るにはさうしても實悪を卒業せんま駄目なのだ。大幸四郎を見玉へ、代々の團十郎、代々の菊五郎を見

玉へ、坂彦を見玉へ、梅玉、歌右衛門を見玉へ、その他座頭で實悪の出来んやうな役者なんて鴈治郎以外にあるもんぢやないんだ。そうした理由から僕は二三年前から鴈治郎に一時平の七笑ひ—なんか大にすゝめてゐるやうなわけだ。實悪が全く出来ん人ならしやうがないが、「國性爺の甘輝のやうな傑作……さすがに三宅周太郎君だつて鴈治郎の甘輝には極めをつけてる程の傑作が出来るんだから一つ今後は心を入れ替へて見物に憎まれるやうに憎まれるやうになつて貰はんこ困ると思ふね。

△……だつて鴈治郎ほぎの美貌の持主が實悪で見物にいやがられるのは悪い考へだと思ふな。

○……それ、それが君が間違つてゐるのだ、五代目幸四郎を見玉へ、實悪では古今を絶する名人だつたが、舞臺に愛嬌があつて、男ぶりのよいこも古今無類だといふ評判だ。實悪で憎まれながらも愛嬌の賣れんやうな役者だつたら役者を廢業したらよからう。幸四郎の東間が三つ銀杏に花菱の紋をつけた紫縮緬の着付、更紗の下着で出た姿は憎いながらもふるひつきたいものだつたらう。今の左團次が幸四郎型の實悪をねらつてあれだけの愛嬌のある點に於て僕は藝の巧拙以外に劇壇第一人者だといつても推稱してゐる所以はそこなのだ△……いや有難う、君の説に従つて今度は僕も「見を入れ替へて鴈治郎を大いに憎んでやるつもりで東間三郎右衛門を見る

こゝにしやう。
○……有難う、せいゝ鴈治郎を憎んでやつてくれ玉へ、頼むから……

あふむ石

—下茶屋聚—

幸右衛門 市 藏
源次郎 長三郎

幸右衛門 お氣づかひなされまするな、幸右衛門がかよつてあるからは、染の井獄のお身受け、まつた葉末様のお行衛も詮義いたしませう。其の上敵三郎右衛門。

源次郎 幸右衛門、きつと力を添へてたもるか。

幸右衛門 三代相恩の主君、命にかへても。

源次郎 忝けない。

宇年助 ト、この時、宇年助、忍びよつて。

源次郎 うぬ、源次郎。

幸右衛門 ヤツ、そやつは東間の。

源次郎 かたうどでムリますか。

幸右衛門 おいのう。

宇年助 こりやたまらぬ。

幸右衛門 こやつをしめ上げ。

ト、逃げやうとするをグいと押へ。

幸右衛門 敵の手がかり、めつたに逃して……たまるものか。



改作は害作

藤井紫影

大正十一年朝日新聞社發起の近松二百年忌記念事業の一つとして、鴈治郎丈一座が原作通りに天の網島を上演した時は、同事業の一部を引受けた自分も見物して大に愉快に感じ、今後これを機として原作復活の屢々起らん事を内々期待してゐたのであつたが、さういふ譯かそれきりで音沙汰がなく、天の網島といふ名で其後上演されたものは、鴈治郎丈のも延若丈のも皆改作物の方であつた。

五左衛門が手品師のやうに箆笥の抽斗へ金を投込んだり、お三が娘の袖にわざ／＼手紙を書いたりするやうな小細工極まるあの改作のどこに取所があるのであらう。鴈治郎丈自身も原作上演の當時は、こんな結構な物があるのに、これまで何であんな詰まらぬ物をやつてゐたのかと思ふに馬鹿々々しい云はれたさうであるが、其後一向やられぬ所を見るに矢張仕馴れた方

がらくでもあり仕勝手がよいのであらう。がそこを一奮發して晩年の思出に大いに大阪役者の意氣込を見せてもらひたいものである。

新作も結構であるが、近松物にも復活させてよいものが、世話物はいふまでもなく時代物の中にも随分ある、今日歌舞伎に演ぜられる義大夫物には純粹の近松物は殆どなく、大抵出雲や半二の物ばかりである。是等は多く見た目の美しさ花やかさを狙つたもので、その内容は空虚でノンセンスである。今日人形芝居にも歌舞伎狂言にも何度もなく繰返される二十四孝の十種香の段の如き、八重垣姫と濡衣が兩方に部屋を隔て、繪像の前で回向してゐる舞臺面は如何にも美しい對照で、そこへ藝作が悠々として一間を立出で例の獨白があり、それから二美人が之にからんでよろしくある場は全く繪模様で、見物の目を悦

ばし樂しませる效力は十分に備はつて居るが、さて何故に濡衣が繪像に向つて愚痴を並べ、勝頼が花作りになつて敵の中に入り込み、それが今謙信に抱へられるやうになつたのか、そのイキサツについてはハテ合點のゆかぬは勝頼ばかりでなく見物は勿論、それ／＼の役に當つた俳優其人にもわかるまい、わからぬのが寧ろ當然で、丸本を通讀した吾輩にも實はわからない、その程滅茶苦茶なのが此丸本の筋立てである。もし此筋立が常識でわかるやうに口でもいへ筆でも書けるなら、その人は人間以上の何者かであらう。これが大近松の川中島合戦の改作だから驚く。すべて改作といふに無智恵を絞ひ出して、無理無體に原作以上の奇巧を弄しようとするから、不自然極まる人物や趣向が續出して馬鹿々々しい物さなるのである。天の網島の改作もこの例に漏れない愚作悪作の一群で、原作を害するこゝ甚だし

い。
寶曆五年七月豊竹座上演の 双扇長柄松（並木永輔、淺田一鳥等）は長柄の一つ松の枝に辭世を書いた一 双の扇をつるして七の傍で縊死する結末から題名を取り、明和六年七月再興の竹本綱太夫座興行の中元噺掛鯛（三好松洛、竹本嘉藏作）は治兵衛が身すがらの太兵衛勘九郎二人の悪者を船入橋で斬り殺し、その場に傘を忘れたのが證據にお尋ね者となり、治兵衛は死を決し小春をつれて、その両親によそながら暇乞ひにゆく、治兵衛の番頭又右衛門ミ乳兄弟の八百屋伊兵衛ミが治兵衛を助けよ

うに謀つて下主人ミ名乗つて出る、然るに太兵衛勘九郎は死後その大罪が露顯して、又右衛門伊兵衛の兩人共に一命助かり、悦び勇んで主家に駆けつけるミ、治兵衛小春は藏の中で自害してゐた。題名は治兵衛小春が親許へ暇乞ひにゐたのが中元の節供の日で、両親はかくも知らず、治兵衛が女房を離別して小春を本妻にするミ聞いて喜び、節供用の刺鯖を肴に盃を勧めて「治兵衛様とおみつ（小春の本名）此さし鯖見るやうに死ぬる迄女夫はなれぬかため」いふ文句から出たのである。次に安永七年四月北の newly 芝居興行の心中紙屋治兵衛（近松半二、竹田文吉作）は以上の二作に比すれば餘程原作に忠實で、浮瀬の酒樓で太兵衛が治兵衛を陥れよう陰謀をたくらむ場さ、長町なる小春の母ミ妹ミ二人ぐらしの訖住居へ、治兵衛ミ小春ミが名々思ひ／＼によそながら暇乞ひにゆく場を添加した程度で、大體は原作通りでまづ穩當な方である。然るにその後これを増補して、おさんの尼になること、舅五左衛門の實意、太兵衛殺しなき、種々雑多な小刀細工の加はつた愚作が今日まで行はれてゐるのだから、誠にやり切れない譯である。
鴈治郎丈が今回再び原作通りに演じられるのは誠に結構で、これから度々演出して得意藝の一としてほしいものである。

（昭和三、十、廿四）



紙 治 漫 談

石 割 松 太 郎

もう「天の網島」の考證でもありません。殆んさいひ盡くされ、私の如きすぐ幾度も書いたので、紙治ばかりは、何か新発見でもなければ、その考證は書く氣になりません。で、「紙治」を考へて、心に浮ぶこゝを述べませう。

今日では治兵衛といへば、鷹治郎。鷹治郎といへば治兵衛を聯想するほど、治兵衛は鷹治郎の「物」になつてゐます。観るに見ないに拘らず、道頓堀で「紙治」が出るのだといふて、「又か」をいひます。が、いつも松竹の宣傳部では、中座では幾年目だとか、年代記を繰つてゐますが、これは又勿體ない、贅澤な看客の口癖だ、遠慮をせずに、「又か」でも、氣にせずにお演りなさい。——を勧めたい、演つていいものは幾度見ても面白い。鷹の「治兵衛」がそれです。忠兵衛には議論があるが、鷹の河庄の治兵衛には、殆ん申分がない、完璧の藝です。「又か」といふ奴は、いふ方が悪い、下らぬ新作をやるよりも結構な治

兵衛をおやりなさいを勧めます。

が、目新しいといふ意味で、私は今度の「天の網島」で、興味を引くのは、延若の孫右衛門です。いい梅玉の例が前の前にある、死んだ多見藏でいかず、死んだ段四郎でいかず、中車では、「ついに挿さぬ大小ほつこみ」が利きません、ついにさつきまで、差してゐた土上りに見ませう、市藏ではいかぬ、ソコで延若になつたのでせう、十一月の中座の役々で、私期待焦れてゐるのは、この孫右衛門一つです。延若の今後が、この孫右衛門の成否にかゝつて存するまで、私は思ひます。昨年から今年へかけて我童が、頻りに老け役で成功してゐます。紹益の如き、助左衛門の如き、それですが、延若の孫右衛門はさうあらうか。器用な人ですから一通りはやりませうが、一通りでは承知が出来ない。鷹を向ふに廻はして「兄の慈愛」が延若に出れば、うれしいことだと思ひます。

◇
今度の「天の網島」は、原作の「網島」だき聞きました。朝日新聞主催の近松年忌の時の臺本だらうと思ふが、するに、紙治内の場の鷹に注文がある。例のおさんが買物を出してゐる間の鷹の科である。あの間を、ちよこまかき、女房の機嫌をみるやうなこをせずに、ちつとして、「この場の治兵衛」の心持を出してほしい。これが今度の鷹の成否が、かゝつてこの一點にあると思ひます。

◇
福助のおさん、魁車の小春に定評がありますから、多くをいひ加へる言葉もありますまいが、おさんは何と哀れけはなくてはならぬが、さちらかさいふ賢こがりの亭主が浮氣をするのが尤もださいふ女でありたい。「岩國の仕切金、尾は見せぬ」さいふ賢こがる、亭主のいろに先ぐつて手紙をやるやうな賢こがり——近松の作中の女で、私の最もイヤな女はこのおさんである。こんな女房を持つてゐちや浮氣をするのは當り前ださいふ私と思つてゐる——の牛を賣損う女が出ればいゝと思ひます。

◇
おさんに反して、小春は「女郎」を離れてはならぬ、南の湯女から仕替へをまつた北の女郎です。女郎を忘れてはならぬさにも、おさんに約した義理を立て通す「意地」がなくてはなりません。私が見たうちでは、「女郎」で始終しえたのは、死ん

だ雀右衛門一人です。他は藝はうまくとも、藝者に見えるのが悪い、魁車の成否もこの一點でせう。

◇
然らば「女郎」でもあり「女郎の意地」もあつたのは誰か問はれるに、今まで見たうちでは、私はなかつたさいはねばならぬのを遺憾します。但しそれは歌舞伎であつて、人形ではこの二つを備へた立派な小春がありました。それは例の先代の桐竹紋十郎でした。人形は動かねばならぬ。動かねば所謂「モテない」のですが、紋十郎の遣つた小春は、動かずに、長い間泣いてゐるだけで「女郎」を離れなかつたことが感心、そして切前に無理酒を飲む科で「女郎の意地」を見せてゐましたのが今に記憶にあります。

◇
この紋十郎が東京の歌舞伎座で、飯炊の政岡で、塗盆に小役を寫しての愁嘆をしました。そのあとで、「野崎」のお光で、お染を鏡に寫して、簪で突ツつく科が——今もやりますが、この科を紋十郎がした時に、五代目菊五郎が、紋十郎さんは大層な人形遣ひを聞いたが、さうでもない、一日のうちに盆鏡を使つて同巧異曲の科を繰返へしてゐる——さいふ意味で批難をしたことがあります。

成ほご、さうだ。藝さいふものは、全くむつかしいものです「名人の言葉」です。



紙治三題話

木谷蓬吟

〔一〕叱られた紙治

鷹治郎が東京で「紙治」を演つて、暴慢な男、僭上な男だこある劇評家に叱咤されたことがある。それは藝の上の批評ではなくて、外題の附け方に就てである。

『紙治』の狂言云へば、今まで皆が皆まで半二の改作物の河庄や、無名氏補作の時雨の炬燵を演つて居る、そして外題を無造作に『心中天網島』など附けてゐる。申すまでもなく、『天網島』は大近松の作で、半二の紙治は『心中紙屋治兵衛』である。梅川忠兵衛の狂言にしても、戀飛脚大和往來をやつて居ながら、大近松原作そのまま、『冥途の飛脚』など、收まつてゐる興行當局の大度胸には、これまで再々聽倒されて來たのであるが、さて、數年以前、大近松二百周年忌の記念興行としてこれは本當の大近松原作の『天網島』が上演されてから云ふものは、さすがに寛濶大量な松竹社でも、半二の紙治に『天網島』を附けるのに躊躇したらしく、爲に、紙治を分つて二種こ

し、大近松作『心中天網島』、半二作『心中紙屋治兵衛』を云ふ風に、やつこのこゝに本格に區別された、それも甚だ最近のこゝに屬する。

話にもこに戻る。さて、鷹治郎東京出演に、今まで目に馴れた半二の『紙治』を登すに付て、外題を本格に據つて『心中紙屋治兵衛』を發表した。ところが忽ち暴慢だ僭上だ、散々に叱られたものである。曰く、紙治の狂言なら今まで通り、心中天網島である可き筈だ。それに、自分が主役の治兵衛を演るからこゝで、外題を變へて心中紙屋治兵衛とは何たる暴慢だ……

斯んな理窟で叱られては鷹治郎たらずとも、懐で錢をよむやうに俯向いて居るより外はない。殊にこの外題變への張本人は鷹治郎でなく松竹の本管に潜んで居るに於てをや。鷹を叱るより松竹の悟道を賞めてやつて貰ひたい。

〔二〕好色涙の蜷川

ある古い雑誌を見るに、今の秀調が、紙治のおさんに扮した

時の苦心談のうちに、先代秀調が『おさん演出の心得』を述べ
てゐるのがある。

……先代は（先代秀調のこゝ）おさん云ふ女を解釋して、
一體嫉妬深い、ふてくされの女なのだから、その心持で萬事
當て付けのある女にしてやらないで、見物に情が映らないで
云はれましたから、其性根でやつて居ますし、また、尼姿に
なつて心中の場へ出たいといつてゐましたから、今度私も其
の積りでゐましたが、時間の都合で出幕にならないから其儘
になつてしまひました。

おさんの性格觀は、や、原作に觸れやうとはして居ながら、
惜い哉ホンの皮相の上を走つて通り過ぎた。然かし、こゝでは
それな理窟を言ふのが本意ではないから避けるが、心中の場は
尼姿のおさんが登場して、一芝居打う云ふのは、いかにも秀
調らしい名案で、『時間の都合で出幕にならなかつた』は、下け
ミしても上乘の出来である。次の曰くが又なかくくに面白い。
……先代は、おさんのサワリの『泣かしやんせ〜』、その涙
が蜷川へ流れて小春が汲んで呑みやらうぞ』は、甚だ猥褻な
文句だから、その通りには演れない云つて、紙を出して火
鉢を拭いてゐました……

蜷川の文字の解釋、その蜷川に流れる涙、それを汲んで呑む
小春、この三段文章を卑猥な意味に解釋したのは、我等の思ひ
及ばない天外の奇想である。それを表現する動作として、紙で

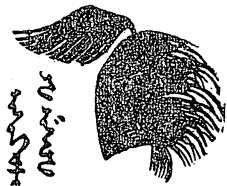
火鉢を拭ふなどは甚だ洒落たものである。おさん演出の一文獻
として、こゝに記録に止めて置く。

〔三〕 原作『天網島』

河庄の治兵衛と、紙屋内の治兵衛とは、性格が違つて居るや
うで、この二場を續けて演るのは氣が咎めて演りにくい……こ
は、よく我々の耳にする治兵衛役者の練言である。鷹治郎もそ
んな事を言つてゐたし、記録によるに、宗十郎も五代目菊五郎
も同じこゝを言つてゐる。この俳優たちの藝格からは、そんな
風に考へるのは當然のこゝであるし、また、半二の改作『心中
紙屋治兵衛』の描寫では、この批難が出るのも無理からぬこゝ
である。然かし原作の『天網島』では、河庄の治兵衛も、内の
治兵衛も、一貫した性格に描き活かされてゐるから、今回演じ
る原作の治兵衛には、こんな心配は御無用であらう。

原作では、治兵衛・小春、孫右衛門など、更に甲乙なく平等
に比例正しく描かれてゐる。治兵衛だけが特別光つて描かれて
ある譯ではない。心持の複雑さでは寧ろ小春が大難役であり、
一等演り榮えのある大役でもある。孫右衛門は、ある時代には
此の役で川庄を出した程のものであつた。私が嘗て九州の田舎
芝居で見た市川猿左衛門の演出が、それを證明してくれた。

原作『天網島』上演に就ての本格談云つた硬い事は、又の
事として、茲には取敢へず原稿督促の電報に嚇されて、『心の
早瀬蜷川、筆をはかりに三重走り書き……幕。



『紙治』のまゝ

山本修 二

馬治郎の『紙治』が出るに聞いて、ひさく嬉しい感じがする
こいふのも、これには私だけに興味のある因縁話が絡まつてゐ
るからで、忘れもしない先帝陛下御即位の秋、私は法科の一學
生として、埃つほい民法や國際公法に勞れた頭を、京大圖書館
の丸本―諸君御承知ですか、あんなに澤山、丸本のある處はあ
りません―を讀むことによつて慰めてゐた。譯もなしに、時々
私に襲ひかかる捨鉢氣分から、本職の方は抛つて、唯もう無暗
に丸本の―それも餘り上演されない物ばかり讀み耽つた。こり
わけ『紙治』關係の方は、お恥しくない程度に纏め上げたと思
つてゐる。烏兔匆々、今年丁度新帝陛下の御大典が行はせら
れるこいふのに、私はいつの間にもやら藝が身を助けた悲しさ、
銀行の重役にもならないで、芝居で飯を―いや辨當を―食つて
ゐる。『紙治』こそは、私を邪道に引入れた憎らしいが、懐かし
い芝居である。一言なかるべからざる所以である。
―こいつて人前に出せる表藝ではない。知つてゐることは、皆
様御承知のことばかり、が、勘平の臺詞の通り、一通り聞いて

たべ。『紙治』の實説に就いては、され程の事が傳はつてゐるか
明らかでない。何でも大長寺の寺記には、享保七年十月十四日
の出來事だに記されてゐる由だが、『外題年鑑』―これも餘り信
用はならぬ―には、享保五年十二月六日に『天網島』上演に記
されてゐる。もつこ動きの付かぬところは『歌舞伎年代記』の
享保六年の條に、この劇を二代目團十郎が上演した由、記載さ
れてあることだ。よつて大長寺の寺記は、誤謬なり決定され
たが、同寺發行の「今宵有難き御教に預り……」云々の小春治
兵衛自筆の書置きは―これも出鱈目だが―のべ紙二枚に書かれ
てゐるので、後世紙治の芝居を「心中のべの書置」さいふ藝題
で叫ぶことの原因になつた。

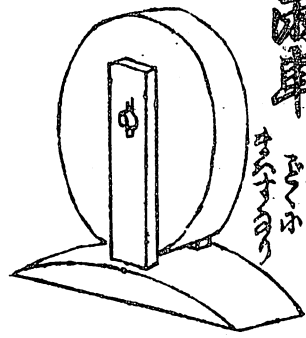
同じ出鱈目でも、四壁庵茂篤の『忘れ残り』は、紙治の實説
は「誠は江戸のこさなり」なき大見得を切つてゐるだけ愛嬌だ
しかし、この瓢箪からも、やはり胸が出た見えて、文政十一
年には、江戸の芝居に『愛佃天網島』さいふ藝題が見えるし、
越えて文化十二年十一月には『歳市膽安賣』さいふ芝居が出

紀ノ國屋小春、女房おさん、みすがら太兵衛はい、ミして、遠山甚四郎、成田屋七左衛門なごの見慣れない役割があり、主人公は實に、菊五郎の鶯者紙ごま治兵衛ミ言つて、すつかり意氣な哥兒さんになりすましてゐる。序でながら、小春治兵衛の墓所は、勿論大長寺にあつたのが、明治三十一年頃藤田邸に編入されたミか聞く。これがもし今問題になつてゐる藤田家から大坂市へ返還される地所の中にあるのなら、小春治兵衛の墓を、眞先に元の墓地へ立ててほしい。が、もしも私の記憶誤りなら御免なさい。

今度は勿論、原作で上演されるのだらうが、例の大和屋から網島への道行きは、いつ見ても「詩」のやうに美しい。しかし原作を上演したのは、たしか大正五六年頃の文樂が濫觴だつたと思ふ。あの時もやはり大和屋が好評で、それから大長寺へ行くまでの大懸りの引道具なき、今でもマザツくミ目に残つてゐる。あれから見るミ、末世の『時雨の炬燵』なき、煩はしく人情がからんで、到底吾等の共感を呼ばない。所で、この『時雨の炬燵』だが、淺學の私はその作者を知らないのである。唯一「福徳に……」に始まるを綱太夫場ミ稱し、「門送り……」に始まるを宮戸太夫場ミ稱する、そこに何等かの手掛りがありミすれば、ありミする許りである。それから、私はあの芝居を見る毎に、いつも豊竹座末期の淨瑠璃『三勝半七』を思ひ出す。同じやうな暗い舞臺面、貞女で尼になるおさんミお園、義理固い父の五左衛門ミ宗岸、お末の書置ミお通の書置、太兵衛ミ善右衛

門の贗金使ひ、家の中を伺ふ小春ミ三勝半七、等々。プロットの相似は、歌舞伎の通有ミいひながら、これは餘り似すぎてゐるので、同じ作者、少くも同時代のものでないかと思ふ。『天網島』が『炬燵』の墮落した形式に陥るまでの、徑路を辿るこゝは、面白い仕事であるが、何分にも紙面かない一おやおや、残り一枚半だ。だから、圓タクでミばして行くミ、『紙治』改作の始まりは、寶曆五年、並木永助、豊竹上野の『双扇長柄松』だらう。但しこれは『淨瑠璃譜』に「此淨瑠璃不入にて、一座塚へ引き越す」ミある位で、元より感心した代物でない。題名は、心中の二人が二人の扇に辭世の歌を書き遺すこゝに起つてゐる。越えて明和六年七月には、三好松洛ミ竹本嘉藏の『中元噂掛綱』が上演された。小春ミ女房お大の義理の達引型の如くだが、この改作で始めて、治兵衛が太兵衛を斬殺すこゝになつてゐる。それから變つてゐるのは道行が夢の中で行はれるこゝで『道行夢路千日參』ミいひ、心中は土藏の中で行はれる。題名の「掛綱一は、昔正月に、綱を二尾、門口に吊したこゝに始まるので、兩人の首くり心中の妾になぞらへたものだらう。次は御承知の安永七年、半二の改作『心中紙屋治兵衛』この作に始めて、「紙屋場」の傳界坊（門左原作のてんがう坊主のもぢり）が現はれるが、これは寧ろ歌舞伎からの逆輸入で、爲十郎は夙く安永三年に、このちよんがれ坊主に扮してゐる。そのちよんがれにも云ふ通り、何分「貧乏紙屋」にて、紙面が盡きたから、これで失禮。

演劇
いんげつ



永遠の魅力

平井常次郎

いま煮うり屋で小春が沙汰——

未だに私の耳を去らぬ臺詞である。あれからマル六年たつた今日、さうしても忘れられぬ一句、深刻で印象的なものだつた演劇に専門眼のない癖に、小ましやくれたこゝをいふやうだが、鴈治郎の演出全般について多くの疑問をいだく私ではあるが、この『煮うり屋で……』のいくだりに花道七三に描き出された一瞬の水々しさ、若さ、柔らかなさの恍惚境にはスツカリ打たれてしまつたものだ。それは永遠の魅力であらう、なご、考へたこゝである。

◇

その秋の近松二百年祭は全くわが國には空前の華々しい文藝

祭であつた。祭典だの、展覧會だの、研究會、演說會、記念劇、それ合評會だ、やれ民衆への演劇開放だ、まつた文樂の記念上演から凡ゆる出版物に至るまで近松、近松の聲は巻にみちて到るころに大近松禮讚の叫びが擧げられた。それから六年も経過したんだから匆忙の身にこの盛り澤山の各シーンを一々ハッキリは記憶に残すすべもない。だが、さうしたうちで、この『煮うり屋で……』だけは強く刻みつけられて今日なほアリアリミ思ひ出せる。鋭い印象といふものは久遠の生命をもつ。それと同時に私は思ふ。鴈治郎が六十年の久しい努力を決済して最後に残るものは矢張り由良之助三紙治ではなからうか。

◇

この百花みだれ咲いた記念祭のうちの白眉もいふべき中座霜月興行の思出を断片的に呼び起してみろ——

故渡邊霞亭翁は大の／＼鷹治郎黨だつた。翁が評してこの記念劇の吃又の引込み、河庄の出は日本の國寶だといつてゐた。私はこの春、天平文化回顧宣揚運動で随分多くの國寶を拜観した。一代の藝匠が残した彫刻を見、繪畫に接してその人に迫る力の偉大なるに或は驚き或は酔つたものだが、霞亭翁の言葉「國寶」をその度ごみに思ひ起したのだつた。

僅か六年ではあるが、その間に大阪劇壇は多くの名優を失つた。當時すでに身體にひびは入つてゐたが多見藏は流い藝風を見せてゐた。

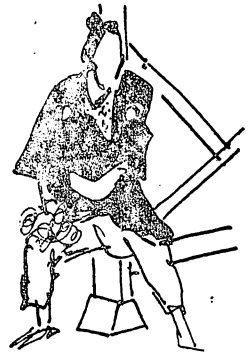
麗はしい人形美の雀右衛門もゐた。その小春は素晴らしいものだつた。よく樂屋で『私にもさより主はなほ一分たゝず、いつそ死んでくれぬか、え、死にましょ、ミ引くに引かれぬ義理づめに』といふ河庄の格子先で孫右衛門にいふ臺詞が好きで好きでたまらぬ、ひこりで泣けてきます毎日毎日いつてゐた惜しいこゝである。

卯三郎も健在だつた。五左衛門で示した枯淡な味は、もう見

られない。大衆には最も親しみの深い彼のゐないのは寂しい。今昔の感にたえぬのは誰れよりも彼れよりも成駒家自身であらう。

鷹治郎は最初、孫右衛門を中車に持つて行きたかつたらしいけれども結果は市藏の孫右衛門がこても光つてその手堅い演出が河庄の切ないシーンにぎれだけ舞臺効果を添えたか知れなかつた。東京から来た二、三の劇評家は孫右衛門が一ばんの收穫だといつて歸つたほざだつた。

ミに角騒がれた、賑やかなこゝであつた。そして今度六年ぶりに鷹治郎の紙治がでる。凝り性の成駒家のこゝだから、またいろ／＼に新しい工夫を附け加へるこゝだらう。しかし巷間いづも悪評を購ふだけに終り勝ちな寫實だふれや、つまらない形式上の小細工に囚はれたりして折かくの舞臺を臺なしにしないこゝである。



近松二百年祭の思ひ出

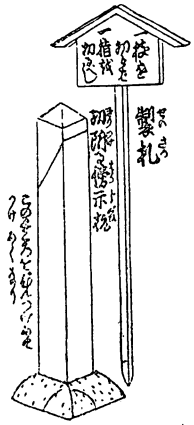
内 海 幽 水

大正十一年の秋に舉行された近松二百年祭は、我國に於ける文人追憶その業績禮讚事業の最も大なるものであつた。諸外國ではかういふことは、多く國家の事業としてやる、伊太利のダンテ祭、ロシアのトルストイ祭等比々皆然りであるが、不幸我國では文學者や藝術關係者は外國でのやうに尊重されない。尤も政府のお聲が、りであらうと、一新聞社、一學會の催しであらうと、その目的さへ達成されたらそれでよいことであるから、大正十一年の近松祭の我文化史上にのこした業績に何等遜色を認めることは出来ない。

あの時の事業は華々しかつた。近松といふ大きなドラマチストが二百年前に大阪で、すばらしい仕事をしてゐた、といふことを一般の俗衆に理解せしめたことが第一の效果であることこそ誰かが否定しえないであらう。第二にはあの記念祭を機縁として立派な註解を附した近松の淨りりの全集が出来上つた。その

中にはこれまで發見されなかつた數曲の珍しい院本が収録されてゐる。第三は今度再び上演される「心中天網島」の原作通りの上演であつた。あの時の緊張した中村鴈治郎氏一座の俳優諸君の演出振り、そのために努力した松竹側の芝居關係者の火の出るやうな熱心さ、それは今想出してても實に愉快で、眞に血が湧き肉が躍るのである。あの時の人々の熱狂した氣分、努力は藝術の貴さ重々しさ、華やかさを以てしなければ、到底あゝした高尚な清純な氣分氣持を有されえないことを、私はしみく、痛感した。一にも藝術、二にも藝術のもつ氣品である、匂ひである。芝居は——すべての藝術は、いつもあゝした一般民衆の理解、當事者の熱心と尊敬を以つて創造し、表現し、公表されねばならない。

近松二百年祭の思ひ出として以上のことを書いておきます。



其常盤千歳壽に就いて

食 満 南 北

『これは、松竹の主でござる、くる月はめで度い月ぢやによつて、何ぞめでたい所作はないか、まづ太郎冠者を呼出して向ふて見やう、冠者あるか。』

『お前に』

『居たか』

『ナカ〜』

『扱くる月はめでたい月ぢやによつて何ぞ、所作を一つさがさしめい』

『心得である、扱も大事の事を仰せつかつた、頼うだお人は中々物事をよう識つてぢやによつて、たゞ事では濟ひまい、まづ狂言記をよもう、オツあるわ〜、松ばやしはめでたい、扱正月の事ではあれぞ、それを借る事にせう、頼うだお方ござりました〜』

『あつたか〜』

『ござりました〜』

『何〜あつた』

『松ばやしでござる』

『それは正月の催物ではないか』

『扱、それをかやう〜にいたしまする』

『物を』

『ナカ〜』

『それで何にする』

『長唄に常盤津をかけあわせませす』

『よいか』

『ナカ〜』

『面白〜、したがぬすみものではないか』

『イヤ創作でござる』

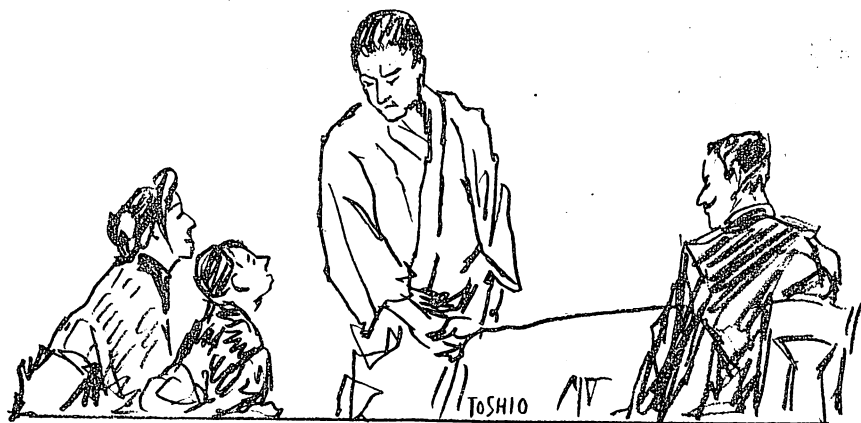
『狂言記にあつた筈ぢや』

『御存知でござるか』

『あのこ、な横着者のめ、やるまいぞ〜』

『おやりになりませぬか』

『イヤやる』



鳥江鏡也氏脚色

角座霜月興行新聲劇上演

芝居貝たま。

明治 奇聞 伊丹屋金次

村田和緒

— 自己の環境によつて支配された生活は、白紙一枚の境界に、己れの品性をして、善ことも悪きもなし得るものである。しかして、先天的に恵まれた人間の品性は善である。—

下谷阪本の或る横丁に、眞晝間を恐れ氣もなく、緋房の十手を振り翳して、一人の兜漢を取り巻き大亂闘の眞似事が開始されてゐた。

近所の腕白連が遊ぶ泥棒ごつこである。「御用」「御用」の聲は小さな唇から連發され竹光を振り翳す泥棒こそ、金次の長男眞一郎である。

彼等子供達の遊戯が、將に酣にならうとした時、金次の養女お俊は、金次の生活を知ることが故に、血相變へて連れ戻つた。泣き叫ぶ眞一郎を無理矢理に……

「馬鹿野郎ツ何んてつまらねえ遊びをしやがるんだ。手前は、それ程泥棒になりてえのか」

ボカリツ、金次の拳は眞一郎の頭に飛ぶ。二つ三つ四つ泣き叫ぶ眞一郎の襟首を取つ

て押へ、止めるお俊を押し返して續け様に殴りつけた。彼は、殴りつけ乍ら震へる自分の拳を眺めては、思はず涙を呑むのであつた。そして、器用に生れついた自分の指先を今更のやうに怨めしく思ふのであつた。

顧みれば十六年前、二十六の年迄は、一人前の仕立職人として働いてゐた自分が、フトした機會から、當時お針を習ひに来てゐたおくに戀仲になり、妻のお霜を離別して、おくに同棲するに至つた。

おくには、當時拘摸の大親分清水の熊の一人娘だつた。

「お前と一緒になつたばかりに、ミウ、俺は、清水の熊親分のおぎを享け、こんな稼人の仲間に入つてしまつた。幸か、不幸か、針一本の世渡りから、今では其の針の山を踏むよりも危ねえ此の世の渡世……」

彼は時々恚うして自分の果敢ない生活を述べたのであつた。其の頃お霜は二度目の亭主に死に別れ、身の振り方を金次に頼まんとし東京に來た。が、不幸にして、汽車中で、所持品一切を揃り取られ、困惑の身を上野驛前に仆んでゐる時、以前金次の身内であつた湯島の吉に助けられた。吉は、其縁によつて、今は破門になつてゐる金次との間柄を、以前に返さうと考へてゐたのであつた。

泉質店 金次の住居である。

或る日——金次の客分、殿様銀次の手から廻つて來た巾着が

あつた。因果は廻る小車の、その巾着こそ、桃割れ姿のおくにが縫物の針の運びがもつれ合ふやうに、師匠である金次と結び合ひ、忘れやうごても忘れられぬ初戀の頃、堅氣の職人から道樂仲間に入つた時の紀念の品、別れた女房のお霜と對で拵へ、其の後の金次の生涯に、種々の深い思ひ出さなる巾着だつた。その巾着が如何した廻り合せか今自分の手許にある。こするこ若しやお霜が此の東京に……と思ふと金次の胸は懐しさに燃えた。

又一方には、丈と積る戀心を、稼人仕事と共に犠牲にして、失戀の悲しみを一管の笛にこめ、村から町へミ流れ歩く華族の新助が、金次の爲めに盡す任侠は、おくにを戀してゐた昔の誼みに紳士的な助力であつた。

お霜は六區の銘酒屋瓢亭に酌婦として住み込んでゐた。無産者特有の生一本の性格に、奈良丸と雲右衛門の巧劣を論じてあつてゐる情景も、恚うした場面にふさはしい。

——お霜ッ。

——金次さん。

へからしが利いたか目に涙

近所で語る浪花節、神崎與五郎東下りの一節が、ピッタリはまつて二人の眼には露の雫が光つた。

——フトした事からお前が東京に來てゐる事を知り、俺は此の間から人知れず行方を探してゐた所だ。

——伊丹屋の金次親分、好い職人におなりだね……。

お霜は何もかも知つてゐた。別れたきは云ひ乍ら、義理に迫つての話し合ひ、逢へば懐しい夫である。それを無理に押し包んで、女だてらのあられもない強意見、お霜の心に暗かつた。心の中では泣き叫んでゐた。それを聞く金次は、自分の育てた蔓が、斯くも惨に這ひ廻り、先の女房を倫落の淵に落し込み、今又大恩人の持ち物を掠め、その人を生死の境に陥入れた事に、針を吞まされる苦痛を味つた。

周圍から押し立てられ祭り上げられるまゝに親分になつて、華やかに暮してはゐるものの、自分の影にも氣を配り、世を狭く臆病に歩む儻さが泌々淋漓しく思はずには居られなかつた。環境に埋つて只一人悶搔いてゐる自分の弱さが悲しかつた。

恚うした中にお俊と子分の仙公とは、甘い戀の囁きに酔ひ乍ら、矢張り自分の仕事に、世に入れられないのを知つて、金次と同様の苦しみを、戀の炎と共に惱んでゐた。

其の仙公に跡目を譲つて、金次が愈々引退るに云ふ話は、金次の四天王に云はれてゐる人達の耳にも入つた。彼等は、無論素直に承知しやう筈もない。殊に、新に親分と立てる仙公が、如何に親分の信用を得てゐるにもせよ、自分等の後輩である故に、不平の聲はおくにも響いてゐた。それに、今日此頃では六區から行方不明になつたお霜を血眼で探してゐる金次の態度に、女氣の少からぬ淋しさを持つてゐた。眞人間に歸りたい。

素人になりたい云ふ言葉の裏には、拘掟の大親分の娘である自分と一緒にゐた爲め、自分を怨み、自分を憎んでゐるのにはあるまいか、廻り氣に心を傷めては憂へてゐた。

こんな時に限つて眞一郎の小さな悪戯が、大きく當るは女の常。

——僕、あのお母さんの子ぢやないのかい。

——えつ、そ、そんな事があるもんかね。

——でも確に云つてゐたよ。私の子ぢやないから云ふ事を聞かないんだつて……僕、僕、一體誰の子なんだらう。

眞一郎の胸にも波紋を投込む。

——さうせこんな事をしてゐるのは天下の法度、何日かは逃られぬ天の網に俺の年貢の納め時が来るは必定だ。一旦は身の置き所なく恚うして伊丹屋の親分に頼つて見たものゝ、もう二度とあんな暗い所へは行きたくない。それを思へば今の身が空怖ろしい。……お前と恚うして人目を忍ぶ仲になつてからは、一日でも早くきれいな身體になつて大手を振つて歩きたい。親分は俺を跡目にしやうと云ひなされるが、これからの俺は暗い生涯を送りたくない。

それは仙公がお俊と語り合ふ度に洩らされる切なる言葉であつた。

——子供の頃から大きくして貰つたおばあさんには申譯ないが、仙ちゃんなら何處へでも逃けて行きます。そして二人

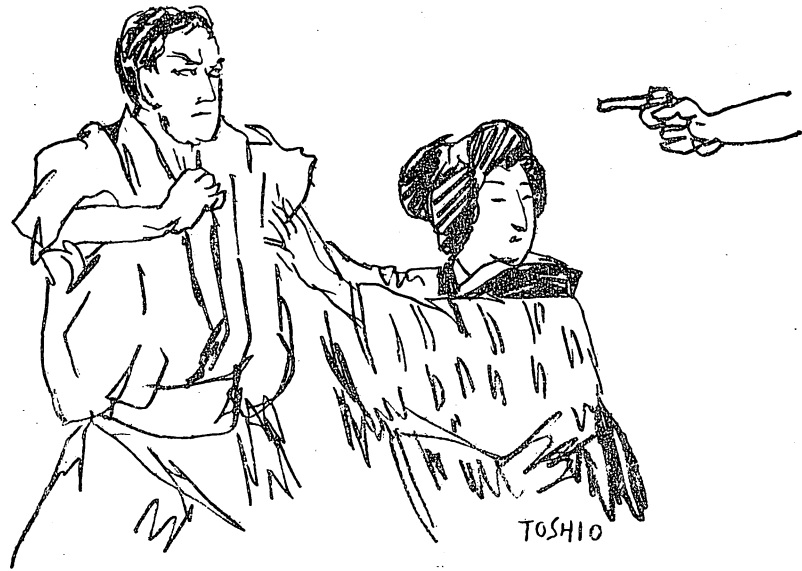
は仰よく、眞面目に働きました。木枯しの吹く宵暗の木影に、二人は何時までも相擁して語り合ふ。

華族の新助は、金次がお繩を頂いて堅気になるに聞き、親分清水の熊の意志にも反するものに憤った。併し、善に目覺めた金次の心を翻す事は出来なかつた。相反するもの二人の間には濁流が渦巻いた。

手前は、この上まだ俺を深い奈落へ落さうとするのか。伊丹屋金次運盡きてお繩になるのも定業だ。

馬鹿、何が定業だ、それなら金次一家揃つて器用自首をし、その方が、されだけ器用だか判りやしねえ。

が、金次の胸はお霜に逢つてから自首したかつた。瓢亭で逢つて以來、行方を昏ましてお霜の身が気が、りだつた。生涯を通じて、全く眞剣な氣持ちでお霜を案じ煩つてゐた。子までなした間柄を直接手を



下さすも、彼女の持ち物、記念すべき巾着諸共取り取つて倫落の淵に沈めた因果の報が恐ろしくも悲しかつた。

秘密裡に行はれてゐる警察の活動は金次の身邊附近にまで迫つてゐる事を彼はよく知つてゐた。それだけ彼の焦躁は苛立つた。湯島の吉が擧げられ、其他重なる乾分が相次いで擧げられて行く様子に、今にも彼等の社會に大暴風雨の來るのを豫測した。

そゞろ降るみぞれの音をも氣にしなから金次と熊とは深く語り合つてゐた。

熊、俺は今まで黙つてゐてやつたが、俺を淺草の瓢亭へ誘き出したも、たゞ俺への忠義立てで先の女房お霜に逢はせる爲めばかりぢやなかつたらう。そればかりぢやねえ、大恩ある井阪の若旦那三知りつ、大金を奪つた事もあ

るだらう。

——親分！わつしが悪うござんした。あつしの働きが鈍く、嗚鳴られ通してゐるのが辛く、親分への意地づくから逆怨みして居りやした。さうぞ許しておくんなせい。

——いや、お前のやつてゐた事は、俺のしてゐる仕事を判然と良心云ふもので判断する目を開けてくれたやうなものだつた。お前は仕事師ぢやねえ。その働の鈍い指先が、お前の生涯を益々危険にするのだ。熊、その指は俺が預る。そして手前の生涯を明るくしてやらう。

金次は突差に熊の中指さ人差指の先を切り落した。流れ出る血の一滴々々に、悪黨の血が去つて行くやうな気がした。指先の業さへ無ければ、恚んな暗い生活をせずとも好い喜んだ。既に改心した金次の胸にも、恚うして眞人間の出来上る事が、何物よりも嬉しかつた。

突如夜嵐が吹いて、金次、おくにを始め大勢は捕はれた。疾風迅雷的に起つた檢舉の手は全國的に渡つて、金次身内の殆んでは警察に擧げられた。

封建時代の博徒のやうに生一本な氣持ちから、大勢結束した犠牲の身代りて、金次を救はんとして仙公に迫つたけれ共、愛慾に燃えてゐる仙公はお俊を犠牲にする事の出来ない苦痛と金次への義理から、遂に二人は相見ざる遠い旅路に連れだつた。浮草に包まれた辨慶橋下の水は永遠に二人を抱いた。

赤阪署内の一室である。

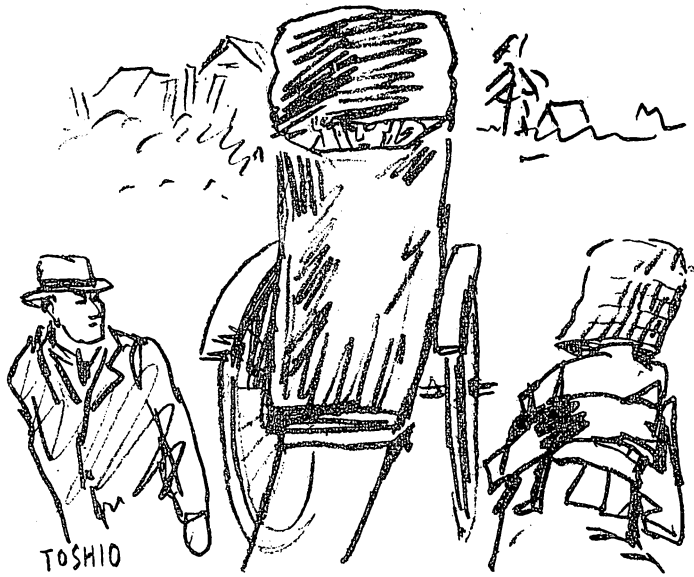
署長の情で國定忠次の圓藏格、金次の客分禿虎との對面が許された。二人の思ひ迫つた眼は一つ所に凝結して動かなくなつた。何を話さう、何も話す事はない。有り過ぎて話得ない。只、十年の餘親身に世話をしてくれた禮心のみが金次の胸に湧いた。仙公が愛慾と義理に挟まれて自殺したことも知らぬ禿虎は仙公の不實を憤つた。が、それもこれも今は愚痴、若しも達者で此の陽が拜せるならば、その時こそ世の中の爲めに働かうと思つた。

ミ、思ひがけなく尋ねて来たお霜と眞一郎に逢はせられた。

——おつ、お前さん……恚うなるまでに何故眞人間になつてくれなかつた。何故自首してくれなかつたのです。

——お霜、俺は、お前が東京へ出て呉れたばかりに、俺の心はあの時から昔の金次、仕立職人の金次に歸つてゐた。が、俺は最う一目お前に逢ひたかつた。逢つてから自首する覺悟で殆んざ血眼になつて探してゐた。——眞一郎、これがお前の本當のお母さんだ。お霜、見て呉れ、お前の眞一郎は、恚んなに大きくなつた。

——あ、眞一郎、逢ひたかつた、十年此方一日として忘れた事はない。一年々々年を數へてはお前の大きくなつて行く姿を思ひ浮べてゐたが、よくまあこんなに大きくなつて……室内は涙で空氣も濕つた。梅樞の涙、再會の涙、悲しみの涙に嬉し涙、同情の涙、惜別の涙……涙、並居る人々の眼は涙



にうるんで室内の總てが茫々に見えた。

——お霜、お前が東京へ出て来てくれたばかりに、俺の心はあの時から昔の金次に歸つてゐた。淺草で別れて以來、もう一度逢つてから、俺は深く身を退かうと思つてゐたんだ。だが、もう俺ア思ひ残すこゝア何にもねえ、旦那、早く局へやつておくんねせエ、今日位い晴れくした氣持はありやしねえ。何だか俺の明るい生涯が見え出したやうだ。

金次ははれくしい顔をあけた。

その様子を見て見ぬふりをしてゐた本堂署長はすらくこ何か書いた。松本刑事は何を書いたのか覗いた。

——ごうだい、梅實落つる首や晝寝の枕元、即興の句だよ。

アハ、ハ、ハ。

高く豪傑そうに笑つた。金次は愁然とお霜と眞一郎の顔をながめた。おくにはほろり涙を落した。

配 役

伊丹屋金次……………中田正造
 仙公・赤阪署長……………辻野良一
 華族の新助……………伊川八郎
 金次の先妻お霜……………富士野蔦枝
 同妾おくに……………和歌浦杀子
 養女お俊……………金剛麗子

銀が金になつた珍談

鳥江 鏡也

×

丁度、その頃私の顔の左頰にちよつほりミ柄にもないニキビのやうなでき物が吹き出してゐた。パンを走らせてゐる間に吾れ知らずそのでき物に爪をかけたミ見えて、それからそのでき物が更にひろがつてたゞれ出した。大變！ミ氣ついて心易いある醫師に診てもらふミ、それは爪の間からばいきんが入つたんださうで、治療をしてもらひ、つひに白いぼうたいがけのいさましい格好ミなつた。——私が新聲劇のために、一つ劍を持たせない芝居で、何か非常に毛色の變つた物をさいつ條件の下にサンデー毎日所載の本田一郎氏執筆にかゝる「仕立屋銀次懺悔録」を書上げた時がその時だ：原作ではあの拘摸の大親分だつた仕立屋の事は勿論、明治初年から末年にかけての拘摸壇の大勢を實にうがつて書いてあつた。しかし、銀次今は懺悔の生活に新しく更生して東京郊外の一角に悠々自適してゐるさか。彼の語り出す所、彼の半生の罪惡史につきてゐる。しかし、筆者がまへがきにもある通り、それは善根を傾けてのざんげであることは私も認め、少くもそのざんげを讀んで勸善懲惡のちこ月並な傾向に過ぎてゐた様にも思ふ。だからこれを脚本にしてもあながち「惡の讚美」のみでなく立派な勸善懲惡劇として取扱へると思つたから——本來脚本はそんなこゝでは面白く

中座

關西大歌舞伎大一座

十一月一日初日午後三時開卷

一番目 大願 成就 殿下茶屋聚 三幕

近松門左衛門翁原作

近松原作上演研究會脚色

竹内栖鳳畫伯舞臺意匠

二番目 心中天網島 三幕

鶴屋南北新作

小田富彌畫伯舞臺考案

大喜利 其常盤千歲壽

若柳吉藏振附

常磐津連中

長唄連中

松竹座管絃團伴奏

總配役

東間三郎右衛門、紙屋治兵衛、林玉太郎（中村鷹治郎）早瀬伊織、女房おさん、笹木伊之助（中村福助）早瀬源次郎、三郎、林長三郎（林長三郎）河内屋女房、主人、北上彌之助（嵐吉三郎）一郎、笹木徳太郎（中村政治郎）女中おたま、淺野泰弘（中村成笑）やれもきの次郎植村太三郎（中村成三郎）茶亭九兵衛、友達、高野駒藏（實川鷹藏）仲居お清、長野福太郎（中村雀）忍びの男、松の精（中村鷹）女中お杉、松の精（中村鷹之助）姫、木村秀子（實川延太

ない、悪は悪、善は善として、それ以上に人間をありのままの姿に描き出してこそ見物の心にも觸れるのだが——物が物だけに、私は、須く善根を傾けて四幕八場の甚だ因果應報を随所に持込んだものにしてしまつた。

さうして脚本を書き上げる迄にもう一つ、これを是非特筆しておかなければならぬ。いこむがある、それは銀次が現在人物でもあり、掏摸の芝居だといふので、一應當局の意見も聞いておく必要があると思つて、私の社の文藝部の方にサンデー毎日を持つて御足勞を願つた。所が、當局の話はかうだつた。「物が物だけに内容を見ないうちは何ともいへない、先に内容を知らせてくれ給へ！」殊に當局の方はそんな好意ある言葉を洩らしてくれたさうだ、それがサンデー毎日を示して「これですが」さ相談した物に對する返事である。その時は内容如何で許可するといふ話に取れるではないかそれがいよく、脚本が出来て提出するに「上演却下する」といふ話だ、では内容を書き直すといふに、いや内容もさうだが題名もいけない當局は云ふ、それでは全然いけないといふことになる。さうだつたら最初「これですが」提出したのに對して特に内容次第といつて題名、即ち仕立屋銀次と書いてはいけないといふことには注意もなかつたのが、さうも不思議だと思はざるを得なかつた。泣く子に地頭、遂にはさうでも勝てなかつたが、いろ／＼當局と接衝してゐるうちに、題名は明治奇聞「伊丹屋金次」で許され、内容の二三面所が訂正された。——私の顔のでき物もあれから大分よくなつた。醫師はそのでき物に對してかう注意してくれた「あまりこんなものは手でさわるに餘計にひろがりますよ、い、加減の所で放つておいたら直ります」だが私の脚本、金次劇を却下されたまゝでは作者は飯を食はずに暮さねばならないことも出来て来る、やつと嘆願九拜して銀が金になつて無事に十一月一日角座に初日をあげた……。

郎) 令息徹夫(林敏夫)安達彌助、紀ノ國屋小春、太郎冠者、桂榮太郎(中村魁車)丁兒保吉 雛鶴(中村章景)四郎、岡村一雄(實川八百藏) 松の精(中村市郎)遊女、松の精(中村福萬壽) 山口丹藏、あごの三、富澤富雄(市川市界)川田曾平、とんとこの頓兵衛、なまいだ坊主、秋田寅太郎(市川右左次)仲間角助、天満巫子の市、今村勝彦(實川延郎)醫者慶庵、すた(の)八、友達、和田芳松(市川舞五郎)東間大藏、河内屋主人、竹内嘉三(市川九團次)奴字平助、身すがら太兵衛、田村榮吉(市川箱登羅)富田屋お吉、伯母、近藤芳子(市川蓮女)坂田庄三郎、鶴幸右衛門、安部楠松(市川市藏)安達元右衛門、粉屋孫右衛門、天星庄右衛門(實川延若)もつさうの傳次、舅五左衛門、大和屋傳兵衛、樋口彌三郎(市川鰻十郎)妹葉末、丁兒三五郎、二郎、吉野乾太郎(中村成太郎)姉染の井、鶴の精(中村扇若)

浪花座

志賀 廻家 淡海劇

十一月一日初日 晝正午二回開演
夜五時半

- 山本 肇作
- 第一 壁 一 重 一幕
- 楠本木念仁作
- 第二 舊喜劇 白髮染 二場

仕立屋銀次の上場に就て

本田 一郎

大毎編纂課長伊藤金次郎氏の好意で、探偵實話『仕立屋銀次懺悔録』が、サンデー毎日に連載され出して、間もない或る日のことでした。

突然、私の家へやつて来た銀次君が、客間の卓上にあつたサンデー毎日に眼をつけ「先生、濟まねえが、こんきのまゝを一つ、読んで聞かせて、おくんせえ」
と言つた。私が、銀次一味御用の巻の一さくだりを読んで聞かせるに、額に皺をい
つばい寄せて

『うめえ、うめえ、まつたくその通りでけしたよ』
彼は、ほんこ膝を叩いれ。

その時、親分、懺悔ついでにこれを、芝居にしてもいいかい」
と、問ふたまゝ、彼曰く「あつしの懺悔が、世間のお役にたつこゝでけしたら、よろしゆうござえます
芝居にでもなんなまゝしておくんせえ」
眼を細くしてニツコリ笑つた。

明治の拘摸壇を風靡した大親分も、けふこの頃は、虫も殺さぬ善人になつて、懺悔
の生活に静かな余生を送つてゐる、獄中でも、すつこ本職の仕立屋を作業にして来た
ので、出獄後の今日も、やつぱり針と糸をもつて糊口をすごしてゐる。

楠本木念仁作

第三 愛 の 力 二 場

楠本木念仁作

第四 お 稻 荷 さ ん 二 場

御 大 典 踊

重なる役割

百姓次郎作、稻葉夫人澄江、吉高(龜鶴)生田
文雄、だんとり(辨慶)婆お杉、ハゲ狸(樂太)
供頭平井主膳、掃除婦お高、大岩(白石)藝妓
締吉、次郎作妻お作(かもめ)津田宏、百姓文
助、小眼刀(伊吹)老父三平、三吉(老松)老父
仁平、貸本屋杉山(樂遊)佐々木實、大黒さん
(松葉)鶯坂伊平(紫雪)妹菊子、藝妓豆丸(春
江)妻たづゑ、下女お辻(友子)妻みさを、看
護婦(伊都子)ウエーター美代子、下女お光(静
子)藝妓鶴代、看護婦琴子、ウエーター文子
看護婦孝子(るり子)老母おいく、玉川常(多
景島)百姓猪之吉、熊吉(源五郎)酒井若狭守
藝妓愛助、源九郎(辨天)老父熊藏、太兵衛(十
太郎)老父太助、藤の森(太郎)百姓甚藏、事
務長秤垣、船長秋葉、熊鷹(淡海)

角 座

跳躍目覺しき

新 聲 劇 一 派 の

お 目 見 得 狂 言

實在の人物の舞臺化——なか／＼むづかしいことである。がしかし、その道で定評ある松竹の鳥江鏡也氏が、巧みに脚色して、新進腕達者の中田正造、伊川八郎、辻野良一、和歌浦糸子諸優を網羅した新聲劇團の人々によつて、華々しく上演されることは作者の私も本懐。劇にされた銀次君も、さだめし罪ほろほしの一端として、満足に思ふことであらう。

『道頓堀の角座ですか、大阪には、あつしの乾兒で今は堅氣になつてゐる奴等も大勢のますから、親分が芝分になつたミ聞けやあ、みんな出かけて行きますぜ、ハッハッ』銀次君は、さう言つて笑つた。

私も都合がついたら、銀次君を連れて、是非、角座見物に出掛たいと思つてゐる。ミ同時に、この芝居は、東京へ持つて来て、淺草で上演したら、きつミ、人氣が湧くだらうとも考へる。

◆ 全國に散在した、銀次の乾兒のうちには、明治四十二年の大檢舉を一轉機として、堅氣の商人になつたものも随分ある。名を擧げることは遠慮するが、神戸で大きな蕎麥屋を営んでゐる男に昔の『伯爵銀次』があり、東京でも上野池ノ端附近で、料理屋を営み巨萬の富を積み、昔を忘れてゐるものもある。

明治時代の拘捕は、悪いことでしたが一面、多分に俠氣を持ち合せてゐた。強盜、空巢、窃盜なごよりは、悪人としての見識を備へてゐたものだ。従つて、銀次君等も随分、札付の悪黨ではあつたが、捨て難い人情味もあつた。

それ故、彼は警察の『眼』ミなつて、賭博、詐欺、窃盜等の犯人檢舉には、警察のために腕を貸したものだ。

瀬川春郎新補
第一 御大典 高山彦九郎 三場
木村泰山琵琶演奏

第二 明治 伊丹屋金次 八場
奇聞 鳥江鏡也新脚色

十一月一日初日 正午 晝夜二回開演

重なる役割

金次の乾分仙公事小幡嘉市、赤阪署々々本堂平四郎(辻野良一)親分湯島の吉事伊東芳太郎田中刑事(新田吉里)刑事松本三郎、井阪の倅萬太郎(小波若朗)湯島の乾分やぶ梅、金次の乾分磯公(一條新三郎)金次の倅眞一郎(沼田義弘)彦九郎の伯父劍持長藏、金次の乾分大清、警部木多留吉(鈴木默堂)親分伊丹屋金次事富田銀次(中田正造)銀次の客分禿虎事月形虎吉(名越仙左衛門)湯島の乾分ちび庄、金次の乾分のんべ安(武澤恒雄)長藏の親戚政八郎金次の乾分お化の新公(山本之彦)たぐれの菊事吉村菊次郎、股襟銀次(芝田新)金次の乾分熊公事吉田熊太郎(藤本正雄)高山彦九郎正之華族の新助(伊川八郎)金次の妾おくに(和歌浦糸子)大原女おてふ、みやこ女主人お松若柳葛子)町の娘お鶴(濱地良子)大原女おいと女中お貞富士岡園枝)おしんの養女お俊(金剛麗子)祖母りんの孫娘お良、女給お光(高嶺百合子)長藏の妻しん、酌婦お雪(吉野静江)彦九郎の祖母りん、泉の母おしん(中村仲次)金次の先妻お霜(富士野葛枝)

清水の熊、巾着屋の豊等によつて開拓された明治の拘摸は、仕立屋銀次の出現によつて、日本犯罪史上空前絶後と稱すべき拘摸の跳梁跋扈を見るに至つたもので、銀次の名は、明治の犯罪史を語るものに忘れられぬものである。

しかし、その銀次が、自ら手を下して拘摸をやつたこゝがなかつたといふこゝは、彼が今日まで、誰の前でも『仕立屋銀次でござえます』と名乗つて出て、敢て臆するこゝろなき誇りである。

◇

サンデー毎日に掲載されなかつたこゝで、銀次が乾分をひき連れ、白刃を閃かして新宿組へ斬り込んだといふ、活劇の一端だりを、最近、銀次君から聞かされた。その時、銀次君はもう一つ自慢話をして歸つた――

『あつしが電車に乗つてますさね、前の釣革にぶら下つた若い女の隣に、洋服の上衣を脱いで、左腕に掛けた男が並んでゐましたよ、洋服を腕にかけるのは、スリ仲間で屏風と言つて、他の乗客の眼にふれぬやうにする手の一つですよ、あつしやあ『やつてるな』と思つて、野郎の顔をひよいと覗き込むと、こいつあ驚いた、昔のあつしの乾分でけしたよ。』

『野郎、まだ足を洗はねえのか、いい加減で野氣になれ』
つて言つてやりましたらね

『親分、面目ねえ』

つて言つて、駒込動坂で電車を降りてコン／＼と逃げて行きました。

二、三日たつて、その野郎から小使にしておくんな、といつて廿圓送つて來ましたつ。 (おはす)

辨天座

新潮座二の替り狂言

十一月七月初日 正午 五時半 午晝夜二回開演

夕刊大阪新聞連載

佐倉川 昇 作

瀬川春郎 脚色

第一 結婚金字塔 四幕十六場

栗島狹衣作

第二 維新奇傑後藏象次郎 三幕八場

總配役

後藤象次郎(山口)三浦英次、中村半四郎(野澤)尾起原東助、大山彦太夫(高橋)山田幸一那波金吾(吉田)大學生音羽、大月國雄(原)大學生小阪、松村乙八郎(松村)社員遠藤、文耕堂久左衛門(真木)憲二の母松子、仲居お守(桃木)社員伊上、村田新八郎(山田)大學生堀内勝田主馬(泉)千野松三、番頭治郎兵衛(松井)關東煮屋、目明し銀兵衛(中山)小野太三郎、三ツ木角左衛門(進藤)石橋憲三、阪本龍馬(波多)北南安吉、深尾鼎(筒井)山内容堂(小川)藝妓相駒(守住)伊藤信子、腰元松浪(富士川)近所の娘尾崎(英二)の母お定、久左衛門の娘若枝(葛城)侍女お秀、女中お力(大東)松岡登喜代、銀兵衛の娘お絞(小松)小野明子、中老横尾(三好)

喜劇製造法

淡海劇 楠本木念仁

愉悅に歡喜に滿ち輝く此の霜月の道頓堀へ又淡海劇がお目通りをする、而も私の書いたものが三つもずらりと並んで上演して下さる事になつた。私は嬉しい、望外の光榮だと思つて居る。それと共に何んだか空怖ろしい氣がせぬでもない。餘りに多作する事は、結局に自分の作品の素質を低下せしむる事になる、だが、書かねば喰へない私には可成りな無理をして一ヶ月に三つも四つもの喜劇を拵へ上げる、これで果していゝものだらうか。私は惱んで、否、喜劇作者の全部が凡て此惱みに苦しめられて居るに違ひない。我國の文筆生活中、喜劇作者程、凡てに恵まれぬものはないであらう。我等はその作品を活字によつて發表する機會を持合せない。機會があつても、トリックで以て作り上げられてる喜劇そのものは成るべく、活字にせないのが演出上に好都合である。従つて我々には印税だの原稿の二重賣りてなほろい事には無關心で居なければならぬ。だから景劇作者は貧乏である。(太郎冠者氏や川村花菱氏、中井櫻溪氏などは例外だが)歌麿、カフエー生活、銀ブラ、市中ちや書けないから何處か靜な温泉へでも行つて書上げやうなんて、せめて一度は夢にでも見たいと思つてる位だ、艶つぽいローマンスなんてとても體驗出來さうにない。舞臺の上のラヴシーンだつて體驗のない事を盲目探りに書いてるだけだ、それで毎月二つも三つも書き上げないご飯が喰へない。年に四つか五つか發表してノホンで納まつて居られる劇作家の

満天 八千代座

若手大歌舞伎

晝の部 (正午開巻)

- 第一 「ひらかな盛衰記」
 - 第二 「松平長七郎」
 - 第三 「放下僧」
 - 第四 「辨天娘女白浪」
- 夜の部 (五時半開巻)
- 第一 「安宅關」
 - 第二 「桂川連理柵」
 - 第三 「奥州安達原」
 - 第四 「はねつき禿」

主なる役割

松平長七郎、娘お浪實は辨天小僧菊之助、富樫左衛門、中納言教氏實は阿部貞、任女房袖萩(我童)娘お筆、遊女松浦、女房おきぬ(霞仙)女房およし、娘清(福太郎)山吹御前、伊與富九郎右衛門、伊勢三郎(卯之助)子息松若丸(義直)平戸清藏、苺頭清吉、八幡太郎義家(橋三郎)利根信俊、明義平(徳三郎)従者右門龜井六郎、太鼓持葛平(右若)親權四郎、妻濱夕、帶屋半齋大吉、船頭松右衛門實は樋口次郎兼光、奉行河野權右衛門、若黨實は南郷力丸、武藏坊辨慶、安部宗任(壽三郎)源判官義經、でつち長吉、信濃屋娘おはん(扇雀)新造浮舟、濱松屋宗之助、禿みどり(ひとし)牧野小次郎(政治郎)畠山重忠、日本駄右衛門、僧信空實は牧野小太郎、帶屋長右衛門(右團次)

先輩から見るに我々は餘りに哀れは思はれませんか。

貴重な紙面を利用して愛痴を滾すなんて以つての外だ。お叱りがありさうだから廢しますが、兎に角、喜劇の製造は六ヶ敷い。僅なヒントを得る爲に我々は身神を消耗して居る。神經衰弱さいらくする氣持ちで、あらゆる書物を漁り、あらゆる世間話に耳を傾ける。我々には休息はない。慰安もない。僅な晩酌を傾けてる間でも考へる。時には夜中にむつき起きてペンを握る事もある。散歩する間にも心は許さない。ヒントは何處に轉つてるか知れないもの、滅多に向ふから打突つては來て呉れない。汚い話だが初日の晩には赤い小便が出る。

これからの芝居は喜劇でなければ駄目だ。云ふお説が大分有力になつて來た。我々は希望に満ちて居る。到底我々の時代には喜劇の黄金時代に廻つては來ないだらうが假令捨石になつても我々は満足である。只望むらくは世間がもつこく喜劇作者を認めてやつて下さる事である。現在の喜劇のやり方では無論將來の天下は取れまい。我々の作品だつて喜劇の軌道を外れ過ぎたものが多いであらう。只現代の喜劇作者は座附の俳優によつて大衆に紹介されるのみで、それ以外に何等世間に訴へる事が出來ない位置にある。面白かつたら、あはれよこ笑つただけで濟さないで、其半面に作者が如何なる苦しい犠牲を拂つてるか云ふ事を思ひやつて欲しい。

まだ現在では涙の多い喜劇が歓迎される、これからの喜劇はもつこ明るいものでなければ駄目であらう。それにはその原動力たる作者にもつこ明るい、豊かな、生活をさせなければ駄目である。もつこく世間様が喜劇作者を認めて下さらねばい、喜劇明るい喜劇は製造されやう筈はない。早く喜劇の黄金時代を創造したい。世の中の幸福の爲に又惠まれざる我々の爲に、我々も努力させよう。皆様方も力を添へて下さい。そしてもつこ我々を認めて下さい。指導して下さい。観覧して下さい。さうで

松竹座

御大典記念

松竹座 奉 祝 行 列 全五景

松竹樂劇部原案
金満南北作詞

松本 四良 作曲

鹽尻 精八

杵屋 正一郎

江川 幸一

花柳 輔廣

大森 正雄

橋本 義彌

舞臺意匠

舞臺照明

場 割

序 曲

第一景、奉祝の夜の大大夜景

第二景、萬國旗を象つたカーテンの前

第三景、巨 人の 巻

第四景、テンゴの早い小品集

第五景、フレナレ

登 場 人 物

一、踊 子 大 勢

一、子 供 達 大 勢

一、通 行 人

一、大 男

一、希 羅 風 の 武 人

一、日 本 の 武 士

一、日 本 の 娘

す、皆さん、喜劇の作者に云ふものは存外、愚痴つほい、じめくした事を云ふものでせう。

失敗の思ひ出

志賀廻家 淡海

曠れの御儀式御大典も愈々取行はせらるゝ、本月になりました。吾々國民として滿腔の熱誠を籠めてお祝を申上げねばならぬ事、此の御盛儀に際して又復本月一日から道頓堀浪花座に我が大阪市民諸君、其の喜びを俱にする事を得たのは私の尤も欣快する所で、尚ほ我が貴重なる道頓堀紙上の一端にこの御挨拶の出来る光榮を深く感銘致します。

淡海は大阪へ來過ぎるさいつかの某新聞紙に御批評のあつた通り事實本年中は殊更ら何う云ふ御縁か餘り屢々の來演で従つてお珍らしくもなからう、従つて飽かれはすまいかこの懸念も亦一通りではない。日進月歩の今日而かも幾多の他の劇團にも喜劇の機運は熟して來て種々新しい試みをせらるゝ様になつた事は吾々至極御同慶に堪へない事で、同時に又夫れ丈け緊禪一番奮勵努力しなければならぬ所である。此のれ位ひにして置かぬ調子付いて佛舌り出す理屈や愚知が伴ふて謹嚴なる奉祝氣分を壞す恐れありつそ飛離れてお目出度いには相違ないが少々意味の違つたお目出度さ即ち間抜けさ加減を告白させよう、事は頗る舊聞に屬する事で甚だ申譯が無いがこれも

序 曲

緞帳上ると、御大典奉祝の旗にて作つたインナーカーテンになる。
莊嚴雄大なる奉祝序曲

第一景

急に陽氣な音楽に變り、インナーカーテンをとばすと、奉祝の夜の大阪の夜景になる『えらいやつちや』の夜を思はせる様に次の各幕に出る踊子その他通行人多勢が町を練り廻つて居る思ひ入れにて引續いて混雑しながら、上手下手より出て來る。

終りに混雑の中に、ジャズバンドの乗つた花車を踊子八人が曳いて出て來る（ボツクスの音楽止む）花車前舞臺に出る。

曳いて居た踊子も前に出る。
ジャズに合せた奉祝の歌を唄ふ。
カーテンが降りる。

第二景

花車が前に出て所定の場所に來て踊子が前舞臺に出た時に、萬國旗を模様にしたカーテンが降りて來る。

ジャズで音楽が続いてゐる。
上手から八人の踊子が出て來る。
ジャズダンスII その途中で、ジャズの花車かくれて音楽は、ボツクスのオーケストラに變る。

先帝陛下の御大典の直ぐ前の出来事で満更縁故のない思出でもあるまい。

それは先帝陛下の御大典の年であつた我が一座が北海道巡業中小樽の住吉座の興行も打上げに近い或る日樂屋へ部家見舞としての贈物續いて閉場してから御飯でも喰べよう云ふ御招待だ。初めての土地にでも斯うした御最負の出来る俳優冥利を染々感じ乍ら招かれた料亭へ行つて見るに藝妓らしいのが二人で他に客はない様子然も其内の一人は中々の美人で由來北の方面には根つから舞臺度胸の無い私は(決して謙遜ではありません)一寸面喰つた形だ所を先きでは五分も隙かさぬ取扱かい振りさうもあろうか私を呼んだ方の藝妓云ふは妙子云つて一年程前に小樽檢番から出たのだが實は牛粹の江戸つ兒で幼い時から東京の吉原で叩き上げた云ふ腕云ひ研き上げられた艶云ひ免に角斯う云ふ場所に馴れない私をポーッとせしめたのは無理ではなかつた(尤もこれは後に聞いた話だが) 偕而この場の始末は餘り失禮に當るから一切端折つて仕舞つて其後毎日鏡に向ふ私が時々四邊を見又鏡を覗き込んで頭を撫で、見たり妙な咳拂ひをした事もあるさだけ云はして貰はう其内日が經つて一座は打上げて各地を巡業暫くして第二回目の小樽興行の機會は來た勿論彼女が首を長くして此の機會を待つて居るだらうと人知れぬ期待もあつて乗込の足も輕う覺えた初日が開いたやつて來ない二日目未だ陰も見えぬ三日目使りもない流石に一座を連れ妻子を抱へた身の夫れさなく閉合して見るに云ふ事も憚られ然りして期待を裏切られた淡い失望不安が日を追ふて織んになつたその興行も愈よ打上げ云ふ日の夜初めてそれらしい使が來た偕ては案じた通り病氣でもして居たのかと駈付けて見るに果してさうだ氣はあせつて居たが病氣で云ふ成程さうでもあるらしい何所やらに元氣がないそして藝妓商賣がしみる嫌になつたから此儘連れて行つて呉れい云ふサア事だ俄が仕立の色男其邊迄稽古がしてなかつたでは事がすまず其場で逃げを張る智恵が出ればこそ

第三景

踊り下手に入る。
オーケストラにかぶせて賑やかな鳴物始まる、太い綱を引いて祭衣装の子供達大勢出て来る。暫らく車を曳く思ひ入れの踊りがあつて背景とぶ。

背景デコラティブな祭りの氣持ちを現したるもの。

前景の綱は第三景にも續いて、尙大勢の同じ衣裳の子供達綱を曳いてゐる。

激しい音と共に一同綱の切れた思ひ入れにて尻もちをつく。

切れた綱の端を持つて歌舞伎衣裳の八尺ばかりの大男、小さい花車を曳いて出て来る。

子供達驚く、

巨人中央に來て、花車を臺にして腰を下ろす。

巨人のつらねこざかしいわつばしめ、みづほの國の豊の秋、千代を壽ぐわれこそは、大和の三郎昭和とて、めでたき御代に大阪の、萬歳うたふ松と竹、その奉祝の行列を何と三辨のレビニ共、一人二人はジャズくせへ、オーケストラはいとわぬめへがみ、其力がみ力ぐき、ソロもバレもひとつかみ、祝はうて手玉にトウダンス、チャトルストンとなげ飛ばす、テクニカラーに

兎に角お茶を濁して宿へ逃歸つた翌早朝から「何時の出立ですか其時間には用意をして停車場へ出ます」云ふ退引ならぬ電話だ「豫定を繰替へて最う出した」云々苦し紛れの拙ない返事も其場通れビク／＼者で停車場迄出て見るにお陰でさうやら妾が見えぬ先つ仕て遂つたり其時計りは發車時間待つ一分間千秋の思ひ汽車が動き出してから漸う心が落付き首尾よく出し抜いたと思ふたは大違ひ實は出し抜かれて女は次場所が室蘭である事を心得て先きの列車で最も既に出發して終つたは神ならぬ身の知る由もなく至極無事な顔で室蘭へ着いて見るに先刻お待兼アツき氣も顛倒危く珍も溢せられようとする所妻子の手前やつ心を落付け目顔で制して置いて免も角表は威儀を崩さず宿へ着いたが間もなく女の宿からの迎へそこで今は之迄の腹を据へて出掛けた上自分には妻子のある事も打明け且つ無謀の擧を誡めた處、女は暫時黙考の末而かも悲痛な決心を眉宇に浮べて何うして一座の女優として仕込んで欲しいとして自由癡業の引取人になつて貰いたいとの事迷惑至極の話だが是れ位の女難に恐れをなしては梶原源太に申譯相立たず實の所は嫌さもよう云はぬ弱い心から抱へ主の方に電報するに同時に引受けの所も自分でよければこの旨を申送つて兎も角も一段落は付いたいや永久に此事件は解決したので語り女は間もなく迎へに來た抱へ主に取敢えず連れ歸られたのは云ふ迄もないそして其後は何の沙汰もない三度目の小樽興行に行つた時は早や檢番を替つて其所には居なかつたをして其時に警官から聞かれる儘に最初からの経緯を物語つてオホン一寸脂下つた所さうでしたか實はあの女は貴優の前に來た舊劇の俳優某に逆上させて夢中になり散々入れ上けた末手も足を出なくなつた所で棄てられたのですが性懲りもなく警官の話し「へえーそうでしたかいやさうでせう」「ふふッ」ミイヤ早ヤ苦いし事／＼

これが前の御大典前の舊い事ながら今思ふても苦笑が込み上げて來る失敗談

お足はねへ、いざやそろつてキネマよし、惡くいやだとンシャルと、唯はおかねへ松くまの活動ぶりを見よやエイ

子供達、車をとらんとして巨人と争ふ。

子供達引込むと同時に洋樂に變り希羅の武人、楯と槍を持つて八人出て來る。

巨人と争ひ、敗れて歸へる。

和樂になり、入り替りに、馬に乗つた日本の武士（馬を體につけた扮装）二人出て來て、巨人と激しく戦ふ。

やがて入る。

洋樂になり日本娘六人出て來て、巨人の周圍を踊る。

次第に巨人浮れて來て踊る。

第四景

背景、中央より上下に回轉する仕掛けあり、テンゴの早い小品集。

C 熊のおどり、二人。

D ダンスソロ

F 踊り囃子

A ダンス 八人

B 猫々、二人

第五景

急に絢爛な舞臺にかわる。

旗を手にした、御大典奉祝分列式

(完)



松本泰三

曠古の御大典を迎へ奉り御慶の至りに存じます。

道頓堀の各座も奉祝の赤誠を披瀝して記念興行を開演してゐる。その中でも特に注目すべきは中座の廓治郎一座であらう。關西大名題の全部を網羅したとも思はれる歌舞伎の大一座が、この記念すべき曠古の御大典にあたりに、我大阪が生んだ個有の名狂言たる「天下茶屋聚」然かも奈河龜助原作「大願成就殿下茶屋聚」に、日本のセツクスピアとも稱すべき大近松の「心中天網島」を、これも近松翁の原作通りで数多い狂言中から選定して上場した事には大いに意義のあることではある。

随つて編輯方針も中座の廓治郎一座に置いてみることにした、本誌も一段の慎重さを以つて、近來稀に見る名家揃ひの内容をお見せすることが出来て編輯者も悦ばしい。

「大願成就殿下茶屋聚」に就いて東京よりは、瀧美清太郎氏、落合浪雄氏、京都よりは森ほのぼ氏、高谷伸氏、大阪にては高安吸江博士、中井浩水氏、高原慶三氏、富田泰彦氏、南木芳太郎氏の諸大家より

又「心中天網島」に就いては京都より藤井紫影博士、山本修二氏、大阪にては石村松太郎氏、木谷蓬吟氏より又先年近松二百年記念祭を催行された大阪朝日新聞社よりは平井常次郎氏と内海幽水氏との諸大家より久方振りでの御執筆が願へて讀者諸彦の研究慾に充分なる満足をお與へすることが出来ると思ふ。

本月も紙面の都合上俳壇を休載するの止むなきに至つたことは寄稿應募者諸君に對し甚だ申譯のない次第であるが惡しからず御了承を乞ふ。

來年度よりは編輯方針を在來より一新したものに考へてゐる、本誌を只「幕間のお娛しみ」のものでなく「むつかしい研究的なもの」でもなく「充實した内容のもの」であり、それに「道頓堀」らしい氣持と研究考證と同時に興味津津なるものをも掲載する考へて、今から、暫時新年の準備にかゝつてゐる。

來月は例年の通り「顔見世」號である、この方面の研究考證の記事は勿論、本年度の道頓堀の總勘定の記事を歌舞伎、新派、喜劇とあらゆる方面よりの記録を斯界の諸大家に依頼する豫定である。この一本を座右に置けば一目して昭和二年度の大阪劇壇が語り盡せるものにしたく思つてゐる。是非御期待下さると同時に早々お買ひ求めの程を今から切望しておく

昭和三年十一月一日發行
月刊「道頓堀」第三年
第廿六輯

誌代は前金でお拂ひを願
ます。

郵券代用は一割増にて御
註文を願ひます。

御相談の上廣告掲載の需
めに應じます。

定價 金參拾錢 (郵費五厘)

昭和三年十月廿八日印刷
昭和三年十一月一日發行

大阪市南區久左衛門町八条地
松竹合名社

編輯者 鳥江 鏡也

印刷者 山上 貞一

大阪市東區船場町千二百三〇
印刷所 中央堂印刷所

大阪市南區久左衛門町八条地

發行所 道頓堀編輯部

電話 六六八五番



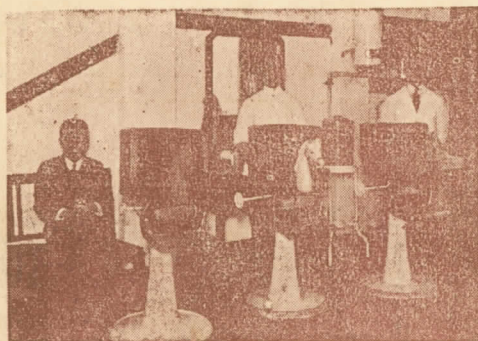
白木屋美粧部

二階

小林千代子 擔任



洋髪お結上、斷髪の御相談……
美顔術、美爪術……お化粧……
お着付、御婚禮のお支度……なご
寫真は當部のお仕上げ姿



コドモの國

美髮室……四階

寫眞の様に變つた設備で坊
ちやん姉ちやんのお氣に入
りの床屋で御座ります

大阪 堺筋

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和三年十月廿八日印刷
昭和三年十二月一日發行

若く明るいの顔になる

リート白粉

金參拾錢（郵一錢五厘）

阪大店齋平齋尾平京東